



神々

(上)

アラン

高村昌憲訳

序文

上品なやり方で、つまり自分自身を救済するために哲学する人間が、或る日彼が抱いた幻想を私に話しに来ました。彼は、長い間続いて来た大きな間違いを説明して、それは恐らく全てが真実であると言いました。彼は、丘々が続く風景を眼で追いながら、列車の中にいました。斜面の一つを見ると村の方へよじ登っている頭の大きな怪物がいます。複数の羽を備えていて何対もの長い足が付いていて、素早く行って仕舞いましたが、兎に角それは何か恐ろしいものでした。それはガラスに止まっていた蠅でしかなかったのです。この一瞬の間違いと思ひ込みは、彼に魔法をかけたのです。真実は、私たち自身のことでも私たちを騙し、間違いは私たちにより良いものを教えている、と彼は言いました。彼の考えでは、歴史の全ての見方は極めて単純なこの事例に倣って理解することが出来るとのことでした。幸いなことに、私たちの認識における驚きは、その最初の状態であるということです。彼は急いでいました。反対に私は、恐るべき問題においては極めてゆっくりと進むつもりです。何故なら、ここで私がついて行きたい方法は少しも実行されていませんし、私が僅かに先行して行って、読者に先ずは抽象的な形に基づいて現在の探求に関して指導する観念を示すことは悪くないからです。

私たちは、板ガラスを通して屢々事物を認識します。蠅は必要ありません。私の活動として最も小さなものでも板ガラスの斑は、イメージが回転したり振れたりして、波のように事物の上を散歩します。そこから私は、私たちが何時も何らかのガラスを通して見ている警告を先ず引き出しますし、ガラスは不安定です。ところがこの重大な観念をその儘残して置いて、それに従って沢山の歪曲が知られて来ます。例えば、水中で折れているように見える棒の真実は難しくありません。私はここでの想像力、つまり事物や私の活動に従う他のものを歪曲するこのガラスにおける、ここでの想像力が何処にあるのか探求したいのです。そして私は、その活動そのものの中に想像力を見出します。私はその時、私自身であるようなもう一つのガラスを通して見るかの如く、少なくとも全ての事物を見ていないのを理解します。しかし更に言うなら、私が行っている様々な活動は、私が行動するならその意志があるからにしろ、私が恐いならとっさの感情からにしろ、あるいは単に生命を保証する呼吸や、血液の循環が継続する運搬活動からにしろ、それらは私が聞くもの、味わうもの、嗅ぐもの、触れるものをまさに絶えず歪曲していると私は理解しています。私が想像したいのは、実を言えば今度は私が間違っている場合です。そして結局のところ、全く過度なそれ自体の活動によって、その奔放さが最早何処にあるのかも、何を見て何をやっているのかも分からなくなるまでになっているのです。その意味において私たちは誰でも少しは狂っています。人が認識するものにおける自分自身のこの部分は出来るだけ、全ての知恵を消去することにあるのは極めて明白です。そこに辿り着くのは、科学の結果が証明することです。苦勞しないで辿り着くことはなく、それは私たちが追い求めるのを余儀なくされる、抽象的なものから具体的なものへの順序が理解されることにあります。それは私たちが茫然自失し続ける広がりの中で、先ずは数字と距離、次にそれらの動き、次に衝突と出会いの結果、次に化学的な見地からの内部的結合を採取することで、それらのことは骨の折れる道によって、ついには私たちが情熱そのものに従うまで人生の何らかの活動を理解するように導いてくれます。それは

私たちの間違いの原因が一時的に先ず消去されただけでなかったことや、認識する人の混乱がついには確実な真実の地位を占めるに違いないことを分かせてくれます。もしも私たちが全てを知ったとしたなら、狂人の不条理でさえも全てに真実があるのを肯定する代わりに、私たちはその点について十分に認識するのです。

間違いにおいては積極的なものは何も無い、とスピノザは言っています(1)。そのことは〈神〉に関しての人間の想像力は全てが真実であることを意味しています。私としては困難だらけの教師のように、それは賢者の瞑想と一緒にいる予言者の知恵としての直観やわめく姿を育成することを嘗て諦めました。しかしながらこの偉大な諦念は、私の考えでは、その到来を遅らせるのが賢明であるとしても、排除させることは出来ません。それは真実としての全諸宗教の教義を当てにすると同時に、出来るだけそれを先に延ばすことです。もしも私が神になって、神として神々を思考することが出来たなら、全ての神々は真実になるでしょう。しかし人間の条件とは、神とは別の者に対して神を問うことであり、神とは別の外見に対して神の外見を問うことです。あるいはもっと適切に言うなら、神とは別の出現に対する神の出現は、常に想像力による真実を熱心に求めながら、それは真の神の出現と同じでないものに対して神の出現を問うことです。水中の棒は折れているように私には見えますが、それを真っ直ぐに立て直すことに用心します。反対に私は、この歪曲を測定してそこから水と光についての認識を引き出します。虹も又、色彩の屈折を理解しない者には他の場合と同じで、ここでも幻想でしかありません。この錯覚は否定されるものではなく、確証されるものです。

単に人間の肉体の動揺した活動と、恐怖や希望のようにそこから生じる情熱の結果である私たちの視覚の部分にとっての困難は、全く別ものです。というのも物理そのものによって説明される歪曲は、まさしく常にあるからです。目が疲れると飛んでいるように見える紙魚の形から、疲れそのものが分かります。耳が悪くなるとあらゆる騒音とぶんぶんいう自分自身の耳鳴りが混じり合います。もっと簡単に私が耳を指で塞げば、本当のものでないが、しかしながら私は本当の沈黙を作ります。これらの場合には想像的なものは何もありません。そして私は、芸術を熱心に研究して追い求めて行く時にそれを体験したのですが、想像力は何時でも後退して逃げて行きます。地平線上に見える月は、天頂に見える月よりも大きく見えるというのは真実ではありません。ここでも水中の折れた棒を測った時のように、あなたは測定してみてください。それは良く知られていることかもしれませんが、余り考察されることのない何か新しいことを発見します。それは月の形が両者の場合、同じ大きさであるということです。あなたが大きく見えると思っても、最早大きくはないものを見ているのです。この例を何度も良く考えてみると、私たちが最も驚くべき誤りについて、数々の偉大な見解を私に与えてくれました。ここにおいて私は文字通り、正確に我がスピノザを把握しているように思いました。というのも今度のこの誤りは何でもないからです。従って物理学には引っ込んでいて貰わなければなりません。少なくとも私に次の様に言うに違いありません。「お前の誤りは、お前が信じている処にはないのだ」。私がそこから判断力を攻撃し得たことに気付いて下さい。私はまさに、この種の研究を軽視することはなくなりますが、それは少なくとも極めて困難であり、対象も明らかにありません。しかしそれは、もう一度想像力を当てにしないことでした。何故なら、もしも私が天頂の月よりも地平線上の月が大きいと見ないならば、少なくとも私の全ての心もその様に見るのを信じることは明白であるか

らです。それ故に屋根や煙突の間から、青白い月の顔と出会うことは意外であり、驚きであり、恐らく恐怖ではないでしょうか。私はそれを確信しています。私が全く日常的な例を長い間遍歴したとしても、お許し戴きたいと思います。地平線上の月の意味は、より大きく人が見ているのを信じていることですが、実際にはより大きく見ていないのです。私が未だ誰にも理解させられなかったことです。全ての人はお互いに不快にさせられます。或る人々は恐らく、大問題による大きな変化を予想して苛立ちます。今の私には必要な時間はたつぷりとありますし、もっとずっと近付きやすい他の理由も沢山当てにしています。それらは何人かの読者を、この困難な点に連れ戻すことになるでしょう。

想像力は全てが人間の肉体の中にあります。少なくとも人間の肉体の活動に依存しています。私は少なくとも道具のようにこの原則を堅持して、幻影でなくもないが月の出よりももっと感動的な他の幻影を考察するようになりました。眩暈は私たちに侵入し、殆ど私たちを突き落とすと同時に、その深淵は私たちの眼前で掘られます。ところが、深淵は決して掘られていません。掘られることはないのです。色彩も影も、何時も同じ外見を持っています。単に私たちは落ちるように感じているだけであり、身を守り、恐怖を経験するだけです。ここから淵が襲うあの恐ろしい外見が現れます。ところがこの外見は同じ様に現れません。私たちが現れると思っているのです。実を言えば、私たちが事物の視覚上の形状と見倣したがるものを筋肉の関係とか、活発な一時的な感情と関連づけて起こるように至るこの種の知覚には、長い間注意しなければなりません。立体鏡はもう一つの好例を与えてくれますが、反射が教えてくれるだけです。というのも各人は先ず凸凹を見ていると思うからです。ところがそれは着色されたイメージにおける或る印であり、凸凹に少しも似ていないで、私たちに不安を少し与えます。そして私たちは、体を前に出したり後へ引いたりして、歩き回る距離とか確かな対象による脅迫的な凸凹への感覚を回復させるのです。地平線上の月は、恐怖や驚嘆による一寸した活動による以外に、そんなにも大きく私たちには見えないように思えます。ここで極めて正確に測るならば、光線の悪戯と眼の構造の結果であるような世界のイメージを何ら変えるものではないと、確かに性急すぎるかもしれませんが私は結論付けます。

私たちが、葉の付いた樹木の枝に、反芻する牛の頭とか人間の顔を遊び半分に見るようになったり、壁の亀裂に横顔を認めたくなくなるのも同じ時です。私たちが見ているものにおいては、事物を変えることは少しもありません。この変化は純粹に想像的なものに止まっており、そこからは全てが肉体の態勢の中にあります。そして一種の身振りにあり、それによって私たちはその様な対象を前にして、まさに存在しようとしているのであると理解して下さい。しかし、読者をここでついにはっきり分かるようにさせるには、もしも余りに学校臭い問題に幾つ興味を持つようになったなら、眼に見えるあらゆる稜を持った立方体や階段を前にして、少しの時間でも黙考することを私はお勧めします。それは全てが教科書通りに描かれていて、好きな時間に下からも上からも随意に認識することが出来ますし、引かれた線は現実の世界によって少しも変えられることがありません。そこから理解されることは、その時感じる変化が求めている処にはなくて、寧ろ人が考えている対象に使用される何らかのやり方にあり、それは違った風に配置されて、違うやり方で動き出す私たちの体の中で準備されるということです。しかし、私たちの現実のド

ラマがその時に大変上手に分離された分析方法で、私たちは神々の本質について啓発する自分を見出すのです。何故なら、注意することが重要ですが、最も活発な情動においてさえも、世界の外見が何時も同一で、全てが真実であると私たちは理解するからです。私たちは自分自身への如何なる自己満足も無く、私たちの主題の中で主要になり、私も何度もそこに戻って来る、あの眼に見えない観念を何かによって形づくりします。そうです、私たちは物理学者が手を付ける非の打ち所のないイメージの中で、私たち自身の感動を探します。並外れて大きな関心があるそのイメージの説明を求めますが、そのイメージは答えられません。私たちが、隠れて待ち伏せしている存在や、全てが魂に満ちているか、あるいはタレスが言ったように、全てが神々に満ちていると信じさせる事物の裏側にある神秘的なものを形づくるのはそこにおいてです。もしもタレスがそのことを言ったとしたら、そして如何にそれを理解したのかは、私には歴史から引き離れる問題です。私は一人ひとりの問題にしたいし、私自身の第一の問題にしたいのです。というのも、私が述べたこれらの幻想は、世界の光景が嘗て何時もそうであったように、その外見においては純粹で忠実な儘であるのと同じ様に、回り道しながらも力を残しているからです。未開人は考えるのが下手ですが、狙いは正鵠を得ています。そして、技術的完全さと思想的混沌との対比は、確かなデカルトについて行って、先ずその観念を偽りの世界から離すように私たちを導く必要があります。何時も非常に雄弁な私たちの情熱を、より近くで握り締めているとはいえ、デカルトの道は正しいものでした。確かに私たちが人間社会から、私たちのイメージや仲間のイメージまでを創るように事物を考察するのは、もっと正しいことです。その宗教は沢山の源泉から出ていますし、それらの源泉は常に歌っています。私は更に、過去は遠くなく、そして私たちの幼年時代は絶えず再び始まることを、幾つもの方法で説明しようと思います。しかし、最良のテキストとは何時も繰り返してばかりいる最も平凡な経験であり、私たちが望む度に同様に私たちは自分を騙すのであって、騙されるのではありません。神々は姿を現すのを拒みます。宗教が寺院や彫象や犠牲的行為の中で発展するのは、決して行われることがない奇跡によってです。だが、私は更にもう一つの観念も提出しなければなりません。尤も、その奥底に隠された襞の全てを、広げて見せることはないでしょう。決して姿を見せない宗教の不可思議は、全て語られて来ました。その言語の問題については全てが述べられるには、多くが不足しています。私たちが身振りにしろ表情にしろ、話をする時は世界の中に一つの現実の対象を作ります。人は身振りを見ます。言葉や歌を聞きます。芸術は一つの文体でしかなく、或る方法で、あるいは別のもう一つの方法で、言葉とか身振りを定めて、体を眼に見えないものに与えるのです。これらの新しい対象である詩とか寺院は、世界と違う素材で創られているのではありません。そして、世界の曖昧さなどは少しも世界になく、既に芸術作品においては前提にし難いものです。芸術作品の動きや形は、反対に私たちを偶像崇拜から逸らせるものに適合させて完結させる何ものかを持っている、と恐らく言わなければならないでしょう。ギリシアの神殿は内部を持っていません。その大理石は、大理石でしかないと告げています。詩そのもの、取分け音楽も、別の方法によって同一の種子や、同一で均質の結晶体を示しています。純粹な対象であり、全ては外部にあります。それは絶えず私たちの情熱を純化します。そして目覚めることも止めません。まるで私たちは、この驚くべき機会において、自分に戻るように強く命令されていたかのようなようです。又、伝説は不変であるという唯それだけで、私たちの狂ったような思考を再び対象の規則に、つまり一種の経

験に従わせます。だが、その代わりに吟味されて味わうような情動に立ち戻ることによって、その足跡は倍になって眼に見えないものになります。何故なら経験は全てが行為であり、私たちは探究の方法を全て見失うというよりも寧ろ、シャルトル大聖堂の彫刻の明細表を敬虔に作成する者たちのように、私たちは的を外れてそれらの方法を訓練し、子羊やライオンや鷲を発見するのですが、それは最初の状態に止まって信じている儘であることであるからです。従って、新しい神のための新しい寺院は、何時も森林の神を追い出しますが、二番目の段階では永遠に偶像崇拜を打ち立てます。

一人ひとりには、物語を疑うことが出来ると思っています。実のところ私たちは、物語を疑うには非常に立場が悪い処にいます。何故なら、肝心の対象そのものが不十分なものであるからです。その様にして経験は試みているのであり、その周りを回っていて、繰り返していて、測っていて、その時は直接的には不可能なのです。だが、これは経験というものが不可能なのです。そして物語批判がスコラ的で些末であり、可能とか不可能という破れた観念に基づいて全てが作られているのです。この種の探究においては、切られた足は再び生えないとするあのルナンのなおかしな観念が避けられません。ところがご存知のように、ザリガニの足は再び生えるのです。そしてシャムの王様が氷を見たことがなかったために、氷など存在する筈がないと思ったのを、ヒュームが馬鹿にしたのも当然でした。地球の裏側の非常に遠い所も、存在するはずがないと思われていました。それで私が、私自身のためにも、これらの大変に辛辣な考察を絶えず繰り返すのは、皆が言っていることや皆の思考を制御するためには、実際に知っていることは少ないのを思い出すためです。それは、事物における経験は事物を決定することであり、只それだけを決定することです。そこから理解するのは、常に私たちを支持させる感動は、信じるのを止める何かを物語に決して見出さないということです。奇跡が語られても最早、認識されることはないでしょう。実際に否定されることもないだろうということです。そして、ここでの理解力の厳しい方法が導くのは、一つの驚きの結果であり、私たちには十分に養成されていない批判の厳しさです。というのも、物語を否定するのは時間の無駄であるからです。しかもそれは、それ以上の何ものかでもあるからです。つまり投げやりによって自らの判断を失うことであり、自ら学ぶ機会を確実に失うことでもあります。例えばヘロドトスにおいては、航海者たちが見た物語を一人ひとりは見出しますが、彼らは太陽を反対側に、つまり北の方に見たと語っていました。多くの人々には信じられない状況が現れましたが、この上なく知見ある人々にとっては、反対に明らかにすべきことでした。しかしながら、その理由は些細なものです。というのも、その様な物語について言うべきことはまだあったからです。つまり北の方に太陽があったのは、嘘であったかもしれません。いいえ、違います。不条理と判断する物語を信じないなら害があります。自明で決して困難でないことを信じるのが約束されるなら、虚弱で広大な地方や無防禦な盲信を、その時剥き出しにさせられることになるのです。私が自由な精神を理解するのは、その様なものではありません。又、私は人が語るもの全てを、どんなに小さくて詳細なものまでも信じるのを、モンテーニュ流に好みますが、常に条件としているのはそれと同じだけの疑念とか、もしお望みならそれと同じだけの信頼を守りながら、信じ難いものや信じられるものまでも好みます。それは問題を開けた儘にして置くことです。そして偉大な考察に値するこの簡潔な展開は、様々な方

法で私の大きな主題を明らかにしてくれます。何故なら一方で、私たちは見ているものよりも聞かされているものの方が、容易に信じ込むのが人間であると理解しているからです。しかし他方で、全てを信じることはもっと健康的ですが、それは信じることを学んでから、信じるものの中に決して閉じこもらないことであるのを、私はそこから引き出します。人間の本性について学びたいなら、人が言うところが不条理であろうとなかろうと、あなたはありふれた考えしか引き出さないのに、本物らしく見せようと整えることよりも、先ず最初に何倍も価値ある純真な状態に置かなければなりません。私はこれから沢山の例を示しますので、何卒ご承知置き下さい。

しかし、それは未だ言語の外部を考察していることでしかありません。言語は、肝臓や腎臓と同じ様に自然の事物です。言語とは、話すにしろ身振りにしろ、その方法から人間構造や人間の状況に関する真理を表していないと私に信じさせるものは何ともありません。しかしながら、常に疑いたいと思うこの知的部分を信念と結びつけるのは悪くないので、私は先ず身振りの言語とその足跡である自然な文体の全て、そしてその次に抑揚を付けた叫びの近くで、少しは吟味したいと思います。草むらの中で横たわる人間は、犬や兎がやるように自分の形をそこに記します。そしてその人間は思考し、その思考に従って寝返りを打つので、草むらのベッドの中で自分の思考を書いているのである、と私は言うことができます。実を言えば、この文体を読むのは容易ではありません。それ故に、全ての造形芸術は不可思議です。人間自身の動きが不可思議です。従って、その疑問は少しも提出された儘ではありません。それに反して、中が空の鑄型とか足跡、あるいは自然な結果としての彫刻そのものは、人間が自分自身の通路を記すアーチ形天井とか門とか寺院のように不動の儘であり、人間の一瞬を定めています。このことについては、人は何時までも考えることができます。そして良く考えてみれば、こういうことが現在までの探究における私の主な対象なのです。というのもこれらの偉大な文体が、実際には〈神々〉であるからです。しかし特に注意することがありますが、それはこれらの文字が人間の真実以外のこと、従って歴史の真実以外のことを何も言わないと仮定する可能性は、少しもないということです。でも、人間はその動作やその作品において何時も神のようではないのです。恐らくそこには出来の良くない喜劇役者が発見されるでしょうし、狂気が浮き彫りになっているものです。しかし又、型のあるそれらの作品は、全てが敬虔な心で平等な対象ではありません。力強い作品は、人が見破る労に値する何かを押し出すものであり、祈りや奇跡や巡礼の中心となるものでもあります。つまり人間のイメージを前にして忠実な人は、自分の本当の条件の中に連れ戻されて、最良の態度によって自分自身と和解するようになるのです。それ故、それらの作品は保存されます。のみならず更に模倣され、他の芸術家たちがこの立派で偉大な言語を語るのを学びます。つまり彼ら自身の方法に従って人間の真実を表すのを学びます。彼らは、良く言われるように美しい作品から靈感を得るのです。そして傑作は、少しもそれに似ていない他の傑作を生んでいるのです。羨望は、平板な模倣を創るだけです。反対に感嘆は、自分の作品を生むようになります。そこから分かることは、趣味上の誤った行為という事実の部分は自分を表しており、芸術史は一連の隠された真実と価値が等しいのです。人間性が何ものかであるのは、第一にそこからなのです。

話したり歌ったりする言語については、もっと沢山の曖昧さがあります。情熱や情操の感情による最も内面的なものを絶えず表現する人間の言葉遣いは、それ自身が不安定で、常に多少なりとも秘密めいているのは、愛情とか計画とか商売による自然な暗黙の同意からであるのは誰で

も知っています。そしてそれは、何かによって言葉も国家のように違っているのですが、更にもっと適切に言うなら、国語は地域や職業の慣習によって短縮したり、アクセントが違ったりして区別されているのは、経験が理解させてくれます。従って人間を再発見するには、根源まで行かなければなりません。ご承知のように教育制度は絶えずこの変化に、いや寧ろ言語の不断の崩壊に反対しています。しかし取分け詩や講演や歴史や回想録や論文などの偉大な作品は、文学的教養のある人々を、書いたりその結果として話したりする方法に帰着させましたし、それは儀式によって聴衆に押しつけます。その様にしてイオニアの方言がホメロスによって生き残りました。又、その様にしてモンテーニュ、セヴィニエ、ヴォルテール、モンテスキュー及びその他の多くの人々が、美しい言語を保存しました。そして私たちは絶えずたどたどしい言葉や、始めに子供時代の片言の言葉を救い出します。それらは、私たちが大変自然に身近で押しつけられているものです。作品のその力は、ここでより明白な真実に依存していますし、又はもしも不可解であって欲しくないならば、モンテスキューと同じにパスカルに、バルザックと同じにスタンダールにも、各々明らかなことです。従って、保存される話し方には真実が記され、統辞法や語彙によって既に論理と描写を支えるのに適しています。しかし美もそこではやはり重要です。それは散文の中で感じ取りますけれども、他の真実によって容易に理解されることもありませんし、暗黙のうちに示されます。それは言葉の音や変化から生じる、造形と同じ名状し難いものです。その代わりに喉や全身の動きは、人間的な均衡と人間と事物との調和を表している限り、殆ど全てが詩の中にあります。そして無意識の挙動を認める常に新しい方法によって、余りに良く知られている思想を絶えず若返らせています。もう一度言いますが、美は真実の忠実な証人であり、真実に先行しています。更につけ加えて言うなら、書いたり読んだりする前に詩は言語を定着させ、リズムや韻の規則が言語の短縮形や地方訛を立て直すのに力強く貢献しています。そして序唱部を歌う人はそれらの規則を自然に尊敬するようになりますし、宣言することさえあります。これらの理由から話し言葉そのものは、人が思う以上に正確に多くを思考する道具になります。ご存知のように最も厳格な論理も、一つの言う方法を他の方法に依存させる関係の表でしかありません。語彙が思考という宝物を閉じ込めていることや、偉大な作品の言語を知る者にとっては下手に描写することがない、ある種の可能性を持っていることは余り知られていません。オーギュスト・コントは、それらの沢山の例を与えていましたが、私は単に探究を方向付けて規制するのに特有の辞書の項目としての言葉であるcœur（心）、peuple（国民）、méchant（意地悪い）、nécessité（必要性）、goût（好み）、grâce（優美）、repentir（後悔）、parlement（議会）、constitution（組織）を指摘するだけにします。しかし、私は習慣による慣用語の全てを引用しても良いですが、全てその中に事物の学習や人間性の項目を私は見出します。これらの詳細は必要ではありません。言語による作品や、主として崇拜の対象である作品は、表しているように見えることよりも恐らくそれ以上のものである何かを閉じ込めているとか、それらの作品も神々の彫像と同様に不可思議で、そして予言されるのも同じ位に相応しいと思ひ起こすなら、それで十分です。私が敢えて信心深いと言う一方法を、今は十分に認めて戴けるでしょうし、それは真の全ての宗教を想定しているものです。この様にして私はパスカルに真っ向から反対します。パスカルは、成功を収めた宗教だけが自然や証明に反対する、と好んで言っているのです。しかし私は、この著者

においても、自らを信心深いと言う他の人々に多くの疑いを持っているものを不意に見付けます。それは信じるまでに至らないことであり、私が思うにパスカルは余りに幾何学的であったということです。あるいは換言するなら、キリスト教徒になるためには不十分な不信心者であったということです。（完）

（1）『エチカ』第二部の定理三三。

第一部 アラディン

第一章 昔

ソクラテスの亡霊が私に言いました、「人間どもは絶えず神々の後を追っている。まるで見失った力強い召使いたちを探していたかのようだった。しかも人間どもは彼らが望んでいることを、自分自身で手に入れるのに慣れない以上の骨折りの多くを、これらの眼に見えない祈りに費やしているのだ」。眼に見えないものは何もしてくれないのを、人は知らねばならないことなのです。一晩で建てられた宮殿を人は一つも見ることがありませんでしたし、牛がいなければ耕作された畑も見ることがありませんでした。それに大河の流れを変えたり沼を干拓したりするには、多くの人間による日々の労働がなければなりません。しかし乳母たちは、何処かの遠い国ではこんな風ではないとか、昔はこんな風ではなかったと、それでもなお語るのです。まるで不条理な生活が望ましいかの如くであり、人間は魔法使いや妖精の力で嘗て生きられたかの如くです。そして如何なる国でも、富は労働なくして齎されず、経験はこの規則を何時も確証するので、私は長い間自問させられて来た、とソクラテスは言いました。更に何処から人はその様な虚構を創ることが出来たのか、物語の中の物語に倣って、乳母の中で最も年老いた老婆が私に語った日まで、その中の条件は昔全ての人間が感じていたものです。そこから彼らに齎されたのが、寵愛、幸運、祈りという狂った観念であり、それらの観念によって人間たちは、全く自由に解放されることは出来なかったのである、とソクラテスは言いました。大変に年老いたその乳母が、それ故に語ったところによれば、人間たちは彼らに良く似た巨人たちの中で昔は生活していたが、巨人たちは人間たちよりも遙かに力があり、パンや果実やミルクや生活の糧になるものを常に保存していました。そして様々な方法によって、恐らく殆ど費用をかけていなかったのです。というのも巨人たちは、自分たちが気に入った者にそれを与えていたからです。同様に巨人たちは、彼らの気に入ったように懇願さえすれば、人間たちをあちらこちらへ大変迅速に移動させてくれました。そこから人間たちは、労働したり、歩いたり、馬車とか舟を造ることを少しも考えなくなっって仕舞いました。寧ろ人間たちは全く自然に雄弁家になり、単に巨人たちを観察したり、巨人たちが気に入ることや気に入らないことを見分けたり、微笑したり又は時には涙を流して悩ませたり、巨人たちが要求することを単に言葉に出して言ったりすることに忙しくなりました。しかし、巨人たちの気分の変化を全て理解出来たことは一度もなく、まさしく気難しい拒否にはその通りに我慢しなければなりませんでしたし、突然の心遣いもありませんでした。そして、もしも何者かが当時、自分の仕事で何らかの富を自分自身に与えようとしたなら、馬鹿にされたに違いありません。何故なら、それらの働きは巨人たちが保持している莫大な貯えに比べれば、極々僅かなものだったからです。更に巨人たちの足は、これらの仕事を始めから遠慮なく望むことさえもなく、屢々蹂躪しました。それ故に人間の知恵は全てが何時も話す術や、納得させる術を知ることに戻るのでした。そして悪戦苦闘して物事を変えないで、苦勞する様子もなくそれと同じ変化を巨人に起こして貰うために言うべき言葉を学ぶことを、人は選択したのです。要するに重要な仕事は、あるいはもっと適切に言うなら唯一の仕事は、気に入って貰うことでした。そし

て先ずは理解出来ない不可解な主人たちを怒らせないことであり、主人たちは人間たちを養い、保護し、移動させて、最後には世話を果たしているように見えたが、何時もなかなか承知しないのです。人間たちが主人であるか奴隷であるかは決して分からないこの種の生活が非常に長く続いたので、その結果依頼したり、期待したり、自己より強いものを当てにしたりする習慣が人間の本性のうちに拭い難い痕跡として残りました。そして今日では最早、その様な巨人としての痕跡も外見もないのを私たちは理解していますけれども、人間たちは至る所に巨人たちを探しています。そして新たに彼らを見るだろうと何時も信じていて、屢々呼び出しますが、人間たちが昔に解決しなければならなかったこの依存状態を後悔しているとか、期待しているとか、恐れているかどうかを知り得ることはないのですが、多分愛していたのです。何故なら全てを期待している者を、何故愛さないことがあるのでしょうか。何故、不可能なことが全て私たちからなくなるや否や、全て恐れるかもしれない者でも愛さないことがあるのでしょうか。又、地方では何故、少なくとも私たちの役に立つ者を、彼が気に入っているからとのことで、多かれ少なかれ恐れぬのでしょうか。それ故に人間たちはまるで巨人たちの再来を期待しているかの如くです。そして如何なる巨人も決して姿を現さないのに、お祈りをして供物を供えて、そして網で魚を捕ったり、矢が鹿の急所に当たれば、紛れ当たりを喜んで何者かに感謝することを忘れません。ソクラテスの亡霊は、この大変に年老いた乳母から手に入れたという多くの詳細を、更につけ加えました。私にはこの信じられないような話を、真面目に本当のこのように言っているように見えました。亡霊は、もしも現実的な何らかの経験が先ずこれらの奇妙な習慣を形づくらなかつたなら、人間たちはこれらの奇妙な習慣を体験させられる以上に、更にもっと信じ難いと考えたのを私は想像します。

一つの観念は一つの虚構です。人は観念によってしか決して認識しないことを、長い経験が教えてくれます。生の儘の事実は、取分けそれが日常的なものであるとすれば、前もって使用されているようなもので、全てがそれで完結されている場合のものなのです。それ故に、「私たちは大人になる前に子供だったのだから」というデカルトの言葉を、誰が十分に吟味したでしょうか。人はそのことを良く分かっています。分かり過ぎています。その代わりに、虚構が私たちに必要なのです。そして私たちがいなければ、何ものでもありません。ですから私が読者を導きたいと思った三行目で十分理解して戴けたとはいえ、私は巨人の虚構にしがみついたかったのです。判断を先延ばしにするこの率直なやり方は、寓話作家やプラトンから身に付けました。私の真似が上手であろうと下手であろうと、そんなことは殆ど大したことではありません。重要なことは、観念は形づくられたものであって、与えられたものではないということです。既に事物ではないものにおける関係が全てなのです。精神はそれを探し求めて、そして保持しています。私の寓話が、全ての寓話と同じであること、そして全ての空想と同じであることを別にしても、それは空想的なものを何も持っていません。全ての人々にとっての私たちの条件は、極めて正確に言うと、先ずは腕に抱かれて使用されます。従って、私たちの最初の経験は勿論真実ですが、あらゆる事柄について私たちを欺きます。この様にして私たちは、間違いだらけの子供の観念を通過して、大人の経験に近付きます。多くの大人たちは注意を払わなかったことですが、子供であることとはどういうことか、良く知っていました。立て直されて保存された、これれらの一連の誤りを私はこれから十分に詳しく述べたいと思います。そして、そこに私は再び真実の核を見付け

ることでしょう。しかし、読者は少しも驚嘆しないものに驚嘆し、十分に思考するには余りに知り過ぎていたことを発見するに至らなければなりません。その様にして全ての術策がここに集中して、更に白状されました。その様な主題は只単に予備的思索であるばかりでなく、継続されたものになるでしょう。というのも半ば意識的に先延ばしにすることは、殆ど全てが宗教的行為の中にあるからです。人間たちは自分たちの思考の終焉を恐れています。

それは曖昧で偽りの知覚を発見するための何かであり、誤りが無でしかないことを示す何かでもあります。しかし、この欠如は余りに些細なことです。全ての人間の真実の過去と全く身近にある古代を、第一に背景として見なければなりません。そうすると、そこでの誤りは確実さが増し、何時も吟味されます。そこには、感動的ですが常に偽りの経験があります。結局のところ、それは間違いに対する一種の荘厳な手ほどきです。ところが更に感情の真実は、そのことで少しも変化させられません。反対に、外部原因が何者かの悪意によってしか決して力を持たないという観念は、憤慨によって確かに勇気を力強くする性質があります。兎に角、思考がその時事物の中で女王となり、後悔するもの以外に悪を他に認めないのは事実です。その様なものが簡単に言えば、幼年時代の判断です。そして、それは恐らく昨日の私たちの思考の全てでしかありません。何故なら、誤りはこれに続く発見の方式であり、保存されると同時に超克される間違った観念であり、忘却は幼年時代の法則であるからです。そこでの記憶が忠実で間違いがないとしても、如何なる思い出もそこにはないのです。私たちは前方に幼年時代を押し出しますが、その様なものが私たちの実際の未来です。この意味で如何なる間違いもなく対象を認識する精神は、全く何一つ認識しないと言えます。しかし余儀ない欲求や愛や成長は先ず、その人間に準じた善とか悪を描きました。そして、大いに要求したり期待するお陰で手に入れた習慣は、勇気と巧みさを発展させます。あらゆる発明家にこの幼児の部分があり、恐らくそれは人が思っている以上にあります。それ故に、その様なものが野心であり、その中ではやむを得ず最初は暴君になります。そして更に、暴君の中の暴君になったのです。又、その様なものが精神の幼年時代です。従ってデカルトの警告は、彼が思っていたよりも遙かに大きな力を持っていました。とはいえデカルトは彼自身の足跡を常に身に付けていたことを私は確信していました。

既に十分ご理解して戴けたと思いますが、常に身近でしかも大変に激しくて切実な過去の詳細な目録を、私たちが作るのは観察によるものではありません。この歴史は、全ての歴史と同じ様に弁証法的です。それは間違いなく熱心に検査することの不十分さによる判断力の不断の修正が、結果となって出て来ます。子供の何故という疑問は、屢々理解されません。「何故私は子供なのでしょうか」を意味しますし、それと同様に「何故私はもう子供でないのでしょうか」を意味します。一つの目覚めから他の目覚めへのこの早い歩みは、常に未来に向けて成長する活動の中で再建されなければなりません。そして思い出は弱い観念しか私たちに与えないと私は思います。それ故に幼年時代の弁証法、換言するなら忘却の段階を、発明しなければなりません。忘却とは夢の実体であり、プラトンが見たように私たちの全ての足取りにおける或る種の思考の側面でもあります。そこでは子供の作品が役に立ちそうです。それらは遊びであり、歌であり、お話であり、本質的には何時もお話なのです。ですからこれらの中に、一つの秩序を見付けなければなりません。しかし数学は別にしても、いや恐らく数学でさえも、私たちの系列も同様に全てが経

験に基づいているので、最良の秩序が示されるように一つの秩序を試行すれば十分でしょう。そして、特に読者は証明を決して求めないことです。それらは寧ろ、読者が見出す方が良いでしょう。証明は、秩序を敷衍する以外には決して行いません。人が回帰することなく追われて単に懐かしむだけであって欲しい、と私は言いたい取り消しのきかないこの過去以外に、他の出発があったと私は思いません。私はミルクの河で養われました。しかし、それは何時までも続けることは出来ませんでした。私はこの樂園を追い出されました。何故なら、私がそれを望んだからです。そして私自身の豊かさであるこの罰を私は進展させます。最も不変的で豊かな虚構が、直ぐさま立ち上がって来るのを人は見ます。するとあの神学的巧妙さが、愛されて惜しまれて拒否された幼年時代の条件によって、既に説明されてもいるのです。決して死なないことを望まないのは誰でしょうか。しかし、生き続ける状態が何ものかにおいて何時までも死ぬことである時、決して死なないことを望むのは誰でしょうか。そして、この感情の広がりをも分解して、最初の探究の快い瞬間で先ず死ななければなりません。（完）

第二章 宝の国

ミルクの河、チョコレートの岩、等々。その観念は次のとおりです。人は労働せずに生活していましたし、自然が全てを与えていました。私たちは屢々、目の前にあるものを、大変遠くに探します。かくして〈宝の国〉の生活が眼下にあります。それは子供と同じ生活です。空想の生活ではありません。子供には極めて現実的に、きちんと用意された食事があります。尤も子供が望む時に、望んだように出来る訳ではありません。しかも、確かに欲望と実現の間には、障害があるのは自然なことであるという観念もありません。というのもこの障害に気付くとしても、それは母親や父親や料理人たちの意志に比べて大変僅かであるからです。それに殆ど何時も、そして何時も最後には、合図という奇妙な方法で移り気なこれらの大人たちを魅惑するようになるので、子供には絵画の背景として、そして物理学の概要や無尽蔵の富や人間のために出来ている全世界として止まります。家庭という浜辺について、私はその前で書いていますが、大西洋や小石や浜辺の荒々しい力は、単に遊びの条件として受け取られているのを人は大変良く理解しています。漁でさえも遊びでしかありません。そして遊びを可能にしているこれらの障害の本来の意味は、障害を乗り越えるとか乗り越えないとかは殆ど重要ではないのです。水の深みに行ってはいけないという禁止が、大西洋そのものの脅威に先立って長い間やって来ていると言えます。この様にして障害が離れて行くか、あるいは自ら身を逸らせます。食べること、身を守ることの必然性は、もう一つの必然性を大変確かに認識させてくれますが、世界の必然性は何も約束していません。従って幼年時代は、殆ど全てが未だ尊敬と愛である感情以外には、障害として認識していません。しかしその様なものがまさしく、私たちを最初に啓発する経験です。そして私たちは誰でも知っていますが、一瞬で真実でなくなる経験はそれでも真実であったのであり、それにつれて次第に人はあのミルクの河まで遡るのです。というのもこの隠喩が隠喩でなかった時代があり、更に人間という織物が子供の全てをすっぽりと包み、全てを創る血液に漬かっている時代があったからです。しかし、人間は決して遡りません。事物は未だその様な部分があるのを、人は単純に夢見るだけです。いずれにせよこの楽園は失われ、人は後悔する振りをしているのです。虚構の中には偽りがあることを、私たちが十分に知ることは決してないでしょう。その点に関して遊びは、私たちに教えてくれるかもしれません。しかし分けて考えなければなりません。

黄金時代における如く、地上の楽園における如く、ここで見分けるために私が見るものは、先ず無垢と無知です。それから私たちは見間違えによって出発しました。だが、そのことは大変に正しいことでもあります。何故なら、子供は大人になることを選び、絶えずこの選択を行っているからです。子供は常に容易さを軽蔑し、困難なものを追求しながら好奇心が強く、多くの下らない非難や本当の間違いや本当の懲罰を通して、自分の運命を先がけて行っているとさえ言えます。憤然と怒るが、未だそのことが何であるか分かっていない子供には、悲劇的なものがあります。子供は求めます。言葉と表情を混同します。水や砂を掻き回すように、情熱も掻き回します。ここで一つの必然性が予感されますが、未だ運命と言うしかありません。しかし原罪は至る処にあり、その意味においての原罪は認識される前に良く欲せられることです。しかしながら

指の先のように予感されるものは、まさしく正真正銘の必然性です。そして、それは先ず力と釣り合っていて、小さな両手で届かぬ所には姿を現さないけれども、子供は全く無知である訳ではないのです。何故なら子供は玩具を落としても、拾い上げることが出来ないからです。子供はよろめいて、掴まる所を探します。壊れなくても叩き、自分の体をぶつけて来て、怪我をします。歯茎で玩具のがらがらを遊ぼうとします。抵抗するその世界の次元は小さく、未だ恐ろしいものではありません。恐ろしくはありませんが決して譲歩しないことに、人は恐らく苛々するに違いありません。その時は一つの仕事が働くのですが、必要性との関係は少しも示されません。子供にとっての大きな障害は禁止であり、唯一の罪は不服従です。ここで何一つ不足していない一大神話は、少なくとも最早真実でないことを表しています。この指摘の後では、対象を持たない信念、あるいは対象と同一でも対象の不在と見做す信念には、感動は覚えなくなるでしょう。同様に奇妙な幾つかの証拠も嘗ては存在しましたが、今は最早ありません。その様なものの多くは、年老いていくものの無意識的な影響です。

人間は働くように宣告されました。まさにその通りです。又、そのことを十分に勘定に入れていたのもまさに真実です。しかしながら、その承諾は誤魔化しがなく行われるものでもありません。でも、労働が全世界を存在させることでも決してないでしょう。余裕ある現実には、人間がそれを悪戦苦闘して変えるのに応じて広がります。しかし労苦を越えた彼方には、常に一つの光景が広がっています。そして観念論が真実を残すのは、人間の行為が達することの出来ない空間です。その点で良く感じられることと思いますが、解明すべき観念は沢山あります。先ずはこの章の目的に従って、労働なくして手に入れた財産という観念を、注意して見なければなりません。子供であるということは、労働がなければ決して存在しません。少なくとも労働の必要性は、子供には現れません。子供が成長し筋肉を付ければ、そこに仕事が行われます。子供は学びますが、それは子供の仕事と呼ぶものです。しかし子供は決して生活費を稼ぎません。そうでなく、生活費を稼ぐのであるなら、子供を抜け出たのです。外部との接触を断っている学校は、まさに少しも給料の出ない場所とか仕事を具体的に示しています。そこからは一つの高貴な観念が発展します。幼年時代のあらゆる観念と同じ様に高貴ですが、その経験には大したことを存続させて置くものはありません。農奴の仕事には、尊敬の気持ちは少しも無いということです。尊敬に値することは、征服することよりも美しいことであるという観念です。知力は、何よりも権力より高く評価されます。そして、単に学ぶために働くという観念は、本質的にはユートピアです。これは幼年時代が継続しているだけです。好奇心と呼ばれるものは把握する以上に約束をするもので、少しも噛み付こうとしない筋肉上の労働に連続するもので、単に探るだけです。何時も失望させられる散歩という趣味のものも、純粹さの名残りです。散歩者の疲労と準備が整っている食事の間には驚くべき断絶があります。この断絶は、やがてお分かりのように、初期の幼年時代の知覚においては至る所にあります。しかしそれは先ず全てのものの中で最も緊密な関係で、それに倣えば所謂働かざる者喰うべからずであり、子供の日常生活で最も隠されているものでもあります。ルソーは、お菓子を約束することで競争に興味を引こうとしました。でも、これは常にお菓子を作ることはありませんし、小麦を生長させることでもありません。筋肉の消費とそれを償う事物の間の結び付きは、一人前の人間に何時も理解されている訳ではありません。そして、こう言って良ければ、子供は先ず無知であるのを学ぶことを、大人によって説明されるのです。

。美味しい食べ物が、何かの箱か台所などに保存されているとします。問題は箱を開けたり、ドアを開けることであり、生産することではないのです。従って子供に与えられないから拒否されている、と理解する子供は一人もおりません。人が望んでいないからであると子供は常に思います。この考えは進んで考えて仕舞い、何時もそうなるでしょう。貧しさと豊かさを人が先ず理解するのは、その様な予測に倣うからです。しかしその抽象的方式は、社会や交換という事実を間違って把握します。子供の交換は、少なくとも欲望によって規定されます。如何なる価値の概念もないのを理解するのは驚きです。しかし欲望された事物に従って、閉鎖的で眼に見えない処まで行くと、幻想的なものは何も考え出されないのも分かります。子供は、経験そのものの中にいるのです。

それ故に食べ物で出来た世界という観念は、恐らく最も注目すべき事例であり、虚偽であっても絶えず何よりも吟味された観念です。そして、分配の問題が一番であり主要であることを、一人前の人間なら何時も過度に信じるようになるでしょう。そこで彼が夢の中のように時々垣間見るのは、吝嗇でない人々も十分な財産があるようになるだろうということです。それは消費し得る財産の総額は、何処かに隠されていると信じることです。その時は、もしも労働が停止したなら、人間の生活は直ぐさま不可能になるでしょう。生の儘のアザラシの脂肪を引き裂き鹿の血を飲む北欧の住民は、果実が摘まれるのを待っていることを想像する熱帯地方の物語が生まれる以上に、私たちの困難な状況をもっと良く示しています。更に、自然が極度に肥沃であると、人類の増殖にはお構いなしに動物の群や植物の繁殖によって、自然そのものが危険です。しかし、常に迫り来るこの必然性は、重力そのものと同様に身近にあって冷酷であり、子供が死なないうちには触れることも出来ません。それ故に、世界は正しく好意的であること、労働と同じく悲惨も何者かの意地悪の結果であることを、経験は寧ろ良く子供に教えています。大地の果実は皆のものであると言われていています。しかし、大地の果実というものはあるのでしょうか。庭園は良く人を欺きます。労働の果実しかないのです。(完)

第三章 出現

子供は最初、抱かれたり車で運ばれたりします。人は、事物のように子供の向きを変えます。或る物や他の物を見るように言います。又、子供が望みもしないし予想もしない仕事や会話に連れ回します。私は、子供が良く後悔したり、背後に視線を送ったりしているのを眼にします。これらの外部からの運動は、自らの運動よりも、先ずは遙かに優位を占めています。かくして世界は、断片的部分となって子供に投げ込まれます。子供が長続きするのは本当に滅多に無く、探究し続けることも本当に滅多にありません。子供が理解出来ない時間とか理由は、子供の探究から引き離されることになり、望みもしなかった観客にされて仕舞います。窓を開けて行列に見とれる女性は殆ど勉強をしません、彼女が産む子供のことは何を考えているのでしょうか。これらの心象には現実は何もありません。何でも構わないものが、何でも構わないものであり続けることが出来るのです。事態は外部の意志によって、現れては消えて行きます。物語という容易な旅は、先ずは経験になります。でも、容易なのでしょうか。何時も容易ではありません。ところが困難は何時も、頑固な何かを屈服させるものです。同意が得られれば、事態は独りでに進みます。空想的なこの世はそれ故に、捏造されたものではありません。それは現実の世界そのものであり、始めは人間の世界を通して見られたものです。単に庭園のように全てが出来上がっているのではなく、探究が乳母の活動を続けます。子供が自分だけの方法で探究を始める時でさえも、全く避けられない障害に直面しますが、突然に如何なる困難も無く勝利するのです。例えばドアが開くのを待っている猫が、偶然に利益を齎してくれることが起きるようなものです。ドアは長い間、魔法の障害です。馴染みの品物である玩具でさえも、子供には手の届かない戸棚から屢々取り出されます。物事の続きが、暗闇の隠し場で中断されます。それらの他に、日食や月食も加えましょう。それらは所構わずに、迅速に短い眠りになります。時間は変わりますし、場所も変わります。これはまるで、隠したり出したりする遊びと同じです。哲学者メヌ・ド・ビランは、視覚は観念論であり天空の遠方にとっては常に真実の儘残される、と言いました。しかし私たちの最初の生活は、私たちを運ぶ者たちの気まぐれによって、自然のこの大画面を引き裂きます。

私たちを取り囲み、役立っている人間の存在は、その時はもっと極めて確実になります。母親は先ず私たちを包みました。そしてその人間の織物も、そんなにも遠い処にある訳ではありません。従って、最も変わり易くて知られていない世界の部分とは、私たちが先ず見出して認識するものです。独立していても馴染みのあるその他の言葉は、母親であり父親であり兄弟です。乳母、女中、料理人そして庭師です。財産も景観も、全てが彼ら次第です。彼らは一人ひとりが、自分の領分と権威を持っています。しかし一人ひとり拒否も出来ます。それ故に魔術師や魔法使いの世界が、最初から架空でないのが分かります。事物の出現は、人物の出現に依存されます。そしてこの奇妙な物理学の作用が、実を言えば呪いです。ファウストの大仕事は悪魔の名を呼んで、それを呼び出すことです。この方法は私たちが望む限り、私たちには不思議なものではありません。寧ろその名が、門や棚を開ける力強い人間を来させる時、それらの事柄が古い時代にその様にして存在していたことを私たちは思い出します。私たちは思い出す、と私は言いま

したが、それは言い過ぎです。というのも、思い出すことは事柄を思い起こすことであり、最早存在しないこと、そしてこれからも存在しないと考えることであるからです。その代わりに魔法は私たちには自然なものでしたし、合図をして貰うことで常に最も実証的な認識という緯糸として、少しは残されているからです。一軒の家には反対側があるように、私たちがその様な日にその様な状況の中で見たと考えることがなくても、魔法は私たちには存在しています。それは思い出と言うよりも、寧ろ記憶です。同様に虚構は、生活の反対側やあらゆる事物の裏側のように、知覚出来ないものとしても馴染みがあり、現存しているものです。

それでは現実とは何でしょうか。脈絡の無い光景とは反対に、現実とは待ち受けているものであり、私たち自身の運動によって獲得され発見されたものです。それは私たち自身の力の中に存在しているかの如く予感され、何時も私たちの行動に応えるものです。幼い物理学者に現実を委ねると、玩具や拳でテーブルを叩きます。飽きずにやり直します。そこから宇宙の小断片は、何時もその力と企図が測られます。それらは端から端に探究された道になります。繰り返し発見する方法を手に入れると、不意に現れるものは何もありません。しかし、夕食の時間がやって来ます。玩具は引き出しに仕舞われます。子供は再び夢の中へ送られます。それらは私たちにとっての事柄ですが、全てではありません。飛ぶ鳥から素晴らしく美味しく焼き上がるまでの道を知っているのは、料理人になった猟師以外にありません。一人ひとりが信じたいこととは逆に、食べなければならないように行儀良く食べるのは子供であり、フォークで音を立てているのはつまらない大人なのです。（完）

第四章 お祈り

要求することとは手段です。要求する術を知っていることは、最初の知識です。そして正確に言えば、言語は最も古い行動の方法です。それは叫びには始まり、先ずは子供にとっての唯一の力であり、遠くから接触しないで動かす力です。意欲の学校とは、説得のことです。つまり認めること、微笑すること、名を呼ぶことは屢々、あるものを手に入れる条件でもあります。それなくしては、単に見せられるだけで拒否されます。当然のことです。礼儀正しさは、弓や矢を前にしてまさしく手段であり道具です。そして名が持っているこの力は、私たちの肉体的力に混じり合って残されています。私たちは事物に話しかけます。言語は空しく、あらゆる側面から考察されます。言語が常に、何であるかを認識したり変えようとする最初の試みであるのを、人は十分に理解するまでに至りません。そうして認識する前に名を付ける避けられない条件が、知識という全ての間接的な方法を説明するでしょう。私たちは人々や自分自身のために、話しますし物語ります。私たちの思考生活の始まりは第一に話であり、それは眠りさえも横切ります。しかし取分け注意しなければならないのは、話が思考よりも先行することです。子供が言うことは、知る前に自然に話すのを理解しなかったなら、殆ど信じられないだろうと思います。母親と子供の対話を分析してご覧下さい。あなたはお分かりになると思いますが、子供はボールのように言葉を送り返します。そして人の言葉を聞くように、自分自身の言葉を聞いて感嘆します。この種の訝は、言葉の最初の意味になりますし、常にそうです。人間のこの反響は、音楽に発展します。しかしもう一方で言葉の音楽は、お馴染みのあらゆる守護神である玩具の主人、果実の主人、ドアや窓や階段の君主殿を何時までも祈る必要性のお陰で、魔術として発展します。これを獲得する方法は、最初に唯一のもので長い間主要なものになり、先ずは認識を創り、次にそれを表す観念に倣って殆ど何時も忘れる言葉の機能を説明します。ところで、もしも対象となっている認識は、人が到達し、操り、魅される試みから生じているなら、少なくとも子供の最初の弱さによって、言葉は心を魅する最初の方法であり、それ故に最初の認識であるのは明白です。人名、挨拶、鳴き声の真似、普通名詞は先ず直接的に私たちの生活に不可欠なもの、恐怖、愛情、欲望に結び付いております。そして全てが、実を言えば「開けゴマ」なのです。少なくとも正確に繰り返す執拗に名を言うものを現出させる呪文は、最初の物理学です。そして、期待と希望を持つこの姿勢は、表現するための力強さが言葉に保存されるものになります。詩の動きや単純な物語の動きさえも、名を呼べばその存在が与えられますし、殆どのものの存在が与えられます。そして聞き手の立場は、もっと正確に言うなら語り手でもある時は、最初の幼年時代に倣った期待です。『千夜一夜物語』の女性の語り手シェヘラザードは、一つの物語からもう一つの物語を被せて行き、執行を先送りにします。これらの一つ一つの物語は、奇跡への好奇心を倍にしますし、他の幾つもの約束事によって何時も裏切られます。見られると思っただけで期待すると、他の亡霊が物語に出て来ます。人は走らなければなりませんし、諦めなければなりません、何時も希望していなければなりません。亡き妻エウリュディケを連れ戻そうとするオルフェウスは、全てが想像力によるテキストのものです。というのも、恐怖、不安、驚きのような情動の感情は、私たちの肉体に一種の足跡を与えます。そして、ご存知のように触角としては数々の感覚の中で、最も

騙され易いのは本当であるからです。そして私たちの感覚が、耳鳴り、色斑、飛蚊症、蟻走感、唾液分泌、嘔吐感、その他の激しい期待の結果のようなものから、幻想の始まりを生むように血液や体液によって動かされるのも本当であるからです。しかし、もしも私たちがそのことに注意したなら、これらの活動の形状は私たち自身の肉体の構造以外は決して提示していませんし、大河の流れは未だ変わりありません。しかしながら、肉体のそれ自身へのこの眩きは、実際に生まれて知覚された対象である話の数々によって消えさせて仕舞います。言葉によるこの呪いは、それ故に肉体や血液の妖精たちを始めに出現させますが、直ぐさま沈黙のドアを、出来事に対して開ける儀式的で荘厳な朗読によって分散させます。これらの効果は演劇に力強く出ていて、その行為を外部へ送り出しているのを理解させてくれます。というのも期待することとは、期待で一杯になることであるからです。

想像力の現実、常に私たちの肉体の何らかの動きの中にあります。それは他のものではありません。しかし結局のところ、名を付けて呼び出す術が舞台全体に占められていて、呼び起こすその演技が全てを未来へ運び、そして直ぐに過去のものになります。物語のあらゆる策略は、少なくとも起きることで私たちを占領しますが、物語 (récit) には叙唱の意味もあります。言語のこの二重の意味は極めて注目すべきです。物語の中で起きることは、常にこれから現実起きることもあります。前兆は私たちの創造です。そして連動は詩の法則であり、創造を意味します。詩のこの魔法は学ばれるものであり、それは経験によります。もしも名を唱えることが魔法使いたちを出現させて、彼らによって欲しいものを出現させる唯一の方法であり原則である時代があったことに気付いたなら、雨を唱えて雨になるのを望んでその音や身振りを模倣するでしょうし、雨を降らそうとする人々には少しもびっくりすることはありません。私たちが先ず全てのことを知覚するのは人間の世界を通してである、と言って簡単に説明することです。しかし、この考えは抽象的に自明なものとしても暗雲の中に残されていて、その内実を発見出来ません。現実の条件をしっかりと把握した分析が無いので、私たちは神々を創り出すのであると私は理解しています。人間又は取分け子供が、人間や人間の意志や気まぐれに至る所で見るとしても、大雑把な真実でしかありません。そして、もしも間近に見詰めても、それは少しも真実ではありません。子供は、大人と同じに現れる儘の世界しか決して見ませんし、その世界はあるべき通りに現れます。そして私にはあるが儘と同じである言えるでしょう。しかしお話は、物語にしる詩にしる祈りにしろ、事物や動物や人間や名付けられる全てのものによって、別の世界を創ります。現実の世界は決して現れません。魔法は最早、森林よりも容易に人間を呼び覚ますことが出来ません。その魔法の糸は、想像上の人間が私たちに与えて奪い取る事物のものではありません。それは言葉から、眼に見えない事物や人物へ行くものです。私たちがその背後を常に探している存在は、万人にとって最初のものである威圧的で更に皇帝然としているとも言える一つの行動様式の結果です。多くのものに先走りして私が言いたいのは、その様式が同じやり方で岩を泉に変えたいと思うことよりも、やはり言葉によって人間を変えたいと思う神話であるということです。人間のこの現実の世界はあるが儘のものであり、岩のように無口で盲目で、望むのは器用さと滑車と梃子です。つまり道具と試行と労働です。しかしそれらは、最初から見付かりません。寧ろ信じられることよりも、知られることでもあります。信じられるものとは物語です。何故、幽霊は常に幽霊の物語であるのか、又ここでは何故同じ関係の中で物語を創り直すこと

しか出来ないのか、十分にお分かりのことと思います。この変わることのない事態は重要です。子供はそこから多くのことを手に入れます。というのも、それが全ての対象であるからです。祈りの尋常でない効果に、人はびっくりします。でも私は、祈りが物語よりも信じられるものであるとは考えません。そして、それだけでも大したことです。その上、祈りが叶えられた物語は、お伽話です。言葉は言葉そのものを確証します。その様なものは言葉の美德です。

今後はあの有名な物語の『アラディン又は魔法のランプ』に、欠けたものは何もありません。私はそこに、私たちが最初の経験と思われるような子供らしい世界を見ます。果実やダイヤモンドのような富は、何処かの暗い閉じ込められた場所にあります。少なくともこれらの事物の鍵を持っている召使いをやって来させる事が問題です。そして来させるのと同じ方法は、ランプを擦るように重要性を疑うことなく人が召使いにやらせて理解するこれらの動作の一つを、全く素朴に模倣することです。そしてお気づきのことと思いますが、この実際の労働は表徴の水準では低く評価されますが、子供の肉体的水準では高められます。何故なら子供は表徴によって手に入るからです。ところで全てのお伽話のように、ここでも表徴の上に表徴が重ねられて行きます。というのも、お伽話はそれ自体が一連の表徴でしかなく、語り手は一つのランプが他のランプを忘れさせて、あらゆる種類のランプを次々に擦ることしか行わないからです。更に、情動を蘇らせる肉体と血液のあのささやかな神々がこの夢想の中で、一つのランプの明るさによって先ず動かされ、このことは地下の金銀宝石を全て所々に輝かせています。その様にして大地の妖精たちは行列を作って上位の神々に従います。そして、もしもそこにランプを擦るのを拒む神学者が居たなら、自分を理性的であると信じるのは間違いなのです。私は未だ十分に理性的ではないのです。(完)

第五章 労働

子供は労働を知らない限り、観念論者です。そして大人にとっても、子供として生きているのであるなら、それは全て本当のことです。その様な観念は要約されたものです。でも大変に隠微です。ランプを擦るどれ程多くの仕事が、祈りの手段でしかないことでしょう。人から忘れられた小説の題に『バラオ』というものがありませんでしたが、それは人間のように話したり服を着たりするように教えられた猿の話でした。私はそこに大変示唆に富んだ言葉を見付けました。物語について私は、それらの物語を信じることにしています。それ故に十分に文明化されたこのバラオは、植物園にいるガブリエルという名の弟をその夜に、呼びに行きました。弟に服を着させて酒場から酒場へ連れ回しましたが、大変に美しいテキストに仕上がっています。只、ガブリエルには麦藁帽子の夫人とか果実のような、彼の気に入ったものに飛びかかる悪い癖がありました。大騒ぎから逃げ帰ってから、バラオはガブリエルに諭しました。「人間どもはそういうものだ。食べたい物を手に取る前に、お金で前もって知らせる必要があるのだ」。以上のお金の観念は、子供にもためになるものです。そしてこの観念は殆どが多くの大人たちにも、この儘残されています。ヴィルロワ公はある日、賭博へ出掛ける時に従僕たちに言いました、「私のポケットにお金を入れて置いたか」。そして、この大きな子供の言葉は、沢山の機械を回転させる一スー銅貨にも化学的エネルギーが十分にある、と主張する物理学者の観念よりも最早不条理ではありません。この単純な人間が少しも思わなかったことは、仕事をさせるために休息しているスー銅貨のエネルギーが、発条を引っ張るように先ずはスー銅貨の凝集力に対して働きかける仕事を手に入れるだけであるということです。同様に、あの高貴な公爵も金の購買力は朝から晩まで大変に筋肉を使い、疲労困憊するまで動く世界の全仕事を前提にしているとは少しも考えていませんでした。そして子供も同様に、幼年時代に起因する数々の原因によって、アラディンの財宝が労働の果実であることを理解出来ません。するとそれ故に、これらの人物たちは皆、彼らにとっては見世物でしかないようなその世界の部分に関して、夢幻劇の中で生活し思考しているのです。あのパークレー司教(1)が、この世は私たちの裡の、私たちの思考の中の版画でしかない、と思い込んでいたのは分かっています。彼にとってこの世は、司教の夕食でしかなかったのです。そして、この子供のような大人はカナダ東部のニューファンドランドまで布教に行き、そして常に私たちの知覚は少しも実体を持たないと確信して、そこから戻って来ました。人々が帆を高く上げる間、彼は船の中で何もしない儘でいたのです。乗客の仕事とは恐らく、この世で最も愚かです。何故、旅行、旅行と大騒ぎするのか分かるというものです。子供に話を戻しましょう。子供の現状は如何なる力もなく、操縦の苦勞も知らずに、先ずは単なる乗客なのです。既に言いましたが、子供自身の労働とはかの有名な白百合のように大きくなることであり、労働せずに、糸を紡ぎもせずに、子供自身の中身を只成長させるだけです。しかもその子供には、礼服と家と食料が与えられています。お伽話のように生きています。その様な観念は、根底からもう一度理解しなければなりません。

かの郡長であったメーヌ・ド・ビランは、熟考して役所の事務機の抵抗を試みながら、この世界に接触しました。触覚と視覚とその他の感覚に関する彼の『回想録』は、当時の極めて饒舌な

世紀における多くの哲学論の中で、殆ど唯一抵抗しているものでした。しかし、人が語ることを信じるという分別は、既に私たちの背後にあります。この郡長は大変に実証的な思想家でした。人は自主的な努力によって、自分に与えるものしか現実の世界として認識しないことに彼は注目しました。例えば意志的に息を吸うことで僅かな匂いを探究することは、私たちに依存された行いであると同時に、その行いは私たちに依存しないのを知ることでもあります。手による触覚は、この基本的な思想を直ぐに明らかにします。何故なら、衝撃を受けることは常に自己を自ら感じることでしかないからです。その時は、自分自身の感覚しか分かりません。しかし、例えば郡長の事務机のような固体を探究するなら、それは全く別な風になります。何故なら、意志的な動きに従って人が自分に繰り返して与えることができるのは、軽く触れることから押しつけるまでの多少なりとも感動的な印象です。そして運動の規則と私たちに依存している努力に従って、これらの全ての感覚を備えた出来事を思い出すことです。それにより世界は私たちから後退し、存在を受入れ始めます。要するに存在を与えるものとは、外見ではなく、統制されて一つの労働の条件に基づいた外観です。そして世界が現実のものとして認識されることになるのは、労働とその結果の関係です。そして換言すれば、それらの法則は単純な傍観者には中々確認出来ません。それ故にメヌ・ド・ピランは、視覚は観念論的であると言っています。視覚による探究で可能な労働は、決して無いということです。私は頭を回します。色々な違った色が眼に入って来ます。空全体が、何の苦勞をすることもなく入って来ます。だがその上更に、視覚だけでは全く如何なる事物も私たちに認識させてくれないのを、人は良く知っています。反対に行為的である触覚は、その努力によって現実を体験させてくれることを、例の哲学者は単に強調したかったのです。しかしこれでは未だ観念の半分でしかありません。その努力は労働ではありません。従って郡長の労働は殆どが全て魔術でした。いずれにしても彼は正しい道を歩んでいました。

独り深遠な盲目の幾何学者や、事物を視覚で捉える軽薄な幾何学者について正確なことを彼が言うのは放って置いて、私が彼の観念に沿って一步を進めながら少なくとも比較したいと思うのは、道具に世界の重さを感じる盲目の仕事と、余りに容易な運動から刻一刻と変わる色彩の光景による安易な瞑想です。旅行は屢々、乗物任せでいながら、一つの仕事であるのも本当です。しかし探検家や登山家という、その仕事が常に風景の変化を伴うのを感じるのに最も有利な場合を考えてみても、仕事と変化の間に釣合いは少しも無いことに人は気付きます。ここには不思議な話が残されていますし、お伽話を思い起こさせるものが現れます。これに反して盲目の仕事は、その場所の端から端までを安定した変化に絶えず報いていて、その場所でその仕事を続けるために人は身を立てます。この時は観念論が少しもありません。何故なら腰、腕、道具そして手応えのある大地の間に生まれるこの交換の中で感じられるものは、あらゆる部分に恣意的でない法則で強く結ばれた、まさしく対立項であるからです。休閒地の外見を、耕作地の外見に変えるのは、些細なことではありません。これは最も深遠な物理学がついに理解したように、一連の視覚に堅実さを与えたのは労働です。従って農民が立ち上がって熟視する時は、最早アラディンの財宝ではなく、如何なる種類の財宝でもなく、彼が見ると同時に感じている自分自身の労働です。彼はこの視覚を克服しました。彼はその支配者です。この世界は最早遊戯ではありません。そして二つの観念が同時に現れますし、それらは相関的になります。一つは力のものであり、もう一つは必然性のものです。力のものとは、つまりそれを認識しながら絶えず行われるものである

からです。必然性のものとは、世界の忠実さが確信されることでしかなく、世界の慣性と呼ぶことも出来ます。それは約束を反故にしますが、約束よりもっと価値の高いものです。というのも服従することの条件、事物という組織の中で鋤いたり掘ったりする組織としてそれ自体の中に入って行く条件に基づいて、人はついに望むことを知りますし、望まないことが何であるかも知るからです。しかし私は敢えて言いますが、もしも農民が偶然に金貨で一杯の壺を発見したなら、彼は夢を見始めるでしょう。彼自身の生活に夢を見る、と私は言います。かれは魔術師になるかも知れません。

以上によって私は視覚 (vision) という言葉の意味を完全に理解しました。というのも民衆的言葉遣いは視覚とか、単に見ただけの事物によって理解するので、絶対的に偽りの光景に最も深遠な観念を直ぐに私たちに投げ与えながら決して躊躇して揺れないからです。そうです、人が道筋や帰還を確保している時でさえ偽りなのです。エジプト人にとって日食は恐らくこの様なものでした。三十桁のゼロにも苦労しない計算家にとってもその様なものです。そして天体の運動や恒星の誕生や衰退にまで私たちの手から遙か遠くの仕事を導入するためには、一種の盲目の注意と光景の拒否が必要でした。しかし幻影を抱く知的な者でしかない優れた生徒の仕事には、常に危険があります。というのも眼で見る幾何学者は鉛筆やペンによって与えられた光景に満足する、とメヌ・ド・ピランは言っていたからです。彼は明証から明証へ、そして直観から直観へ動きます。彼は、真理を全て這入って来る儘にします。盲目の幾何学者が本当の幾何学者であり、決して何も保持せず、彼は思考すること全てが彼の行うことです。かれはそれを創り、そして創り直します。その時、三角形は最早私たちに考慮した秘密ではなくなります。従って優れた生徒はそこに、神の眼を描かずにいられなかったのです。しかしその三角形は、前進したり回転したりする規則に従って歩き回り固定された道です。そこからは、言葉遣いが大変有効に説明しているように、常に自己への予告と理解力に対する証明が生まれます。そして恐らく手と記憶によるこの仕事、自己への誓いでもあるこの仕事は、既に真の仕事の模倣でしかありません。幾何学が幾何学しか生まない限り、二人の幾何学者の間の相違は殆ど大したことはありません。というのも、それは可能な世界に過ぎないからです。反対に、もしも力学や物理学によって事物の方へ幾何学を導きたいなら、事物を見出すのは手になります。観念論者の眼は、決してそれを見出しません。しかしながら、ここは困難な観念を説明する処ではありません。けれども私は、幻影を見る人々、軽率な人々、地から足が浮いた人々、世界の夢想家たちが奇跡を、つまり労働無しの財宝を絶えず期待しているのを私に理解させてくれたことで、メヌ・ド・ピランに敬意を表して置きたかったのです。この同じ夢想家たちが世界の存在の証明を探究しますが、その様な証明は決して発見されません。私はその様に良く信じています。彼らは、存在とは何であるかを知らないのです。それは何時も、あのパークレー司教の夕食でしかないのです。

子供の場合はもっと遙かに自然ですが、同じことです。そして私は、子供の経験がまさに何時も世界の経験に違いないのですが、如何にして私たちのあらゆる間違いの始まりになるのかを説明しようと努めます。子供は労働を知りません。遊戯は、永続性のある結果を持たない努力でしかありません。遊戯は、石蹴りのように砂上に描かれます。消されては又始めます。そこには、結果が直ちに手段になるような労働の中にある連続的なものが少しも見出されません。この相

違は、例えば行列や歌や踊りや儀式のように、遊戯が全く虚構である時にはっきり現れますが、それらの遊戯が手仕事を模倣する時には、更にもっと顕著になります。何故なら、そこには何も作られないからです。全てがそこで話されるか、真似をされます。遊戯は世界に食い付いていません。子供は他の方法で育てられ、保護されているからです。世界に決して食い付かない者は、世界を知りません。事物にまで仕事の法則を持ち込み、盲目の力学によってそれらを結び付ける術を知らない者は、荒地を麦畑に見せるのが辛いものであると知ることが出来ません。全ては可能です。何が起きても構わないのです。あの幼年時代の切れた知覚と魔法の旅を一緒にすることで、全てが奇跡であると説明するには十分です。お伽話は、眠っている間に運ばれる旅行者の驚きを表しています。ところが全てが祈りによって手に入る実際の人生を、お伽話はより意味深く表しています。それは労働によっては何も獲得されない実際の人生です。しかしながら、世界はあるが儘のものであり、現れるが如く全ての人々に現れます。しかし神々の中の神である精神は、そこでは先ずアリエル(2)のように戯れ、そして何も発明しないでそれを間違えるのです。私が書いている日々の中に、収穫は小麦の山積みと藁の山積みになりました。しかし私は何も知りませんでした。大地の精霊が畑の一隅に現れてこんな風に命じたので、飾り付けが変わったように私は単に見るだけです。それは人が私にパンを持って来てくれるのと同じ方法です。パンは何処から来るのでしょうか。誰が気にかけているのでしょうか。たとい私が気にかけて相次いで耕作、種蒔き、発芽、取り入れ、製粉、パン製造の光景を自分で描いても、何時も具合の良い夢でしかなく、実際に人間たちの苦勞によって食べているのを知ることはないでしょう。私たちは自分たちが用いる大部分のもの、殆ど全てと言って良いものにとっての子供であり、幻想家です。幻想家の幾何学者は、朝食の小さなパンを食べるように、全てを形づくる数々の三角形を食べていたのであり、それはもう一つの奇跡です。(完)

(1) ジョルジュ・バークレー(一六八五～一七五三)は、イギリス生まれのアイルランドの司教・神学者で哲学者。

(2) シェークスピア(一五六四～一六一六)の夢幻劇『テンペスト』(一六一一)に登場する空飛ぶ妖精。

第六章 ブルジョワ階級

ブルジョワとは、都市に住んでいる者です。そしてこの言葉は、意味するものを良く表しています。ブルジョワは商業を、何よりも手作業が不可欠な畑のものである手仕事に対立させています。ブルジョワと農民の間にある大変に自然なこの対比は、森の労働者やそこから石炭や鉱山の労働者に及びます。ブルジョワの定義はそこから決して変わりません。反対にそれは確立されました。ブルジョワとは、説得させて生活することです。売店での商人、教授、司祭、弁護士、大臣は別に物を作りません。彼らが地表を変えたり、物を運んだりするのをあなたは見ません。彼らに抵抗して戦うのは事物ではなく、人間です。そしてそこから驚くべき偏見が幾つもの何度となく生まれますが、それらの背景には幼年時代の続きしかないのです。ブルジョワは、乳母たちを動かす術と通して成長します。そしてこの術は、王において極めて奥深いものです。でも、それは常により巧妙な幼児でしかなく、より一層見事な魔法使いの杖でしかないのです。大臣が基石を置くのにも私は驚きます。この石工は私の心を奪い、うっとりさせます。実際に大臣は、単に演説するだけで幾つもの石を運ばせます。この奇妙な仕事にあつては、幾つもの石があることを決して学びません。何故、お伽話にびっくりするのでしょうか。命令でその人のために宮殿が建つように、沢山の人がいるのです。だがその上更に、最初の基礎には何らかのお金をかけたのです。というのも、それらのお金は符号であるからです。この魔術は現実のものです。そして、支払うことは学ぶことではありません。ところが収穫する人々の食事を作り、それらを運ぶのは又支払うことでもあり、それらは人を教えます。女中にくつついて遊びながら、塩入れとかスプーン用スプーンを同じ様に運ぶ子供に、あなたは驚きませんか。ブルジョワもその様なもので、常に現実をやっと接しています。そして私たちも昔は全てブルジョワでした。労働者の息子たちでさえそうです。そして労働者は誰もが、値切る時はブルジョワに戻ります。というのも売手を説得することであるからです。社会的権利要求の交渉委員や指導者は言うまでもありません。というのも彼らは完全にブルジョワであり、決してブルジョワでないと言い張る時でも、嘗てない程ブルジョワであるからです。虚構と現実との混合は、この二重の状況による結果であり、私たちの全ての争いの秘密を閉じ込めています。戦争は全てが宗教です。しかし、そのことは全ての人々から拒絶されます。私たちに欠けているのは、自然とどの点で間違えるのかであり、そしてその理由を知らないことです。私たちの間違いが単に幼年時代の思い出どころでないのを、遠回りしながらも気付きます。世界の光景と社会生活は更に、想像力によるあらゆる畏と宗教のあらゆる段階が、私たちの最小の思考においても常に全てが一緒になっていることを説明するでしょう。少なくとも幼年時代にはそれが一層剥き出しです。そして私たちが幼年時代によって理解するのは、誰もが拙い出発をしても、他にやりようが無いということです。神々の秘密がお伽話に見出されるのは、単にこういう意味においてです。そしてこの最初の富は、ブルジョワ的状况に従って十分に増大されました。しかし、その増大そのものにおいて、見えるものを彼の代わりに私はこれから言わなければなりません。それはブルジョワやそれ以前の子供だった状況が、貴重な数々の観念も発展させているのです。そして、それらがなければ、少しも間違えないプロレタリア的思考の一員には自分自身の意識として決して到達されなかつたであろうということです。動

物は決して間違えませんが、動物には、祭壇も立像も虚偽の神々も決して持ちません。それ故に、動物は眠っているのであり、これからも常に眠っているのでしょう。

ブルジョワの生活においては、全てが宗教によるものです。懇願したり説得したりすることは、少しも定め得る規定が無いということです。全てが説得したい相手の人の考え次第であるからです。そして、有用性が理解されない形式的工夫には、無視される危険があるのは明らかです。礼儀正しいのを望む者は、決して十分に礼儀正しくありません。それ故に、懇願するというこの仕事では、全ての慣習が道具になります。ところがプロレタリアは反対に、その礼儀正しさを軽視します。プロレタリアには、礼儀正しさからは何も手に入れられないということです。大地からも、鉄からも、鉛からも、礼儀正しさからは何も手に入れません。プロレタリアや農夫の難題は財産を生産することであるのに対して、ブルジョワの難題は財産の分配にあるということです。但し、人は何時も少しは商人です。乞食は、或る種の純粋なブルジョワに違いないことが理解されます。何故なら、乞食は懇願する技と、心を動かす目印によってしか物を手に入れられないからで、襤褸着がものを言っているのです。失業者も同じ様な理由から、迷わずブルジョワ階級へ送られます。私はここで、全ての認識、全ての感情、そして人間の全ての宗教は、生活費を稼ぐ方法からの結果であるというマルクスの思想に従って、それを敷衍するだけにします。しかしこの思想そのものは、適用される必要性が大きくあります。さもなければ他のものと同じく、幻想に過ぎません。プロレタリアが実際の仕事に従って生活し思考する限り、事物に対するその労働は、自然と無宗教的です。だがその上更に、純粋なプロレタリアもおりません。それにやはり言わなければなりません、純粋なプロレタリアという危険は、礼儀正しさや表徴や信用や説得、一言で言えば宗教そのものを間違えることです。それは宗教を真実と思考しないことです。そして私が当初注意したように、結局のところ全てが真実でなければなりません。非存在とは何ものでもなく、何も行いません。

全ての契約は、労働による組織を取り戻す表徴の調整です。最初の側面はブルジョワ的で、もう一つの側面はプロレタリア的です。一つの訴訟は表徴の中で動き回り、幾つもの表徴を認めようとします。しかし時々、その裁判が現場に出向くことも起こります。これは想像力とか、もっと適切に言うなら呪いを減少させることです。しかしながら人間の労働における超過分がその様なものになり、表徴によって、表徴上で行動する子供っぽい慣習が多くの人々に十分あり、かつ、何時までも長くあります。以上によって、弁証法は本来的にブルジョワ的なものであり、観念論者と呼ばれなくてはなりません。この種の思考は、その完全な形を変えても、精神による概念そのものについて働きかけることにありますが、実を言うとそれは話でしかありません。話の危険は矛盾にあります。話の救済は和解にあります。かの教授ジョレス(1)に認めるように、ユートピアとは先ず第一に話を調整することにあります。明白な契約により、そして全てに及ぶ社会的調整がその力に従って個人の発展と相反するのは本当でしょうか。あるいは本当でないのでしょうか。この哲学者が言うには、私は一方を肯定するなら、もう一方を否定するのを強いられるのが分からない、ということです。そして私は両方とも肯定しながら、それを証明します。その様なものが純粋状態での修辞というものです。修辞は論争においては少しも生まれません。論争は話の中に間違った事実を敷衍して行きます。多くの人々が理解出来るものであっても、少なくとも言葉では調整が不都合ですから、事件の経緯を変えることが出来ないと判断させられて

いることに私は驚いています。それは文法のために死ぬのと同じです。それとは逆に、パングロス(2)は他人の話によって全てを自分で慰めます。そして、この英雄的な文法学者は、和解者として最も卓越したあの有名なライプニッツから人が思っている程、そんなにも遠い存在ではありません。けれども多少なりとも継続する気分によって、怒りとか和解を十分に説明するようにならなければなりません。ライプニッツは幸せでした。ところが怒りっぽい決定論者は、余りそういうことはありません。子供は、歌を歌ってやると叫ぶのを止めますが、物を返してやったり入浴させてやったりすると、もっと良く止めます。それ故に、肯定とか否定とか細かい区分による話の表面的関係は、咽喉や肺や体全体の中で生じる他との関連が及んでいると考えても良いと思われれます。哺乳瓶を与える本当の理由は、泣いたり叫んだりしているからではないのと同じです。しかし子供っぽさは常に大変強くあり、対象が少しも応えてくれずに全てを仮定する時に、この上なく真剣になっている中に全てが見出されます。カントは敢えて言いましたが、直ちに明白なものはその存在が極めて完全であるなら、言葉による調整は事物による調整を少しも示しません。それは議論のための議論を予め抛擲することであり、話の中で人が出来ることとか言えそうなことの全てが完成されて組み立てることで、一つの存在を創ろうとしているのです。

民衆はこれらの話による空虚さを大変良く感じています。それは民衆が養って腕に抱く、大きな子供の言葉遣いになるのでしょう。しかし民衆は他にも疑ってみます。それは誤って遊戯と言われているものが、実は気分以上に、そして気分の源泉まで広がって行く食物や家や熱や光やその他の財産に及ぶ現実的状态を、極めて本気に翻訳してしているものでないかということです。何故なら、言葉は事物の原因にならなければならず、その様にして存在論になるのでしょう。そこから何人かの執拗な思想家たちは、いみじくも唯物論者と名付けた弁証法的観念を創り上げました。これによって全ての神学的体系は、ある生活のやり方を、更にもっと正確に言うならある仕事を翻訳しているのです。ご存知のように各々の仕事には神がおります。少なくとも労働から信仰への繋がりには、信者たちが知る以上に遙かに緊密です。そして哲学者が、言葉によって生きることを彼の言葉の中で率直に表明する以上、哲学による哲学でなければなりません。如何にして下位のものが上位のものを支えているかに気付くのに、決着はついていません。けれども唯物論が精神の唯一の支えであるのは本当です。それなのに宗教の教義というものが、田舎の道を通って明白にしなければならないのです。テルムの神(3)は都市を支配しますが、顔を持たないその真の顔は、田舎の一隅にも姿を現します。(完)

(1) ジョレス(一八五九～一九一四)は、社会主義者の政治家で反戦平和主義を説き、暗殺された。「ユマニテ」紙の創刊者。

(2) パングロスは、ヴォルテール(一六九四～一七七八)の小説『カンディード』の登場人物の博士で、ライプニッツ(一六四六～一七一六)の箴言「全ては可能な最良の世界における最善のためにある」を経験から学ぼうと、断固としてその楽観主義を守った人物として描かれている。

(3) テルムの神は、ローマ神話における土地の境界を守る神。

第七章 恐怖

魔術には結果というものがあります。幼年時代の生活において、事物は実際に言葉によって現れます。最初に召使い、次に世話の数々、ドアの鍵、庭、玩具、哺乳瓶が現れます。大人の生活においては、沢山の奇跡が言葉によって行われます。権威、特別待遇、名声、非難、軽蔑、破門が、商売とか健康に有利に働いたり邪魔になったりします。殆どのあらゆる戦いが、言葉によって行われます。戦争、破産、貧困、監獄、それらは富や王位よりも現実的でない訳ではありません。その様にして想像力は勝ちますが、反対のものの中で死ぬこともあります。しかしながら、ご存知のように最も恐ろしい神々は姿を現しません。眼に見えないものが、私たちを連れて行きます。人影の無い森の中で感じるこの種の忘我状態は、沈黙によって養われ、鎮めるべきものによって大きくなります。出来ることならここで、何ものでもないこの想像力の真実を把握しなければなりません。何故なら、幻想のこの裏側、幻想のこの不可思議が、幻想の全てであるからです。私がドアの背後で泥棒のような物音に耳を澄ます時、錠の穴を通して息遣いを聞きますが、その息遣いは私のものなのです。しかし、私の耳に聞こえない泥棒が一番恐ろしいのです。

全ての興奮は一つの足跡になります。触覚が人を騙さないというのは余りに早計です。意志的な触覚だけが騙されない、と言うべきです。興奮しての触覚は、間違った証明を与えます。興奮とは何でしょうか。要するに、それは人体の一つの準備状態であり、直ぐに一つの行動方法となります。対象を待つ中で、もしもそれが現実になったなら、結局、取ることになる活動を始めることになるものです。しかし興奮それ自体は、最初の衝撃に倣って私たちの全ての機能の目覚めの中とか、寧ろ警報の中にあります。そして、その衝撃は屢々指一本でしかない時の、僅かな落下が齎します。新聞を読んでいた人が眠って仕舞い、眠り特有のあの放棄そのものによって目覚めるのを見るように、具合の悪い姿勢で眠る人もかくして目覚めます。そして最初の衝撃は、あらゆる方向へ神経組織の伝達によって極めて早く広がって警報となるからで、私たちはそれが何であるかを知らなくても、何事に対しても直ぐに準備が出来ているからです。理由が分からない混乱が増大するのを感じるのは、恐怖そのものです。歓喜は不安にする、と諺にもあります。恐らく人は望んでなかったことが始まる運動は、全てが恐いのです。そして恐怖によっても人は怖がるので、純粋な興奮も恐怖であると言えます。

この率直さは、後で服を着せられるようになります。男の力は、恐怖を怒りに変えます。しかし極めて確実に子供は、恐怖によって恐怖します。決まった時刻、決まった場所に来ると、恐怖を感じます。その様なことは、人が想像力と呼んでいるものが主要なのです。実物の対象は殆ど、如何なる役割も演じません。何も感じないことが、恐怖と共に自由に独りでいさせて置くのです。それ故に恐ろしいのは、神々以外にいないと言えます。眩暈の中とか、反対に最も高級な劇の中で現れるように、いずれにせよ自己への恐怖があるばかりです。しかし先ずは無垢な幼年時代を確認しましょう。

私は偶然に、子供の恐怖を観察しました。結果は良く見えていたのですが、その原因を理解することが出来ず、恐らく信用することも出来ませんでした。しかし、私は信じる術を知ってい

ます。その女の子は、通りの明かりで映し出された並木道のプラタナスの揺れている葉影が怖い、と打ち明けました。「葉っぱの影でしかないのを知っているのかい」と私は彼女に言いました。はい、と彼女は言いました。彼女にとっての恐怖は、何ものでもなかったことが私には良く分かりました。しかし兎に角、彼女は恐かったのです。つまり全く単純なこのイメージによって彼女は毎晩、恐怖と共に会う約束をしていたのです。部屋を変えなければなりませんでした。そして、それは行われました。子供は何ものかの背後に待ち伏せている人間の姿をした何かを創造するものである、と性急に言うのはなりません。まだそういうことは最も少なく、もっと適切に言うなら絶対に少しもないのです。精霊や妖精のお伽話は恐らく、対象を持たない恐怖への治療の始まりです。ダビデ⁽¹⁾の術がそこに始まります。

理性によるなら、容易に恐れるまでにならないのは周知のことです。初めに恐れることがなければ、それは極めて奇妙なことであっても殆ど実体の無い恐怖の観念しか形づくらないでしょう。同様に、初めに悲しいことが無ければ憎むことも無いでしょうし、初めに幸福が無ければ愛することも無いでしょう。ここには私たちの感情における一つの秩序が示されています。それは常に下から上へ向かい、決して再び降下出来ません。人は自分が望むように、そして完全に認識してから愛するようにならないのと同じ様に、恐れを抱かなければならない唯一の観念によって恐怖を持つようになるのでもありません。真の恐怖は人が自分に与える理由とは何時も余りに別のものでさえあり得ますので、恐れを畏敬に合体させる方法しかなく、それは恐れを克服することにもなります。それで畏敬の情熱には既に、勇気が現れています。情熱についてのこの見方は、只思い起こすだけでもこの主題においては大変重要です。或る少女はほんの暫くの間、独りであると思い、狩猟のための道を狼が横切るのを見ましたが、少しも恐くありませんでした。反対に狼がいなくても、恐怖心を抱くと書くことが出来ないような怪物を創り上げますが、実際には何もいないのです。或る博物学者が шам において、林間の空地で大きな猫が跳んでいるのを見たのですが、それは虎であった、という話を私にしてくれました。恐らく、その冒険を彼が自分や人に話をするために思い出すなら、恐くなったに違いありません。危険な目に遭う時には良くあることです。取分け、危険であることを伝える表徴の交換がない時には良くあることです。反対に宗教的な歌は、恐怖を取り除くことが出来ます。タイタニック号上で起きたと言われているように、最も恐ろしい明白な危険に遭遇している時でもそうです。英雄の力が何処まで及ぶことが出来るのか、私は分かりません。しかし、いずれにせよ人間にとっては実際の危険よりも、恐怖心の方がまさしく重要なのです。戦闘や殉教に向かって歩く時も、人は歌うことが出来ます。苦痛の下で行われても出来事は変わりません。何故なら出来事の爪は素早く動いて行くからです。そして私が推測する処によるなら、私たちを砕く災難の瞬間は、証人たちでない限り、不安の対象でなければ恐怖の対象でもなく、思い出の対象でさえもありません。

物語は何時も何故嘘つきであるのかを、ここでもう一度、もっと近くで見せてくれます。ところがその原因の分析は、神々の方へもう一步、近付かせてくれます。何故なら物語よりも恐ろしいものは、何もないのは明らかであるからです。物語の対象が現に存在しなくても大したことはない、と私は言いました。存在しないことが大いに重要である、と私は今でも理解しています。見たと思ったり、見るのが不安になったりして知覚が余りに混乱するなら、恐らくそれで十分です。大昔の夜の農民に起きるようにまるで蠟燭が納屋の遠くの方を良く照らさない、その時は

語り手が良く見えず、語り手が話す感情を余りに容易に受入れて、何でも構わず信じて仕舞います。バルザックの『田舎医者』の夜は、この劇を十分に物語っております。オペラの怪物よりも遙かにずっと感動的です。しかし、通常の歴史に沿った英雄物語には触れないで、『健気なせむし女』を読むなら、その物語の力強さに一層教えられることでしょう。ここにも同じ挿話が出て来ますが、本当らしいことから出発して先ずは勇氣によって恐怖を克服して、現実の危険の後で再び見出した平和の中で、酷い不安の限界まで行き着きます。この時、殺害された男の手足と頭が、煙突からフライパンに落ちて来るのです。私はこの話を引き写したいと思いませんし、又そうでなければならぬでしょう。逆に『イビュコス』(2)も語らなければならぬでしょう。そこでは反対に一連の事件が全て自然で、絶えずその様に現れます。そして罰を与える神は全て犯人の中にいるのです。しかし読者自身がこれらの偉大な証言を見出すのは、悪いことではありません。そこに秩序に従う神々の系列があるのを知って、宗教は決して分割されず、こう言うことで良ければ腹と胸と頭が常に一体になっているように、まさしく神々と悪魔たちも全て一体であると理解されているのです。

恐怖が全く純粹に感じられて如何なる造作もない森の孤独感と、沈黙の夜のことに話を戻しましょう。人間は自分の背後を見ることが出来ませんし、守ることも出来ません。正面も同じで、日中であっても人間は樹木の側面しか見えません。もしも動物がいたとしても、一瞬にしか姿を現しません。時々、雌鹿とか狼に見えたものでも、垂れ下がった二枚の葉がある切株でしかないのです。その接近や探究は、人が思う程に安心させてくれません。心を動かした幻が木の幹でしかなかったとは、それは曖昧な証拠であり、私たちの思考の全てにあるデカルトのあの悪魔の精が、私たちに誤りを悟らせて、楽しむことが出来るのです。私はこの大論争を明白にして、精神と常に不十分な世界の間で正しい位置にいたいと願っています。私たちには、経験が素朴に探し求めるが何一つ証明しない幼年時代があります。原始人たちは経験を手に入れない、と良く言われていましたが、それでは私たちと余りにかけ離れて仕舞います。人間の議論は次のとおりです。つまり私たちは真理を求めますが、私たち自身の中にしか探し出せません。そして先ずは私たちに依存した思考を純化することで探し出します。それはまさに悪魔払いの儀式が意味するものです。しかし、人間は自分自身の精神を最初に、十分に信じることが足りないのです。悪魔払いの儀式やそれが与える平和は眼に見えません。そして木の後に隠れてもいる他の力を、最初に私たちに送り届けます。ラシーヌの『フェードル』の抒情的な動きにおいて人が見出すものも、殆どが大地の神々であるケンタウロスやアイギパンが現れる他の悪魔払いですが、それらは列になり、殆どが全く意志的に演技して現れます。子供のお伽話もフルートの演奏であり、恐怖にきちんと服を着せているのです。幼年時代は杖、ランプ、魔法の絨毯、〈胡麻〉のようなあらゆる規則に安心します。それらは緊密に結び付いた一種の別世界を創り出しています。その上、子供が法則の最初の観念を必然的に引き出す家庭生活にも調和しています。探検されていない自然の領域は、お伽話よりも遙かに恐ろしいものですが、それは幅をきかせている儀式を無駄に探究するからです。単なる杖が幼年時代には斧にも銃にもなり、武器よりも遙かに安心させるに違いありません。そして武器そのもの、この大人の武器は、迷信を倍加することしか出来ません。何故なら弓を見れば分かるように、人間の肉体そのものに最初から依存していて、震えていると上

手く狙いを定められないからです。安心感を与えることは、遠くから敵を殺すことと同じです。それ故に、人を殺すのは魔術であって矢ではない、と言わねばなりませんし、実際に言われていました。最も恐ろしい射手は、やはり人間の中の迷信家ですが、反対に彼は別人でもある、と考えるのが私は好きです。何時も失敗すれば、最も恐ろしい射手ではなくなります。（完）

（1）ダビデ（前十一世紀～前十世紀）は、巨人ゴリアテを石投げ器で倒し、イスラエルの王への道を歩む。エルサレムを政治・宗教の中心にした。

（2）イビュコス（前六世紀）は、古代ギリシアの叙情詩人で音楽家。

第八章 遊戯

想像空間の空虚さと、極めて現実的なこの不在をより良く理解するためには、行為としての詩も先ず子供の中に考察しなければなりません。子供はあらゆる遊戯において、本当の意味の言葉で役者なのです。私は、球技や独楽のように、巧みさを必要とする遊戯は別にします。その結果が事物の中で消されるのを除けば、それらは現実の物理学の途上にあり、人間の肉体の中にしか結果は残りません。輪舞のような他の遊戯は、歌や踊りや儀式に属していて、現実的な対象を創り上げます。しかもそれは二重の現実的な対象であり、先ず身近な存在を役者の中に認めます。次にそれは、自分自身を或る人物に演じることから齎される断固とした試みによるものです。その人物の背後とか外観の中で、他人や自分自身を信じさせられたり信じたりするのであり、そのことが偽りであっても、真実の神を創り上げます。喜劇役者特有のこの混淆は、デイドロによって討議されましたが、デイドロ自身が喜劇役者であり、私たちが煙に巻く曖昧さで悦に入っています。しかしながら、演技者における興奮の進行に関しては、実際に曖昧さは少しもありません。というのも、その興奮は何時も表情から観客へ赴き、自分たちの役割も承知している劇場内の喜劇役者たちによって、演技者に戻って来るからです。演技者は信じ込ませます。そして人が彼を演じるから自分も信じます。この進行、自負の側面、単純な表情への帰還は、演技者の最小の動きにおいて至る所にあります。年相応の喜劇役者たちにおける、子供としての真剣さと安心も同じ源泉です。子供の劇が、合唱や進行によって決して眼に見えないものを喚起せず、寧ろ眼に見えるものにして仕舞うのは、観客と演技者の混同によります。古代の悲劇の合唱にも、幾らか保存されていたのを指摘しているのを私は信じました。

それは行動を模倣する演劇、狩猟ごっこ、戦争ごっこ、自動車ごっこや飛行機ごっこは全く別物です。ここでの想像力は絶えず創り出します。しかし創り出されたものは、何ものでもありません。その活動は、少しも姿を現さないものを絶えず消し去ります。想像力はここで自己の活動の感覚を知るために、常にあるものを全てはつきりしています。只この活動は、付随的な何かの対象によって規制されるだけで十分です。例えば紙製の帽子は、軍人の物腰を与えます。一本の棒でも、馬の代わりになります。調教師の鞭は、ライオンを創り出します。それらの音響は、対象のもののように耳に伝えて常につけ加わります。その上、大人自身にとって、太鼓の音はそれだけでも足音になって雄弁につけ加わります。今は私たちの対象になっている物腰に関して、他の全ての言語よりももっと精力的に振る舞うのを理解することは容易です。何故なら、他の演技者たちにおいては良く見えるからです。そして自分のことであれば生き生きと感じられ、時として激しくなるからです。しかしながら、この種の遊戯に私は如何なる視覚上の幻影も見ることはありません。ハンドルの上に両手があるように置かれている丸い対象は、まるっきり自動の代わりになりますが、少しも自動車を喚起しません。そして、或る仕方で並べられた椅子も、自動車とか馬の外観を取ることは決してありません。行動が全てを充足します。それらの遊戯は、模型の自動車や人形や衣裳のような模倣された玩具と違って、対象を拒絶します。何故なら、恐らくそれらの外観は人が望むように信じることを逸らしているからです。想像力の欠落は求められ愛されるものです。想像力が人体の活動としての知覚や感情以外の何ものでもないことに、もう

一度注意すべき良い機会です。そして、そのことは私たちの主題にとって大いに重要です。というのも神々は眼に見える必要がないことに今は気付くからです。しかし、これらの行動の遊戯からは、より正確に理解すべき何かがあります。同様に、子供は事物を取り扱う前に言葉を使います。同様に、労働の対象にぶつかる前に自分自身に操られて訓練します。それは文字通りに世界を、人間の様式に通して知覚することです。事物が人間の様式を取るとは決して言いたくありません。何故なら、それらの事物は決して人間の様式を取らないからです。寧ろ人がそこに至るや否や、事物は人間の様式に逆らいます。こう言って良ければ、全てが隠された人生を伝える感情を身に纏います。神人同形説は寓意的な立像によって間接的に十分翻訳されているものです。しかし、この関係は外的なものです。お伽話が私たちに良く語っているのは、一本の剣は妖精であり、一つの泉も妖精であることです。それは人間の形をそこに見ることではなく、見るのを思い描くことでさえありません。そうではなく、剣は何時も剣でしかなく、泉も水が反射して水音がしているものでしかありません。宗教の魂である隠れたものは、決して姿を現しません。それは恐るべきものの極致です。もっと適切に言うなら、遊んでいる子供は決して幻想を抱かないのを人は理解出来ます。間違える、という動詞は美しいです。まさに騙されるのとは別のことです。間違えるのは能動的で、情熱は誤りであると言いました。そして恐らく彼らは、私たちが言う以上に誤りは乱れていて、気違いじみていて、せっかちであると理解していました。「何者も悲劇役者になれ、と私に命じない」とマルク・オレールは言いました。情熱に駆られた者は演技者です。彼は何時も自分の自然な音調以上で少し演じ始め、力強くなり、そして夢中になります。彼は自分が支配者と思い、その気になります。プラトンは、自己のこの奇妙な支配を暴君と比べました。その暴君の怒りは、狂気と理性の混淆によって最早翌日には最悪の不幸を望むことしか知らなくなつて、極めて迅速に完結します。演劇は、それらの表象から自分自身へその力を敷衍します。それは全てのドラマを創り出します。モンテーニュは私たちに、子供たちが自分自身の顔を塗りたくって屢々怖ろしくなるのを思い出させてくれる時、想像するために曲線を描いているのです(1)。その魔法使いの弟子は、ついには余りに上手く行き過ぎます。しかし、この古い寓話を良く理解しなければなりません。彼は自分に恐怖を与えて演じ、そして恐怖に狂ったようになります。これらのドラマは絶対に内的なものです。そして、ヘーゲルに好んで言うように、同じそのことによって絶対に外的なものになります。というのも、似たものは応答を与えるからで、そして事物も同じです。二つの独白はお互いにぶつかります。そして茨は、逃亡する者にしか引つ掛けません。子供は自分の体を打って遊び、思った以上の打撃を受けます。子供は砂の上に倒れて遊びます。しかし、重力は遊びではなく、砂の中には非常に堅物の石ころがあります。しかしながら、この種の証拠は経験になりますが、余りに具合の悪いドアから這入って来ます。戦争は本質的にドラマです。敵は今もいるのですから過去にもいたとするのは十分に証明されているのですが、非常に下手な証明です。子供は、大人よりも単純であることは殆どありません。

隠れん坊や動物を追ったり、鳴き声を真似たりする遊戯は、屢々具合の悪い結果になると私は推測します。しかし子供はそのことを何も言いません。子供は国境に気付き、恐怖の国には決して這入りません。演劇のようにこの種の遊戯には約束事があることを私は良く分かっています。熱い手で遊んでいた大変に幼い子供に、私はもっと単純なものを見ました。その子供は強く叩き

、痛くなり、腹を立てて、さらに沢山叩いていました。この経過は犯罪と同じです。しかし、もしも宗教を理解したいなら、いわば表象の世界において自分を抑えなければなりません。というのも似たものや事物からの応答は、眼に見えない神々や悪魔たちを殺すものとして、極めて容易に狂気の沙汰に宗教を変えるからです。私は具合悪く終わった遊戯のことを思い出しますが、それは単に恐怖からそうなったのです。女中が狼の毛皮で出来たベッド・マットを身に纏います。彼女は唸ったり吠えたりして、私たちを追い掛けました。私たちは恐怖から、遂に泣き叫びます。そして、超人的な力が発生しました。勿論、私たちは結局のところこの遊戯が好きでした。私はもっと哲学的な幼い男の子のことも思い出します。彼は、別の狼の毛皮ですが、必ず「怖い」と言いながら撫でていました。しかし、とても冷静な声でした。男の子は狼の毛皮になすべきことを知っていたのです。それは多くの大人たちが次の様に敷衍している、極めて簡潔な祈りでした。「私はお前が怖い。だから恐くしないでくれ」。私は非常に多様な狼の毛皮を撫でていきます。それは望んでいたなら人は信じるようになる、と思うことです。更に、望んでいた以上に信じるようになります。勿論、それは不可能なことではありません。或る有名な数学者が、死んだばかりの大変に不信心な論敵の一人のことを話しながら、言いました。「彼は火炙りだ。彼は火炙りだ」。地獄を演じるこのやり方は、その演技者が良く噛み付かれます。そしていずれにせよ、それは彼が少し低級すぎる情熱を愛していた証拠です。地獄の火が、時々劇場に火を付けるオペラの火になることもあり得るのです。（完）

（1）モンテーニュ（一五三三～九二）の『エッセー』（二一十二）参照。子供は顔に墨を塗って置きながら、自分で脅える。

第九章 新しい奇跡

ルクレティウス(1)がまさに有名で常に読まれているのは、あの人間的奇跡によるからであり、それは神々を追い立てるのと同じ動きにより、崇高に闕にまでその詩を高めているからです。自然はここに非人間的で破壊的な本来の偉大さを見出しますが、それは最早私たちを考慮する事物の魂とか精霊によるものではありません。隣接する事物との絶えることのない競争や闖入によるのです。それは出来事を、世界の一つの波に還元します。そして盲目的なこの秩序の征服が人間を、そして世界をも本来の尺度に応じて強くするのです。人間は勇気を持って閉じこもり、世界は延長の中に広がっています。そこに物理学の精神が全てを見出します。それは自然によって最も隠された秘密の探究が、取分け私たちのメカニズムとして重要であることを良く示しています。最初の主要な勝利は、最も容易な認識によって最も正しいものになって行くのであり、それは樹木や泉の精霊たちを追撃し追い回すことです。ルクレティウスは何時も私たちを驚かすけれども、ここでの狙いは正確であり、星々の出現や没入、月の位相と食を説明するために行える推測は、如何なる神も入れなければ全てが正しくなると言うまでになります。物理学の本来の目的で、正義そのものにとっても重要である目的とは、今日でも世界の認識を想像力から追い出すことです。それは幼年時代から抜け出ることです。もしも常に大胆な私たちの推理を救う根本的仮説を望むなら、精神の方法とは如何なるものでしょうか。それは純粋なメカニズムであり、あるいはもっと正確に言うなら原子であり、自分自身の外的変化という永遠の観念です。何故なら、原子は大きいとか小さいとか質料の問題は何でもなく、そんなことはどうでも良く、他の原子によって単にぶつかったり押されたりするものであるからです。原子は、その様にぶつかったり押されたりするものとは別の特徴を、原子自体に決して所有していないのです。それが事物と同じになれば、光や火や大洋や大地や植物や人間にもなるのです。というのも人間も事物であるからです。そして精神は、この厳密な唯物論的見方によって、より一層強固になるしかないので。私はもう一度ルクレティウスをきれいにします。私は彼独自の道を再び辿ります。それはデカルトが、如何なる恐怖も抱かず歩いた道でもある二重の道です。デカルトにおいては決して如何なる魔術もありません。しかし私たちは、大人になる前は子供であったので、デカルトを読む前にルクレティウスを読むことです。ルクレティウスの前にホメロスを読むことです。そして先ず第一に、お伽話を読むことです。

もしも間違いが自然でなかったなら、人間の精神に絶望しなければならないでしょう。その様にして虚偽の神々が支配して、私たちは騙されて仕舞います。しかし妖精たちは自然のものであり、幼児の生活において統制された経験でさえもあります。そして幼年時代は何時も戻って来ます。私たちには、役に立ち、禁止し、脅す神の思い出があり、そうしてそれを父なる神と呼んでいます。だがその上更に、現在は十分に説明されている別の理由から、私たちは事物の背後や中に、決して眼に見えない 一種の召使いを想像します。そして、ここでは十分に注意しなければなりません。というのも最も注意深い経験でさえも、私たちに説明しているのはせいぜい樹脂やゴムや亜鉛や石炭のように、常に同一の状態で程良く私たちの役に立っている事物であるからです。少なくとも隠れた妖精が気まぐれを起こすことなく、召使いになるのを見せてくれること

であるからです。電気も妖精と言われます。私が光を点けたり、熱や冷氣さえも手に入れるためには、スイッチを回すだけで良いのです。そして気まぐれが出現すると、それは私がやるべきことをやらなかったことである、と何時も説明がつきます。しかし、電気そのものが何であるのか、私たちは何も知りません。ところが申し分なくとことん求めて行くや否や、問題は何もなくなります。解答はたつぷりとあつて正確です。そして好奇心から感嘆するのを期待したものは全くの別物でした。何故なら何人もが徹夜して、何台もの機械が回り、他の人々は機械を作り、又他の人々は鉄と石炭を採取するために大地を掘るからです。制御された光、指を押すと回転するモーター、独りで前進しているように見える市内電車において、それらの労働の全てを再発見することが重要です。実を言うと、これらの事物の中には神秘の力が無いこと、全てが等価値の法則に基づいて、そして流出さえも伴い、常に周りの事物の変化によって説明され得る労働の循環に帰着していることを、私たちが知るまでに至ることは全くありません。

ここで労働の法則は、純粹な形で再び発見されません。何故ならそれは、石炭とか石油とか急流のように、物質それ自体で働いているように見えるものの回路に這入っているからです。そして、神のように雷が鳴っても人間には何の犠牲も払わせないのは明白であり、雷が人間のために働いてくれないことも明白です。そして滝も又同じです。石炭も同じです。人間のために働くのは人間だけです。自らの力で働かないで単に抵抗と重さだけを私たちに与える比較的単純な仕掛なら、もっと良く教えてくれます。何故なら掛時計の振り子が、人間への報酬以外のものを返してくれるとは誰も思わないからです。つまりもっと正確に言うなら、より一層少ない努力でより長く続く働きであっても、その働きは再び重りを持ち上げることに使われるからです。梃子自体が働いていると誰も考えません。梃子は単に、人間の労働の形を変えるだけです。滑車も同じです。巻揚げ機も同じです。けれども人がそれを分解したり、再度組み立てたりしないなら、そして何回も沢山試みようとしなければならぬ、何か魔術的な力の増加を見出すかもしれません。そこには物理学の初歩があります。しかし、真実の悪魔祓いが発見されるまでに、如何に長い時間がかかったのかも理解して下さい。労働の観念と労働の測定は、生まれてやっと一世紀経っただけです。多くの子供たちは知りません。何故なら、私たちがそちらの方へ導いていないからです。各々の事物には信じて良い特性がある、と私たちが教えているのです。例えば、亜鉛と酸化液を混ぜれば起電力を起す特性がある、と私たちは教えています。理由は問われますが、何故か分からないが、その様になっていると答えます。亜鉛を、大仕事のために持ち上げられた掛時計の振り子の重りとか、あるいは人間の手で巻くゼンマイと比べる方が良いでしょう。そして硫酸亜鉛を、大地に落ちた振り子とか、伸び切ったゼンマイと比べる方が良いでしょう。その時は亜鉛が与えられるのではなく、人間の労働が与えられ、見出され、消費されることを理解します。そしてもう一度言いますが、石炭とか石油のような或る物体は、すっかり巻き上がったゼンマイになり、十分に移動させることになります。いや、そうではありません。移動させる、と言うのでは十分ではありません。ボイラーやシリンダーや車輪によってそれらの物体を、付けたり繋いだりしなければなりません。再び人間の労働です。そして、地中ですっかり巻き上がったこれらの貴重なゼンマイがあるというその足跡は、太陽放射熱や大地の圧力のように、何らかの外部の働きによって説明されなければなりません。それは熱るとか運動するという秘密の特性を、石炭から発射することであり、既に一種の想像力の神でしかありません。かくして物理学者は、ルク

レティウスが予知したように、満潮や原子の渦によって最小の事物の中にも全世界を明瞭に読む、打って付けの状況に至ります。私は今、物理学を取り扱いませんが、これで十分です。

その次に、もしも私たちが物理や化学の実験で子供たちを教育しようとするなら、良くやる間違いを確認しても驚くことはないでしょう。何故なら、亜鉛とか硫酸とかガラスとか、この種の色々な物の外見の下で、あなたは鉱山や輸送や工場の眼に見えない労働を実験の中に入れて作用させるからです。ここで仕事をしているのは労働者たちであり、人夫たちです。でも、そのことを誰が考えるでしょうか。電線は切られ、瓶の蓋は塞がれています。中途半端な物理学者が奇跡を見ることはないのを、私は十分確信出来ません。確かに、事物の力や魔法使いの術で隠されている引出から、その物が出て来るように大変良く準備された幼年時代によって、子供たちならそこに奇跡を見ることでしょう。そして、賞讃されてばかりいるあの好奇心は、奇跡を期待するばかりです。一連の本当の原因は隠された儘です。ところが、これらの本当の原因が、仕事を行っているものなのです。間違いは、私がブルジョワ的と呼んでいた判断の中にあり、それは幼年時代の続きから生じています。実際の労働に、つまり事物を移動させたりその重さを感じる労働に、報いることなく受け取ることで人は何ものかのためでなく、何ものも与えない世界を前にすると、現実の人間の状況を忘れまじ、忘れ続けています。結局のところ、そこから生じるのは子供のように無邪気で大変に不公平なものであり、幼年時代の続きそのものです。もしも、ある人々が少しも苦勞しないで沢山のものを手に入れたとすれば、それは恩恵とか幸運以外のものではなく、子供が信じているような祈りの術でしかありません。何故なら、子供は別な風に信じることが出来ないからです。そこから教育が重要になって来ますし、困難なものになります。実際の学習というのは、疑い深さの学習です。そして不都合がやって来るのは、恐らくブルジョワ的精神の時間的余裕による全ての探究の始まりであり、更に上手く考えられない数学的方法を十分に認識するのが唯一である処からです。何故なら、男性的な大人の仕事は常に命令を下したり、あるいは懇願したり交渉したりすることであるからです。その代わりにプロレタリアは道具で大変上手に形づくるので、善意とか悪意とかを持った妖精たちを信じません。それらを純粹に否定して事物の単純さに止まり、その仕事から世界を描き直しても、その否定を敷衍することはありません。そこからプロレタリアは、彼の芸当は労働と共に騙すことになるだろうとか、秘密の富を発見することで手仕事が助力無しで独りで働く時代が来るだろうと大変良く信じるようになります。ここで私は、敷衍しても切りがないから忘れないようにつけ加えて置きますが、農民の物神崇拜は又別種のものであります。というのも、土地を耕して種子を蒔いた後は、決して見ることのない化学的な力を作用させて置くからです。植物が大気中の炭素の沈殿物であることを、どんな農夫が知っているのでしょうか。農夫は、樹木が種や大地に全てがあつたと信じています。これはいずれにせよ奇跡です。人間を容易に養ってくれるものが大地にあるのです。しかし、私はもっと良いことを学びました。せめて沢山の人が朝から晩まで、水を撒き、肥料を施し、草取りをして、間引きして、移植をして懸命に働くなら、通常土地なら食糧を供給出来る人間の数が未だ計り知れないことを私は学びました。労働が思考し、そして思考が労働する時、奇跡は全てが人間の中に避難しに来るでしょう。それは勇氣という名を持つでしょう。(完)

(1) ルクレティウス(前九八頃～前五五)は、古代ローマの哲学者・詩人。エピクロスの思想を継ぎ、哲学詩『物の本性について』を著した。

第十章 お伽話の真実

勇気はお伽話の王であり、幼年時代の神です。魔法の森の中で、武器が少しも役に立たなくなるのを見るのは素晴らしいことです。そこでは細い棒とか魔法の言葉がなければなりませんし、恐れてもいけません。それは勇気をすっかり裸形にします。勝者はサーベルで突くこともあり得ますが、それは魔法のサーベルです。ユリシーズは決してキルケを突きません。脅すだけで十分です。この教訓は値千金です。何故なら、自然が私たちに手心を加えないのは本当であるからです。自然が表徴を少しも理解しないのも本当であるからです。人は自然を恐れさせないし、哀れを催させないのも本当です。少なくともこの真実は、常に人は余りに早く覚えて仕舞って、人間を老いさせるものです。それは何時も自然な悪魔的宿命でしかなく、全てに異議を唱えます。この観念は、私たちの骨の硬化に似ています。固い石、固い人間、それらは頑固な知恵と言葉と壁と家を作ります。直ぐに、この観念そのものさえも最早作ることが出来ない、冷めた人間を作ります。彼は全く冷たいのです。大人たちには理性がありますが、何も作りません。

幼年時代は観念の時代であったと私は良く考えました。騎士がサーベルの代わりに細い棒を振り回しながら、自分自身の勇気の曲線しか見ないで他は何も見ないように、私には人間が自分自身を描いて他は何も見ない時代に見えます。ドン・キホーテの風車が上手に表しているものです。勝利を通して見る敵の姿です。勝利は出発した時と同じようには到着しないことを、人は良く分かっています。又、敵は弱く、臆病で、武装も十分でない、と信じるのは愚かであると人は飽きる程に言っていました。それはまるで、川は歩いて渡れると信じるのが一番好きなようなものです。川は答えます。敵も答えます。十分に言われて来たことです。勇気は全てを満たすことが出来るという幼年時代の観念を、誰も高く掲げたりしません。何故なら多分、真実ではないからです。しかし勇気がなければ、全ての方策も力量も無駄である、というのは大変な真実です。そして私たちは合理的な計画を立てて、そこに止まる力を十分に認識します。その力は年齢の尺度になります。勇気はその力の前で終わりになり、その致命的な前進は想像力になります。何故なら、想像力は道具に基づいたものとは別のものを望んでいるからです。人間は道具の上で死にます。それが所謂仕事です。幸福な幼年時代は、貴重な成長期の中で世界から歪められることはありません。子供の観念も又同じです。幼年時代は全てが容易であるというのは正しく、自己に従って思考することも同じです。理想というものは幼年時代から齎され、歳を取ると擦り切れます。

幼年時代の禍とは対象の無い恐怖である、というのは大変な真実です。そこから幼年時代の理想も、対象の無い勇気であり、自己の他に方法も障害も無いと私は理解しています。この時、恐怖に打ち克つのが全てに打ち克つことなのです。この様にして魔法は、幼年時代において全てに開かれる力であり、只単に懇願する魔法だけでなく、表徴によって命令する魔法でもあります。それは存在した方が良い抽象的で純粋な表徴を作るのです。その様にして最初の計画となり、最初の素描になります。先ずその素描の中には私たちの生活があり、その些細な線になって書き終わることで開始されるのです。その円は子供です。その法則は全く人間的です。それにしても大人たちは、その円をどんなに裏切ることでしょうか。直線は美徳のイマージュです。曲がった曲

線は、悪徳のイメージです。ピタゴラス学派の人々が言っていたように、子供たちは崇高です。事実、これらの実体の無い表徴が事物の鍵を与えているのです。しかし、それらは第一に自己の鍵を与えます。経験に先行して、英雄的な幾何学を思い切っを行わなければならないように、英雄的な生活を思い切っを行わなければなりません。そして貯えにかけてそのことを誓わなければなりません。それなのに勇氣などは無い、と人々は余りに性急に言います。それは〈神〉のように最初はあったのです。それは私たちに義務を負わせるものです。何の義務でしょうか。正義とか友情とか誠実のように人間的なものの全てであり、その底には常に勇氣を見出します。そこに少なくとも勇氣を見出す者は幸せであり、勇氣が彼らを生むのであり、再生させるのです。そして、もしも世界が正しいと信じるなら、正義は多すぎる証明によって本当に失われて仕舞うでしょう。しかし、もしも正義が単に望まれ、そして大変無謀に望まれているのを知ったなら、人は常に勇氣の中に理由を求めますが、あべこべにやるように理由の中に勇氣を求めることはありません。私は前もって言いますが、ここに集められて全く生き生きとした信仰心は、報いを考えずに存在しなければなりません。しかしその道は、そこへ行くまでが長いのです。ホメロスは、不和を煽る神々を私たちに示す時、遠くを見ていました。どれ程多くの神々が、真実に至るまでに私たちに待ち伏せていることでしょうか。

私は、この偉大な道を通して、幼年時代に固有の弁証法を少なくとも認めます。それは常に抽象から具象へ、言葉から事物へ、身振りから行動へ行きます。勇氣は気高くサーベルを取り出すことに気を取られますが、それは軽い棒に過ぎません。事物を把握することとは、その名を命名することであり、少しも丸くない事物を丸くみることです。障害をものともしないで、身振りで目標へ行くことです。それは直視することです。その様にして判断を下す人が正しい時は、きっぱりと決めます。そして、決して真っ直ぐな壁でなくても、人は真っ直ぐに作って仕舞います。消えて行く隠喩が、全ての生命です。又それが、思考すると命名することでもあります。

コントの一観念で大きな価値を持っているものに、不思議な話は決して魂まで届かなかった、というのがあります。友情を殺して置いて少なくとも、アキレスを慰めるという考えを持つ神は決しておりません。夢想や他の外的な効果によることなしに、性格を変える神も決しておりません。メフィストフェレスは少しもファウストを変えませんし、他のことを更にファウストに示すことがなければ、変えることは出来ません。そして、お伽話の中の素敵な王子様は、釘のように舞台に固定されたように良く登場するかもしれませんが、恋にうんざりすることはありません。何時も外部の妖精たちによって青い鳥になっても、彼は恋人の窓辺にやって来て再び歌います。彼は自分が出来ることを行いますが、自分が望んでいることも知っています。私には良く分かります。でも、あなた方は、お伽話には恋が分からない、などと言います。そうではないのです。お伽話では、誓った恋しか分からないのです。誓いに背いた恋、自然の邪な力によって誓いに背いた恋など少しも分からないのです。恋は未だ偉大な愛ではありません。もしも幼年時代が全て死ななければ、恋は克服されて偉大な愛になるでしょう。全ての人々が、最初は容易であることを優雅に歌わなければなりません。光あれ、と言うことは幼年時代と同じです。そしてメフィストフェレスは、「老いたる者よ」と、完全に出来上がった災厄を前にして、創造主を呼びながら良く言います。世界は恐らく、完全に出来上がった無秩序でしかありません。ファウストは子供に戻ります。この様にして怒った英雄になります。

これらの隠喩は私を連れ戻します。私が如何にそれらの隠喩を取り扱うか、つまり大変真面目であるかを、多分少しはご理解戴けることと思います。今でもなお一層私の主題に近付いて、お伽話には真実があると私は言います。何故なら、真実と言っても色々あるからです。勇気がなければ持つこともない事物の真実があります。しかし、勇気には真実があり、それは少なくとも人間のものであり、思考し愛し勇敢に行う人間のものであると私は言います。例えば、トリスタンとイズーの媚薬は混同された真実です。それは少なくとも純粋な物語ではありません。余りに純真でない注釈家の誰かが外的な奇跡を、内的な奇跡と取り違えたのではないかと疑います。強制された愛とは何でしょうか。何故なら、それは既に死んだ愛なのです。そして病でしかない愛のこの部分は、常に無から生まれて再生する他者への恩寵がなければ、最早全ての愛もまさになくなるでしょう。ですから媚薬があるにしても、媚薬を無視して愛さなければならないでしょう。その媚薬はイマージュでしかないと言いましょ。しかしながら、それは余りに強力です。魔法のサーベルはもっと素晴らしいものです。というのも恐らく、本物のサーベルよりも魔法のサーベルを信頼するのはもっと困難であるからです。信仰はそれをより良く武装するしかなく、しかも自己自身で武装するしかありません。以上は、お伽話が教えてくれることですが、それらのお伽話は善人と悪人をももの見事に分けて仕舞います。シンデレラは全くの善人で、姉たちは欲望しかありません。確かに、その様な現実はありません。しかし、子供は先ずその様に判断し始めます。かくして子供は欲望し、怒ります。子供は元に戻ります。お伽話を通してついに世界を見るように、子供は最初に描いたこれらの円の中に、様々な性格の真実と多様性を記すことでしょう。

世界を見て征服して変えたとしても、子供は単に思い出すだけなら、本当の豊かさのために労働に向かうことは決してありません。というのも、空中に飛び立つことを人間は行いますが、それを行う時は最早何でもないからです。お伽話は正確に見ていました。距離は飛び越え、時間も流れています。偉大な魂はこれらの仕事を熟しますが、殆どそのことを語りません。何故なら、困難な世界とは常に人間の世界であり、年寄りとか老けて見える若者の魔法使いとか妖術家であるからです。彼らは祈ったり説得したりしなければならず、五十頭の馬が力を一つにしても、彼らの殻を動かすことが出来ないのです。事実、強制しても何も手に入りません。暴君は諂う者たちにうんざりして、独りの友人を求めます。かくしてお伽話の霧の中に、その終わりが最初から私たちの前に現れます。権力は追い払われます。止まることはありません。要するにお伽話は物神崇拜ですが、偶像崇拜ではありません。巧みさと虚構の祈りと自己への祈りである、真の祈りによる適切な混合によって、幼年時代のこの側面を思い出さなければなりません。（完）

第一章 永遠の歴史

牧神のパンは決して死にません。そしてあらゆる神は、その山羊の足によって申し分なく何時も表現されることでしょう。それは人間が、半分は動物であったということであり、そのことは何時も真実です。宗教史家が言うには、嘗て人間は自然の懐の中で生活していた時代があったが、自然と一つになる以外になく、自分だけのものとして、全ての外部の変化も自分だけの四肢で意識していたということです。今でも動物たちはその様に生きていますし、取分け植物がそうであり、開花の時期を予感しています。それ故に人間も、植物のように生きていました。人間は世界の中で成長しましたし、それが人間の行動でした。人間は世界と共に感じ、そしてそれが人間の思想でした。しかし現代の私たちはこの全てを変えました。右側に心臓があると言えば笑われます。勿論、最早世界の一部でないと推測すれば、やはり滑稽です。人間は思考する動物であり、胸部とか頭部も最早自由にさせられません。従って私たちが、昔の神々よりも古代の時代の人々の英知に驚くことはないでしょう。これらの全てのことは、私たちの幼年時代が私たちと共に駆けて行くように、私たちと共に駆けて行きます。確かに子供は大人のように思考しませんし、大人のように行動しません。しかし、子供であるための近代的方法というものは決して無い、と考えるのも正しいことです。本当のところ幼年時代は、いずれにせよ保存されるものや繰り返されるものにとっては永遠なのです。そして自然への感情も、変わらない詩が証明するように、永遠です。私の経験では、ホメロスもプラトンも私たちから遠いものではなく、この経験がもしホメロスやプラトンを決して拒絶しないなら、誰もが持っているのです。

しかしながら、繰り返すことは何も無いという経験も、誰もが持っています。このブルターニュの浜辺においては、全てがシーザーの時代と同じようなものです。しかし岩が絶えず削れるのを私は見ますし、それらが砂となって戻って来るのも知っています。そうして私の眼下に砂丘が生まれます。そこではオデュッセイアの時代と同じように、踵を返して角笛で犬に教えながら、草を食みに行く牛たちを戻します。それ故に私は、いわば立て続けに二冊のテキストを読みます。この砂丘は、もう一つの砂丘の娘であるのは本当で、そんな風であるのは他もそんな風であったからで、別な風ではないのです。つまり現在は、過去に私を送り返します。しかし、砂丘は今もそうであるように、常に風によって大きくなって来たのも真実です。そして砂の粒が常にそうであったように、最も低い方へ回転して行くのも真実です。過去は現在へ私を連れ戻しますし、私の思想の中で何時も現在を予想しています。というのも私が出発するのは現在であるからです。私が学ぶのも現在によってなのです。諸宗教には歴史があります。何故なら、出来事は後戻りしないからです。しかし他の面で出来事は、今でもそうであるように昔も後戻りしませんでした。そして何時も私たちが相違を判断するのは、別のものによるように、別のものも同一のものにより判断するのです。これらの〈論理学〉の難問は、今の私には興味があるものではありません。もしも人が変化の学問を〈動学〉と名付け、不変の学問を〈静学〉と名付けるなら、私は諸宗

教の一静学を試みようとしているのであって、歴史では全くないのを私は単に説明したいだけです。

歴史とは、お伽話のように不思議なものです。精神はそこに自らを認めます。人間は先ずあらゆる事物に驚嘆し、太陽や火や収穫や動物たちの自然の力を崇拜しました。そして同時代に、人間は植物が生長するように行動しようと試みましたが、それは魔術でした。私は、この母なる宗教を自然の宗教と命名します。そして神というものが神々の塵の中で変化するこの素朴な汎神論を、私のためのパンの神が大変良くその姿を描き出してくれます。その次に私たちの西洋にやって来たのは、西洋で事足りるのですが、オリンポスの宗教です。ここで私は見るのですが、人間の姿だけが唯一の崇拜されるものとなり、世界は王国のように支配されます。この征服者たちの宗教を私は政治的宗教と命名します。明らかに田園的である前者の自然の宗教との対比から、まさしく都市的宗教とも命名します。そして三番目のものに関して言うなら、それはキリスト教の名の下で、私たちのヨーロッパの岬で同じ位に一般的に広まっております。新しい価値によって私たちを教育しているのは私には間違いようがなく、私はそれを精神の宗教と命名します。私には他に見ようがありません。事実、その様なものが人間の諸周期です。

寧ろ私は、それらは人間の諸段階であると言いたいのです。私たちは多くのものを単純化しなければなりません。何故なら、余りに詳細になり過ぎると、全てが混合されるからです。人間は腹部であり、それは欲望と恐怖です。人間は胸部であり、それは怒りと勇気です。人間は頭部であり、慎重さと支配です。常にそんな風であったと仮定しても、私は信用出来ないものを提出したことになりません。今でもそんな風であると仮定したとしても、私は間違える危険を負う訳ではありません。怒りや勇気によって、一種の英知まで欲望や恐怖の瞬間を私たちの取るに足りない思考が遡る、と言っても事情は同じです。欲望と勇気と精神という三つの宗教は、それらが何時も存在したように、今でも一緒に存在していると理解して貫うにはこの要約で十分です。卓越した人間の中にしろ、群衆の中にしろ、それらの宗教の様々な混合を描き出そうとして、これによって進歩や後退や、もしもあるとするなら獲得された前進を分析することは、歴史家の仕事です。私は先ず、私の裡の終わりの無い〈動学〉と〈静学〉の葛藤を鎮めます。それは最初に手短な全く逸話的な歴史における問題を見付けなければならず、その次にはより一層地理的な歴史に戻り、そして既に生命のない事物のために行われていたように、より一層地質的な地理学に戻るために、どうかこうにかそれらの定理を生み出すことが出来る考察によってです。それ故に別のもう一つの地質学は、自ら可能な限りにおいて、人間構造から諸宗教を解明するでしょう。そして一方では全ての宗教が一緒になって生かされ、もう一方では既知の最も高い価値を純粋な姿で描くことを、私たちに教えてくれることでしょう。

その点で常に私が言われ、語られ、教えられたことに基づいていながら、私はあるが儘の宗教を保持することに十分注意します。ある日一人の砲兵が、宗教について私が何を考えているのかを尋ねました。彼は信心深かったのです。しかし私は殆ど信心深くなかったことを、彼は良く分かっていました。私は勢い良く一気に答えましたが、今でも良い答えだったと思っています。「宗教とはお伽話です。全てがお伽話のように色々な意味に溢れています。そして、お伽話が本当の話かどうかなんて、誰も決して尋ねません」と私は言いました。私は、この一番外側の外見を何時までも削り取っていました。私が何故お伽話から始めたのか、そして何故お伽話からお伽

話へ、何時もせいぜい隠喩の近くに近付いて、執着しながら行こうとしているのか、お分かりのことと思います。そして、それは美しさが無い学派の哲学に落ち込んだりしないで、日常の哲学を発展させる方法なのです。（完）

第二章 神聖の森

田園の平和は何時も偽りです。欲求や吝嗇という情熱は、労働が眠っている間の冬に大きくなります。それは戦士や強盗への実際の恐怖を除きます。狼やその他の動物も除きます。平和の外見は、殆ど一人か二人しかいない、耕された田園のあの広がりから来ています。これらの空間の隔たりが、静かな戦いを生んでいます。しかし私はこれらの現実的な危険に、もしも言えるとするなら現実的な神秘に、触れないで置きます。その時、想像力は一本の道を辿ります。行動が走ります。農民は勇敢で素早く、頑丈で、まるで戦争を見ているようです。そこでは人間の群の中で、本当の危険を前にして、最早田園の神々がいる場所はありません。それとは反対に、森の奥は何時も神聖でした。真昼でも夏でも暗いこの夜は、既に想像力のものです。というも物の形は、そこでは極めてはつきりとしているからです。しかし人間が歩くことで、事物の点滅が繰り返されます。全てのものが開かれ、そして再び閉じます。それらは別世界です。木々の幹は私たちと一緒に走るのみならず、お互いに隠れ、そして現れます。寺院の柱は、高い枝と枝の交差同様にこれらの効果を模倣していますが、人間の署名も読み取れます。ところが森の自然は、人間にとっては何処までも無縁です。単調でも多様な変化が起こり、直ぐに迷います。樵たちや猟師たちの人間の喧騒のように、あるいは悪魔払いの儀式である森の祭のように、仲間たちと一緒にないと森に入るのが好きではありません。さもないと人は森を通り過ぎるだけです。人は森から逃げます。その様な認識を持ちます。この逃亡者は、既に立ち止まる人間の中にもおります。いずれにせよ彼は良く調べますし、その視線は見ているものの彼方に焦点を合わせます。庭師たちは、質問と答えを良く調整する術を知っています。だがその上更に、庭園は都市にあり政治的です。人は絶えず枝を払い、その視野を広げます。それは人が森から抜け出て、遊戯のように息吹を取り戻し増大させます。森は少しも庭園ではありません。小さな森は、そのあり方として大きな庭園よりも大きいのです。人は何時も庭園から抜け出ます。一步ずつ抜け出ます。何時も森の中に這入ります。

誰も森の中で生活しません。動物たちも、身を隠すためにしか森の中におりませんし、追われなければ何時も森の端にあります。人間は森で生活することが出来ません。単に、桁になる材木と薪を手に入れるだけです。森の中の生活とは虚構です。森の住人は追われた人です。でも人は、森林が砂漠と同じ位に住むに適さないとは決して考えません。又、植物の氾濫によって自然に住むに適さないと考えることも、まず一度もありません。開墾するのはそれ故に、自然との戦いであり、森は人間を押し返します。ですから生き物は、雌鹿にしる猟師にしる、突然に姿を見せるだけです。更に、葉や幹のスクリーンに動きを見せるものは、全てが幻です。一言も言わないものの表面に立ち止まって、夢ではないかと訝ります。経験は全てが思い出です。これは瞬間の物語でしかありません。現実の事物は、習性によって私たちをもものとも思いません。注意することは出来ても、点検を行うことが出来ません。点検は私たちの知識の全てです。それ故に、森の恐怖は生理学的なものです。ミュージズたちの神聖な森は、庭園でしかありません。神聖なものは、尊敬や恐れよりも、まさに私たちには身近なものです。神聖なものは、決して対象を持ちませんし、それとも最早対象を持たないのです。神聖なものは、人が見るものと期待するものとの間

の対照です。奇跡とは、樹木は樹木でしかないことであり、森は森でしかないことです。人間の姿をした神々以前には、姿が見えない不在でしかなかった神々がいた、と良く言われています。それは植物が少しも人間ではないからです。植物の姿は人間を否定します。葉の形を何かに間違えたり、垣間見えた幹でしかないのに黒い瞳に間違えたり、あるいは顔や腕に似ている節くれ立った枝を間違えて見たりして、人は時々間違えます。しかしこの種の幻は、只見る視線によって何の変化もなく消えます。既に、雌鹿が現れるどころではなく、もっと奇妙です。何故なら、そこには何も無く、そして何も無かったのは確実であるからです。人はそこに何も無かったことを繰り返し何回も確認します。この確認する方法は怖ろしい程で、何か他のもの、つまり絶対的な他のもの、絶対的な形の無いものを確認します。人はそれが何であるか分かりませんが、それは何時も姿を隠していて、樹木の背後に無いのですが、樹木の中にあるのです。いや、中ではありません。というのも樹木の中は繊維と樹液しかないからです。樹木の中も、その外側と同じ様に知られていて、少なくとも背後以上にはありません。穴を開け、切り、縦に割れば十分です。その表面は同じで、何時も私たちに嘲笑します。恐怖が小さくても大きくても、恐怖は私たちにあるのです。事物に投影される私たちの影に似ているようなものです。そして、それらの影が神話を一つ生んだのですが、私が思うにそれは政治的な崇拜によって、少なくとも真面目なものだったのです。最早長い間ずっと、子供たちでさえも怖がらせて来なかった神を、人は田園生活から取り戻していました。私たちの恐怖の影には全く透明な厚みがあり、輪郭がありません。それを動かすと見失って仕舞います。眼で見た立体感は、実際は全てが立体ではないのです。この様にして亡霊が、私たちに静かな森や穏やかで平和な畑の中で見詰めています。それは全く身近なことでははなく、私たちはそのことを良く知っています。そのことを知れば知る程、私たちはそのことを疑います。恐怖と一緒に生活したくない人間は短気になって、ついに樹木の節とか人を拒むあの石に働きかけるのは、その神を完成させるためです。その様なものが大いなる悪魔払いです。彫像の中で何ものかが死にますが、それが森の神です。その実体は不在と沈黙から出来ています。

或る女性は決して愚かではありませんでした。やらねばならない時には勇敢でしたし、その夜にガラス越しに外の闇を見詰めることをしなかった彼女は、そのことを言いました。「私は、私を恐がらせる何かを見るのが怖い」。この極めて自然な心の動きは、あらゆる神々を確かなものにして仕舞います。何故なら、もしも人が神聖な泉や魔法の樹木を避けるなら、もしも見詰めたりしないで逃げたり平伏したりするなら、噂に基づいて証言するしかないからです。しかしながらこの探究の拒絶は、取分けもし動かずにすっかり身を屈めて頭を下げていたなら、人は困惑する以上に落ち着いていると私は理解することとします。というのもそれは、私たちに想像するように仕向ける知覚能力でしかないからです。私たちがここで、素朴で無言のイメージを把握する祈りはそれ故に悪魔払いの儀式でもあり、そして人が思う以上に大変に力強いものです。もしも不動が思考を消滅させなかったなら、眠りは不可解で説明出来ないものになるでしょう。又、忘れられない規範に忠じている機械的な祈りは、人が自分に対して行う饒舌の物語を浴びることも言わなければなりません。そしてその上、生き生きした情熱は全てが対象の無い不安を排除します。吝嗇家たちは何も信じません。別の恐れと期待に忙しいのです。だがその上更に吝嗇とは、いわば都会的である政治的状況を前提にしています。一つの宗教はその他の宗教を消して

仕舞います。しかしながら祈る活動には、その中に拒絶する意味があり、信じる事が出来たり、見る事さえも出来たりするものに関して、大変な慎重さを各人に残します。田園の宗教の段階においては、人が信じる事の出来ないことは何もなく、一つの神が他の神を証明します。それは一時的に信じる一種の黙認であり、証拠を求めることはありません。神とは殆ど何時も、一つの神によって切迫したものです。あるいは一つの神による単純な可能性でさえあります。人は見るのが怖いから急いで信じるのである、と私は言いたいのです。人は決して神の小道を散歩しません。人は道を逸れます。それが恐らく神を信じる事の完成です。というのも、そこに人は平和を見出すからです。人はここで物語のあの寛大さに驚かされます。泥棒に財布を与えるように、ある意味で神を信じる事を直ぐに与えて仕舞いますが、それでもなお幸福なのです。その様な瞬間は眼に見えませんが、気に入った場所なのです。

かくして有益な夜は、眼に見えるものと見えないものを一度に覆います。ホメロスの表現によると、人間たちも神々も同時に眠ります。そして、もしも私が間違っていないなら、『イリアス』のあの美しい夜の遠征において、兵士たちは少しも神々を見ておりません。恐らく夜の危険が、余りに現実的であるからです。そして夜によって隠されるものは、日中に姿を見せるものと同じ種類のものなのです。想像力はそこでも知覚を前提にしています。孤独の他に夜も求められません。寧ろ反対に、夜は人間たちを集め、一種の村を作ります。人間たちは、光が消えても雌鶏のように直ぐに眠ることはありません。だが、あの覚醒者である太陽が、私たちの想像でさえある思考を着る光線という衣服を、日没の時に持ち去って行くのは、誰にとっても本当でない訳ではありません。私が四歳の時の小さな教室には、騒々しい子が閉じ込められる暗い穴倉がありました。その子供の叫び声が倍加すると思われるかもしれませんが、そうではありませんでした。殆ど直ぐに眠って仕舞いました。荒れ狂った馬を前にしても、真っ先にやるべきことで最も有効なのは、出来ることなら馬の頭を袋で被せることです。この様にして友だちと接触した昼間の疲労の後で、人間は眠りを待ち、そして期待します。彼の両眼はそれを穏やかなものと感じます。長くは待ちません。不眠とは全てが悪意であり、寧ろ悪魔的なものです。しかし、悪魔と神の対立が未だ確かになっていないのが、田園の宗教の特色です。競争相手や支配力のことを考えると、あなたは眠らないでしょう。しかし労働のことを考えると、あなたは眠ります。神々は屋外におります。神聖な森は収縮します。それはドアの背後にあり、ドアは閉じられます。そこから、あらゆる夜の魔術は屋外にあると私は思います。魔法使いたちの夜中の大騒ぎは山の彼方です。そこへ行かなければなりません。物語だけがこれらの空想を生き生きとさせる事が出来ます。夜の集いそのものが安心させます。そして、人は恐怖を抱く振りをしてそこで遊びます。そこに家庭の価値と人間の価値を認識します。

それ故に眠りよ来い、そして夢も来い。これらはそれでも、少しばかりの外部の光と朝のざわめきを必要としています。人間はそれ程夢を恐れませんが、恐らく夢に関する自分自身の思考しか恐れませんが、夢からの帰還とその重要性は、もう一つの宗教を持つようになります。それは人間の姿をした不死のものです。そこに事物の神秘は決して無く、異常なものが尋常の代役になるとは少しも感じられない、と私は言いたいのです。というのも、もしもそれらの夢をすっかり真に受けたとするなら、その時は一つの危険のようなものに目覚めるからです。死者たちや遠方の

旅人たちからの伝言の他に、夢からの贈り物には、如何なる象徴的で寓意的な意味もありません。寓意的であるとは現実的なのです。全ての詩がそのことを証明しています。その上、夢は殆ど全てが物語のものであり、物語そのものの中で、そして昼間の光の中で創られます。夢の年代があると言えるなら、それはお伽話の年代です。私たちは、そこでは同意して子供になります。さもないと目覚めは不可解なものになるでしょう。私たちは楽しんで遊ぶ儘です。夢の中には田園の神々は決しておりません。何故なら、そこでは注意力が決して目覚めませんが、騙されることもないからです。事物を調べたり探究したり決してしないことが、夢に相応しいのです。そこでは好奇心がありませんし、驚くこともありません。しかし夢に騙されるなら、それは神学的です。そこに神々の素材を見たいと思う人々は、余りに要求が多いのです。寧ろそれらは夢の素材になっているのです。そして、人が神を只描写出来るだけの、素朴な段階の一瞬であるここに私はいたいと思います。泉の水が、穴の中においては大変に暗く、手の中においては大変に明るいように、神聖の森も自然によるイマージュであり、透明であるから曖昧なのです。人はそこに、このことしか見出しません。（完）

第三章 季節

秩序は上方にあります。人間が両眼を見上げる時には、もっと男性的なもう一つの祈りになります。秩序は上方にありますし、星々や、月の満ち欠けや、太陽の揺れる動きの中にあります。秩序は、成長する麦の中、熟した収穫の中、メッセージを齎す花々の中の、ここにあります。紅葉する葉の中にもあります。何もかも欺きません。そしてその時に私たちが期待していることは、これから起きるのと違うことではありません。曙は太陽が昇って来るのを教えてくれますし、誰も他のことを求めません。太陽だけで十分です。昼間だけで十分です。花は、茎と別の素材ではありません。春は全く素晴らしいものです。春は何時来るのでしょうか。これらのアネモネの中に春はあります。そして、犁と鋤の後を追って行く種蒔きにもあります。太陽は、出したり引っ込めたりする魔術師ではありません。祈ることは働くことです。プラトンは昔の諺を引用します。「太陽が偽りであると誰が敢えて言うのでしょうか」。太陽を信じるとは、冬に耕して、八月に薪を割ることです。快活な宗教とは、労働と共に歩みます。ここに「お告げの祭日」があり、それが祭の全てです。私は今、如何なる神もない宗教を描きたいと思います。それは単に正確な自然を祝うだけですが、寧ろ自然と人間との和解であり、そして最も強い意味では、見分けることを祝うだけです。私はナイチンゲールと郭公を見分けました。燕と鶉も見分けました。それらの表徴を見分けました。私は出来事を待ち、それを表し、名を与えます。その背後には何もありません。

私は、私たちの太陽の祭を描いて、未開人がそれを如何に考えるのかを想像するのは、楽しいことです。何ということでしょうか。私たちはアイリスの葉で、大地の上に太陽を描きます。パンのイマージュを持ち回ります。薔薇の花を撒き散らします。未開人は別のことを求めます。私たち自身も又同じかもしれませぬ。だが、祭をあるが儘に帰するようにしなければなりません。その時は、全てが現実的である詩がその中で最も美しいように、より一層大きく美しいものになります。如何なる観念も無く、私たちは薔薇を撒き散らします。薔薇は、風で花びらを撒き散らすということです。春を祝う素朴な民衆が、彼らの喜び以外のものを祝うなど信じないようにしましょう。花々が開くように人々は歌います。他には何もありません。神を探してもいけません。この信仰は、自ら信仰そのものを祝うのです。

復活祭は、冬が過ぎると至る所で同じようにあります。余りに恵まれた人々が太陽をそんなにも祝うのか、私は怪しいと思います。この極めて道理ある崇拜は、彼らのものではありません。寧ろ彼らは、平々凡々として余りに安易な生活をしているのであり、取分け予測しがたい災難の犠牲にでもなれば、強く物神崇拜に帰して仕舞います。農民でない者が望むのです。私たちの祭の連鎖は、太陽のように進行します。復活祭は、明らかな数々の徴によって復活をお祝いします。クリスマスは、寒さと雪の中で、遙か遠くから予兆の星によってお祝いします。聖体の祝日は感謝です。これは幸福でしかなく、最も美しい感謝の言葉です。葡萄の収穫はもっと騒々しく、既に太陽の逃亡が感じられます。樽の中に喜びが入れられます。空しいことに人間の感情は、十一月の霧の中まで太陽や紅葉した葉に従わなければならない、そこでは死者たちの祭である万霊祭が正当な場所を見出します。ホメロスは、印欧の遊牧民キンメリアの霧の中を、死者たちを探し

に行きます。しかし私が推測するに、死者たちの祭は当初、身振りで行われたと思います。それは表徴の交換でしたし、突然の老化でした。今でもそうです。精神の祭は、精神によって上手く行くことが出来ません。背景となる世界や季節という幕がなければなりません。ケープタウンやオーストラリアのように、夏のクリスマスや秋の復活祭を祝うのでは、無宗教が始まって仕舞います。法令で発布されたような祭では、肉体は精神と違う音を出して仕舞います。異教全体は、キリスト教全体を支えなければなりません。しかし学者たちは都会的であり、ランプの下で仕事をします。そして上級の神々の中に太陽神話の痕跡のようなものを探す時でさえも、学者たちは新しい崇拜の中にも古い崇拜の思い出しか見ません。記憶は沢山のことが出来ません。しかし、太陽の力強さは何時も同じです。そして一年のうち夜は常に瞑想を生み、最初は一種の球のように丸くなりますが、それは慎重なのです。クリスマスには力が欠けていて、子供の神々のイマージュを呼び出します。しかし如何なる神もなく、そして春の欺瞞によって余りに早く自ら喜んだり、貯えを使い果たしたりするのも又真実です。それは謝肉祭であったり、顔を顰めた狂人の気を引く祭や、未来の無い祭であり、これに悔悛が素早く続きます。というのも寒さが戻って来るからです。それに不足する恐れも戻って来るからです。それは復活祭が始まるまでの断食をする四旬節ですが、しかしながらそこでは冬が死と復活との観念によって再び混合されます。これらの大きな活動は、私たちの喜びであり苦しみでもあります。神話は先ず動作でしかなく、それらによって私たちは身を丸めたり伸ばしたりするのです。貝殻や海星は潮汐を祝います。太陽は潮汐のように前進したり後退したりします。私たちも自分の貝殻を開けたり閉じたりするのです。その様なものが私たちの儀式の根底にあり、それに基づいて政治的多様さを大袈裟に話しに来るのです。そして、歴史から私たちを守るために、幼年時代が田園的になる前に先ず政治的であることや、人間の姿をした神々が各人の幼少期の周りで、新たな始まりになっていることを忘れるべきではありません。そうであってもなお、自然と人間のこの分離は尊重すべきであり、それはあらゆる人間において最初の労働によって行われます。都市とシーザーが、他の冠である鉄の冠を花の冠と組み合わせるのを止めることは決してありません。それは兜を被って、黄金時代の神々を蘇らせることなのです。お気付きのように田舎の宗教は、私たちの生活の律動であるあの偉大な反復の感情によって理性へ赴きます。しかし子供においては極めて強いあの身分的理性は、別の必然性つまり別の理性の後に来るのではないのですが、何時もある必然性の襲に従って、常にその理性を歪曲します。これは私たちの田舎の道の曲がり角での憲兵を具体的に示しています。

神々は、私たちが存在しているように構成されています。私たちが存在しているように様々な動物たちで構成されている、とも私は言おうと思います。説教家ボシュエの隠喩におけるのと同じに、私たちの大聖堂の装飾にも、子羊や牛や鷲が枝や花々に入り交じっているのを人は今でも見出します。恐らくイマージュが無ければ、宗教が最早全く宗教でなくなって仕舞うことで人は追い詰められます。もう少し進んで言うなら、太陽に照らされた存在にもう少し近付いたなら、私たちはイマージュの無い思想も又一个の思想であるかどうか自問します。その解答は生理学的なものであり、他のものではありません。

〈何を考えるのも大切であるが、如何にを良く考えよ〉。少なくとも生理学は、ダーウィンが見たように、生きた肉体を超えて広がっています。環境が私たちに創ります。太陽が私たちに創

ります。食料が私たちに創ります。仲間が私たちに創ります。有機体が全ての事物の形を描き出しているように、宗教が如何なるものであろうとも全ての状況と人間自身の肉体を、何回も自省した形として描き出しているのです。そして真実の内部があるとすれば、それがあるべきものとして皮に覆われているのを人は見出します。隠喩とは、敬虔に覆い隠すことしか行わず、そして生の儘で生きられないものを更に覆い隠すことしか行わないものです。かくして無謀なものである哲学は、探し求める精神を絶えず失い、その間に宗教は精神を救い出しながらも絶えず失っています。両者の間で生きなければなりません。

もしも季節や田園の祭に従って思考するならば、人は真実を思考するでしょう。もしも都市よりも前に田舎を思考するならば、人は正しく思考するでしょう。何故ならば、都市はそれ自体では食べて行けないからです。精神も又、それ自体では食べて行けません。寺院は一冊の本よりも思考すべきことを沢山与えます。寺院そのものが、密生した家々や人々の流れ以上に、畑や森の中にあつて最良の場所にあります。人間の姿は見えないが、足跡は一杯にあるような道こそが、巡礼者の本当の道です。この巡礼において現在でも私は、宗教と私たちの間にある人間の姿を未だ見捨てておりません。人間を信じる理由は沢山ありますし、信じない理由も沢山あります。春には信じる理由しかありません。それが生きることです。「昇る日の前では敬虔であれ」とジャン・クリフトフに優しい叔父が言いました。これは眼を覚ますことです。もう一度信じることです。ダーウィンの視線の前で生命が意味するのは、この世は正しいという判断です。祈ることはそれ故に、自らを真っ先に適応することです。あるいはこの上なく正確に言うならば、自らが適していると認めることです。夕食後の憂愁家であるスタンダールも確信して言っていることですが、人生は午前中に創られます。換言するならば、喜びを齎す出発によって創られます。夕べの歌は悲しみの色調です。そこでの祈りは精神でしかありません。世界は殆どその祈りを支えません。世界自体が消えるからです。それとは反対に朝の歌は、対象の上で跳ね返り、精神は精神自体の外へ身を投じます。行商人の足音が無ければ何もものも行われなんでしょうし、何もものも思考されなんでしょう。都市には曙がすっかり欠けていて、そして神々はそこでは悲しげです。（完）

第四章 動物

私が言ってきたことの全てを植物は私たちよりも良く知っています。植物は雪の下でも花を咲かせます。樹木はもっと多くの賢明さを示します。何故なら、待っているからです。希望と慎重さの典型は、冠を明示します。ある人々にとってそれは多産性であり、過度の表徴でもあります。他方、私たちにとってそれは知識よりも力が無いこと、信仰よりも富が無いことを意味する瘦せた花です。希望と慎重さというこれらの二つの表徴は重要なものです。前者は情熱を目覚めさせ、後者は精神を目覚めさせますが、それは私がアネモネや堇の穏やかな視線の中で先ず考察したいものです。同様に、私たちに春を告げる鶉や郭公やこうらい鶯やナイチンゲールなどの優雅な鳥たちの中でも、考察したいものです。鴨や鶴や燕は大空に彼らの表徴を書き表します。私たちの雌鶏たちは既に、寒さの中で卵を産みます。最高の巢は何時も私たちの巢に関する思考の前にあります。植物や動物のこの楽しげな世帯は、私たちには神のようです。つまり占い師のようです。従って鳥たちの飛行に未来を探そうとする考えも、人間と同じ位に古くからあるものです。それに加えて動物たちの働きや、ごく些細な動作からも分かる毎日の慎重さは、私たち人間のものよりもより一層大変に単純な別の英知の観念を導いています。それは後になって、私たちの英知の下部を明らかにしてくれるでしょう。以上が、遠くから見た動物たちです。

動物は見世物ではありません。動物は自分のために狩りをします。動物自身が他の動物の餌でもあります。動物の血液は、私たち人間の血液に似ています。これらの荒々しい関係が自然を不明瞭にしています。飼い馴らされて調教された動物においては、この関係がもっと強く理解出来ます。というのも、それは私たちと同類であり、そのことによって相違もはっきりと分かるからです。動物との友情を信じるのは、それが子供っぽいと同じように都会的です。この親密さにおいては全てが牧歌的ではありません。何故なら、人は牛を食べるからです。もしも牛が人間を信頼しているなら、牛は非常に間違っています。それは、そんなにも牛を信頼してはいけない理由です。角で一突きにされることさえあるからです。従って、動物を愛していることを表明していて、恐らく確かに実際に愛しているに違いない調教師たちにも、極めて素早い一種の残忍さが観察されます。力が支配し、そして決して遠いものでない、とアイスキュロス(1)に倣って言うのはこの時です。実際に極めて不作法になって恐怖の動きが動物に生じます。その様にして混乱した場所と一種のヴェールを双方の視線の間に介在させたのは、それと同じ親密さです。暴君は厳しくなることを決して止めません。それにしても動物の調教によって、政治の恐ろしい一面を説明する人間のこの奇妙な形成を、如何に分析すれば良いのでしょうか。農民は自分の怒りを利用しますし、騎手も同じです。立て続けに五回も地面に投げ出された人間は、馬がその人間を少しも扱わない如くにその馬を扱うことが出来るのです。何故なら、その馬はその人間を殺すかもしれないからです。でも、私は人間の奴隷のことを忘れていました。実際に奴隷は、家畜の特権に貢献しています。農民の宗教は、全てが上機嫌となる訳には行かないことが予想されます。

家畜はそれ故に不実の鏡のようなものです。人は家畜を恐れます。何故なら家畜は、私たちに恐れなければならないからです。人は家畜に仕えます。家畜を信じ、従い、殺し、そして食べます。この混淆は、思考を苛立たせていた人々のものです。そして、その思考が今でも落ち着か

ないでいることを私は理解しています。過ちや偽善の観念は、確かにそこから見出されます。でも、もしも調教したいなら、如何なる疑いもなく、高い段階での共感がなければなりません。そして調教師たちは全てが、黒い大きなマントと赤い帽子を被って前進するイギリス産の七面鳥を導く女性のように、出来る限り模倣します。この種の礼儀正しさは、毛皮や羽毛で着飾った衣服に変えて行きました。動物の言語の模倣も、更に良く行われて行きました。そこからある男が〈野牛〉と呼ばれたり、他の男が〈狼〉と呼ばれたり〈鸚鵡〉と呼ばれたりするようになりました。そして調教師の仕事は、全ての田園の仕事のように家庭で定められているから、少なくとも言語のように人は殆どトーテムの像や社会階級に従って、その様な肉を食べるのを禁止することを理解します。しかし、それらは田園の風習の些細な一片でしかありません。事実として動物たちは、至る所で神でした。政治が農業を支配した時、そしてもっと適切に言うなら、奴隷が政治を審判した時、〈神の人〉だけがこの崇拜を消し去ることが出来ました。人間と動物の分離は、宗教にとっての大きな出来事であり、今でも進展していますが、躊躇や復帰が無い訳ではないが、殆ど後悔も無いと言われていました。彫刻家たちの狼人間や、私たちの隠喩によるセイレン(2)は、既にそのことを証明しております。その言葉が取った意味においてもっと精緻なのがキマイラ(3)です。この広大な観念を人は使い尽くすことが出来ません。徐々に、そして慎重にそれに触れて行くことで十分です。これらの生来の自然な信仰は、猫に対する私たちの愛情のように、本性そのものによって一瞬毎に、取り戻されては撥ね付けられます。

田園の労働に従えば、野生のものと家畜のものとの間に断絶はありません。家族の住居や鶏小屋や家畜小屋にいるのと同じ動物が森に姿を現しますし、幻のように現れます。そして、私たちが眼に見えない存在を発見するのに適用します。私たちの最初の恐怖に対象を与えるのは、この動物です。それは親密さから神ですが、疎遠であっても神です。未開の狩人たちは素朴に、自然な抑制を表すだけの礼儀正しさによって、お気に入りの獲物を手に入れます。この戦いは戦争と同じで、儀式を持ちます。幾つもの群を殺戮したアイアス(4)は、感覚として罪深いです。宗教とは不可解なものに対する感情であると言われていています。それは大凡の処では真実です。しかし、実際の宗教は大凡の処では決して行動しません。大凡の処では決して思考しません。人間は、幹や岩壁を迂回するように矛盾を迂回し、何時も障害物を応用したり模倣したりして、常にそのより近い処にいます。陶工や彫刻家や司祭のこの動きは儀式であり、礼拝なのです。人間は、そこでは自分自身によって把握されており、一つ一つの動作が構成されているのです。その様なものが田園的不動の意味であり、思考することの拒絶です。従ってそれは雌牛の礼拝を理解する助けになりませんし、猿や象への祭壇も助けになりません。人間の肉体がここでは思考から身を守っているのです。動物の前では即興が効きませんし、最初の感情に身を委ねることも出来ません。それは馬の調教師よりも恐らく、牛の誘導者が良く経験していることです。この性質が私たちに不変の形を課しています。かくして彫刻家たちは、不変の形や真の形式を見出しました。彼らが彫像の中に人間の形を移し入れたのは容易ではありません。要するに私たちの思考は動物の形の周りを回っていて、決してそこに這入りたくないのです。ですから礼拝は、外的な形の前で停止します。そして行動は思想を規制するので、自然な成り行きで、秘密がその停止からやって来ます。

もっと本質的なことは、動物の中に精神を仮定することは決して許されないことです。という

のも、この思想には決して出口というものが無いからです。もしも子牛が母牛を愛しているとか、死を恐れているとか、少なくとも人間を理解していると人が敢えて信じていたなら、全ての秩序は直ぐにでも脅かされることでしょう。動物の眼は、ものを理解する眼ではありません。奴隷の眼も又、理解する眼ではありません。そして暴君は奴隷を見ることが好きではありません。但し、この場合は全く政治的なものであり、憎悪や恐怖や期待が容易に想像されます。その代わりに動物の前ではこれら全てが拒絶され、反対に入り込めない不浸透性の形を描いて完成させて仕舞います。ここでは五月蠅い思考に対しては、敬虔な心で武装します。そしてもう一度、田園の祈りが無頓着の怪物になります。人間が思考しないのを学ぶことは、動物への作業にあります。人間は横を向きます。そしてこの動きには狂信があります。動物が友であることは出来ず、敵であることさえ出来ません。このことについて語るのはもう止めましょう。他のことを語りましょう。あるいは考えないで語りましょう。指を唇に当てる人間は先ず彼が、自然に課している思考の沈黙であり、権利の拒絶です。この頑固さ、肩をすくめる動き、繰り返し行う労働、思考の停止は、宗教の全ての動作の中にあります。儀式とは、入り込めない一つの拒絶です。いずれにせよスフィンクスの形は、古代の神々を象徴的に表しているのです。（完）

- (1) アイスキュロス（前五二五頃～前四五六）は、古代ギリシアの三大悲劇詩人の一人で、「アガ멤ノン」「縛られたプロメテウス」などを表した。
- (2) セイレンは、ギリシア神話で、舟人を美声で惑わして遭難させたという、人魚の姿をした海の精。
- (3) キマイラは、ギリシア神話で、頭がライオン、胴が山羊、尾が竜でできた火を吐く怪物。
- (4) アイアスは、ギリシア神話で、トロイア戦争時のギリシア方の二人の英雄。

第五章 大いなる神秘

暴力は、平和な田園にも至る所にあります。雷、稲妻、嵐、急流は過度のもので、人間はこの極端な暴力を迂回します。それを恐れないことを学びます。自分自身の裡では恐れることを学びます。時々それはそれと戯れますが、それは残酷な遊戯です。宗教は恥辱や秘密に戻ることなく、その方向へ向きを変えることが出来なかつたと理解すべきです。全ての情熱の中であって、全ての情熱を罰する情熱のこの基本的な不鮮明さのことを、今は触れなければなりません。精神はまるで火刑台の上にいるように自らを犠牲にしています。犠牲とは、何に対しても用心するものです。それは儀式であり、震えている小枝です。私は地獄に降ります。大理石の神々が私を守ります。何故なら、精神はそこでは何も出来ないからです。

精神は、自尊心によって道に迷います。そして、自尊心とは何よりも先ず以て観想的な感情ではありません。それは苛立った衝動であり、手に負えない活動です。自己により増大して行く怒りですが、依存心であるというよりも寧ろ自惚れであり、過度により支配されたある一つの態度です。その様なものは暴君の情熱です。一人ひとりが暴君です。私はそれ故に、実体から自尊心を考えますが、それはまさに精神の最初の出現です。民衆の感情は、精神の全ては正しくないというものです。それ故に、ここでは精神が極端な不幸を探究して、その作品である一つの熱狂によって自らを慰めます。しかし、最も節度ある活動によって開始しなければなりません。

巨大な嵐によるにしろ、広大な砂漠によるにしろ、氷河や雪の鋭鋒によるにしろ、植物や動物の繁殖によるにしろ、興奮した人間集団の過度によるにしろ、自然の中には並外れたものがあります。それらの全ての状況において、人間は自分を小さく弱いものであると感じています。しかし人間は、自分の精神の全てによつてはね返り、新しい局面を齎します。勇敢に立ち向かい、思い切つて行かうための力を試みます。人間はこの力を限りなく見出します。死は克服されます。その様なものは崇高なる感情であり、過度のものは全てに崇高さがあります。思考する存在においては、陶酔が凡庸ではあり得ません。その様なものは狂気の種類のものであり、私たちに恐怖と非人間的なものの様相を齎します。私たちが望むのはより一層荒々しい鋭鋒であり、より一層高い波であり、より一層恐ろしい人気の無い処です。試みよ、宇宙よ、試みよ。この衝動が私たちに危険と、登山と、飛行と、戦争と、あらゆる種類の冒険を齎します。この種類の勇氣は確かに、人が思っている以上に低い処にあります。というのも自尊心は少なくとも、決して精神ではないからです。英雄は少なくとも沢山の嵐も、飼い馴らされない怪物を全て意識します。そして英雄は、プラトンが見たように何時も怒りを持ち、精神の大胆さを支える元にしています。それによって単に人間は、自分を王と思わずに、環境の力と同様に素晴らしい自然の力を人間自身で生み出しているのです。そして保持されたこの怒りの増大が、常により多くのものを約束しています。そこから英雄は、まさに自然と同様に不屈と永遠の存在を自分に感じています。

熱烈な踊りは平凡な事例ですが、それだけより一層注目すべきものであり、快樂へ荒れ狂うものの一例です。精神はこの時、純粹に破滅するために戯れます。そして、もしも人間が嘲笑されるタンタロス(1)の刑罰と言うよりも寧ろ、まさしく悪魔のようなこの舞踊を私が一つでも描きたいと思うなら、地獄に落ちることでしょう。踊り回る熱烈なこの舞踊は遙かに欲望を超えてい

ます。それは寧ろ、苦悩への挑戦です。そこからは自殺があり、そして沢山の登山家たちの偏執のように、多分平静な形態に基づいているが熱烈なものです。戦士の妄想にも同じ秩序のものであり、それ以上でも以下でもなく、尊敬に値するものです。それは何時も些細とは限りません。人はここで正義を、一種の残酷さに、あるいはあらゆる残酷さに従わせる必要があります。何故なら、ある人々は残酷さそのものを無しでは済ませないで、それらの打撃を与えるのと同じ様に受けてもいるからです。勿論、全ての人々は自らの力を憐憫に対しても試みますし、それは最も低く、最も強い段階では大なる恥辱なのです。というのも人は傷口を見て気が遠くなるからです。憐憫に対する勝利には恐るべきものがあります。それは一種の豊かさです。そこから人は何千人もの捕虜の喉を切った古代メキシコの地獄を理解しますし、少しは感じることに近づきます。その様なものは彼らには祭でした。それは生まれつきの浪費癖であり、太陽や火山に比肩したいのです。そして、それがまさしく弱さへの復讐ですが、強さでもあります。それは食べるために殺し、儀式も無く逃げる動物を遙かに超えています。私はここでは単に、目論み準備された人間の特性が現れる儘にして置くだけです。それらの犠牲は一つの余剰でしかなく、儀式ではないのです。そして神はそこでは外部のもので、私が今は自ら保持したいと思う段階では、神は内部のもので、そして、もしも良く考えるなら、それは既に精神です。

豊かさとは一つの過度です。春は一つの過度です。この瞬間は、陶酔がなければ決して進みません。陶酔そのものは自分に酔うことです。つまり運動と大胆さであり、過度の上の過度のもので、葡萄酒は、眠っているこれらの力を目覚めさせる一つの方法です。酒飲みには寛大さがあります。葡萄酒には寛大なものがあるとされています。しかし精神は、与えることがなければ受け取ることが好きではありません。従って飲む楽しみは、更にもっと多くの楽しみを持つことになる純粋な楽しみと比べて、些細なものです。私は更にもっと多くの楽しみに殆ど打ち勝つことを言っているのです。同業組合の昔の言葉においては、最も大胆な大酒飲みは〈崇高〉と呼ばれていました。これらの話しっぷりからは、微光が生まれます。ここでは既に儀式になっているのです。ここでは既に、酒の神バッカスになっているのです。しかし、バッカスを描くことは既に、自己から遠ざかることです。大なる神秘に人は決して神の名を付けませんし、名を付けることは出来ません。収穫の母であるケレスとは、あり得ない神です。

人間は自己から遠ざかることが出来ないし、動物や人間たちの力強い神を描くことも出来なかったと私は思います。エロスやアフロディテ(2)は礼儀正しいです。インド芸術は動物の形象を積み重ねたり組み合わせたりすることによって、同様に腕や脚の数を増やすことによって、より力強い何ものかを表しています。豊穰の神とは器官と同じです。諸々の高級な宗教も、容易にその神に勝てなかったのです。それは沈思黙考に還ることによって一種の狂信を示しています。大変容易に樹木も円柱もオベリスクも、混同するこの象徴を至る所に発見する考古学者においても同じです。この混同は、私たちの力の全てが私たちの全ての勝利にあるのは明白であるので、私たちの裡にもあります。恐らく人間の崇高さは、憐憫と同様に羞恥にも打ち勝つために発揮され、告白するのが最も困難である陶酔によってしかそこに達成しません。かくして人は全てのことを思い切って行うことになり、エレウシス(3)の神秘よりも私たちに馴染みがある安息日は、雄山羊の姿をした悪魔の表象により、一種の解放なのです。悪魔や魔法使いも隔離されて呪われた世界にいる、との振りを私たちはしているのです。それは一人ひとりが感じるように、

自己の過度の部分から政治的なものによって別れることであり、悪徳の如くその美德を捨てることなのです。しかし呪われるものは何もなく、プラトンという天才は、大空と大地を新たに混合する術を知っていました。そのことは私たちを全て再び試練にかけます。ソクラテスがアルキビアデス(4)に語ったのを人は時々忘れます。それは自己に語る方法です。

これらの妄想は田園的です。都市はこういう観念を与えないでしょう。バツカスの巫女たちや魔法使いたちは、巨大な自然とより一層近くで戦うためであるかの如く、畑や山に戻ってきます。そして消費し保存し伝播するこれらの激しい活動が、狂気や死とは違う別の薬を見出すのはまさにそこです。何故なら、人間はそこで労働や疲労によって自分だけの人生を絶えず手に入れるからです。そこでは戦いも淫乱も、突然に短く起こった後で消えて仕舞います。処女はヴィーナスの祭壇に花を捧げて顔を赤くします。血液の流れがそのことを十分に語っています。干し草は熟しています。牛は、柵の上に鼻を出して待っています。鶏も動き出します。狐も隙を窺っています。かくして豊穡が自らの波を和らげます。取分け私たちの穏やかな地方では、春は一つの意外な出来事でしかなく、黒い帽子を被った吝嗇が支配しています。〈期日〉の神が最も強いのです。(完)

(1) タンタロスは、ギリシア神話におけるゼウスの息子で、地獄に落ちて永劫の飢餓と渇きを受けた。

(2) エロスとアフロディテは、前者はギリシア神話における愛の神で、翼があり手に弓又は松明を持って表されることが多く、後者は同じく愛・美・豊穡の女神である。

(3) エレウシスは、アテネ西方の都市。古代には、大地と豊穡の女神デメテル信仰の中心であった。

(4) アルキビアデス(前四五〇頃～前四〇四頃)は、アテナイの将軍で、民主勢力の頭になり、ソクラテスの弟子であった。

第六章 儀式

〈人間〉は自分を抑えて我慢します。動物のように食べません。何故なら、その時は動物よりもっと悪いことになって仕舞うからです。人間は又、動物と同じようには決して殺しません。ジュピターや海の神ネプチューンへの牛の捧げ物は、最初に考えているうちは不条理です。何故ならジュピターは、神々の食べ物で生きているからです。それに又、人は幾らかの毛も焼いて、その動物を上手に食べて仕舞います。捧げ物は、神への奉納であるよりも一種の殺す方法です。定められているかの如く都合良く犠牲にされるのは、殺すことや、血と内蔵の海に陶醉しているからです。他の殺し家を殺す恐怖もあります。それ故にもっと良く考えると、食事の前のこの前奏曲、肉屋や台所に日付どおりに導き、そしてそれらを儀式風に行うことのこの自由権も、理性ある実践として反対に感嘆しなければなりません。そして、それは策略でしかないのですが、もしも政治的な神がこれらのことの証人であり首謀者であると想像出来るとしても、全てが策略という訳ではありません。それは反対の端まで、礼儀正しさを持って行くことです。そして礼儀正しさは、この困難な状況の中で、常に極めて良く飾られています。それ故に、若い雌牛たちの角は金色に輝き、細い帯紐が結ばれ、止めの一撃を加えるのが司祭とか首長であったりするのです。もしも、その一撃が見事に殺すのでないなら、不吉な前兆になります。力はこの罠に捉えられて、その一番近い処で文明化されます。それに比べれば私たちは、偽善によって残酷です。私たちは殺すのを見たくありません。私たちはそれを食べることで、全ての礼儀正しさを身に付けます。しかしながら、それは今でも同じことです。何故なら、牛肉の蒸し煮や鶏の焼肉を、もう一度殺すためであるかの如くナイフを握るのも相応しくないからです。肉を小さく切ることが宮殿の高級な作法であったのは、昔のことではありません。それも又、舞踊家の一つの動作になるのです。

村の踊りは恋愛の一つの儀式です。私はそこでの真剣さと動きの簡素さに驚嘆します。狂気と激怒が待ち伏せていると言われていています。そして、本当にそれらが待ち伏せています。農民はそれ程文明を信じていません。農民は、やり得ることで救いますし、それは文明を信じることよりも良いことなのです。深く頭を下げるお辞儀や前進や後退、そして特に一人ひとりが全員と繋がっているあのゆったりとしたファランドールの踊り(1)は、乱痴気騒ぎそのものの否定でさえあります。だがその上更に、バックス神の祭尼たちがオルフェウスを殺したということは語られないのでしょうか。人間が舞踊や礼拝の唯一の主宰者であることを、人が探究のための仮説として十分に受け入れたいとするや否や、それらの神話は大変に豊かで明白な意味を持つことになります。それは自己に対する戦いを決して止めなかったことです。きちんとした一直線やコンパスの円は、現実の哲学の大勝利です。舞踊も又そうです。音楽が無ければ、少なくとも舞踊というものにおいては、激しさには何時も用心して、最初は足音ばかりが強調されるだけです。というのも足音も又、腹立たしいからです。歌声は叫び声を規制します。つまり叫び声も、口論しているのを見れば分かるように、それ自身で激しさへ向かって行くからです。

見世物も一つの儀式です。そして、余りに抽象的な哲学者たちは屢々驚嘆するのですが、人は自分自身の中で更に、巧みさや憐憫や恐怖そして嫌悪によっても興奮し楽しむのです。人はそれ

らを感じて楽しめます。何故なら、それらに勝つのが楽しいからです。そして更に群衆の中で、これらの感情が嵐のように大きくなる人間たちの雑踏の中で、勝つのが楽しいのです。しかし群衆は不動で沈黙しており、自分自身を見ているように整然としています。その上更に、古代人たちは用心に用心を重ねて、鎖に繋がれたプロメテウスと座っている観客の間に、他に構成された踊る群衆を再び介在させましたが、どうすれば人間の不幸と神々の怒りを熟考するに相応しいのかを大群衆に教わったのです。演劇は宗教的なものです。そうでなければ極めて無宗教の喜劇であり、人間たちの大変に生真面目な愚かさを見せる見世物それ自体によって、人間たちを解放します。何故なら、笑いは全ての激怒から武装解除しますし、快樂を好むことから解除します。そして最も古い経験からも、笑いは健康的であると何時も考えて来ました。それは人間たちが胸や腹の中にある神々に、まさしく勝利することなのです。それは思考する動物を解放することです。精神はこれ以上のことは出来ません。そして多分、それで十分です。

詩や散文や美しい言語は、儀式的なものです。それらの生き生きとした創作から屢々隠語を生むように、殆ど新しいものは何も獲得していないことに人は時としてびっくりします。人間であることを忘れれば、即興が容易に罵詈雑言の無礼な形式であることに気付けば十分です。それに反して祈りは、庭園のように人がそこに安らぎを見出すことで、解放します。人は穏やかさには決して飽きません。穏やかさは急速に失われるものでもあるからです。儀式に関する動作も決して活発ではありませんし、唐突なものでもありません。その上、活発なものや唐突なものは、殆ど全てが無礼で失礼です。そして、馬に触れる前には話しかけなければならないように、人間に対してもなお一層それは明白です。遙かに最も疑い深い動物である人間には尚更、一層良く話しかけなければなりません。

全ての信望ある作品には、そしてヴォルテールの小説にさえも、祈禱的なものがあります。今後は祈禱の動作を観察して下さい。そこには暴力的なものは何もありません。例えば挙げた腕の中のように、常に崇高な信頼を表しているその動きを人は遠くからでも見抜きます。

儀式とは、如何なるものであっても、労働の有益及び情熱に対して、もっと隠されたもう一つの有益に起因しています。その中には存在や構造が含まれますが、全体的には健全です。儀式は藁葺きの家と同様に、偶然の危険が少ないのです。古代ローマの詩人ホラティウスは、泉に子山羊の血を約束します。精神は神聖を汚されたこの水を前にして、先ず狂ったように夢想します。しかし、その道は何処へも行き着きません。先ず第一に人間嫌いを鎮めなければなりません。その時に観念が現れますが、それは血清が水分を濾過する方法の一つであることです。例えば不条理な迷信のように、人は家畜小屋の小さな窓に張られている蜘蛛の巣に対して敬意を払うように私に示しました。その解釈は、眼前の引っ掛かっている蠅たちの死骸にあります。偶然があなたを助けます。しかしそれに応じる準備もして下さい。遠い昔のことではないのですが、私の視線には感動的な様子で、更に本当に最も美しいものを儀式が与えてくれました。私は、最早野から野へ散歩することしか出来ない年老いた老人を見つけた時、膝を地面に付けてじっと動かずにいたのを見ました。老人は祈っていたのだと思いました。しかし、私がそのことを教えた女性の農民は、私に単に言うだけで、「この辺では、あんな風にして休むんです」。その後、私は何度もこの姿勢に気付きましたが、取分け春や秋に相応しく、年齢的にも相応しく、思想的にも相応しいものでした。でもそこで、この老人が少しも祈っていなかったと私は言いたくありません

。まさしくその反対で、祈っていたのです。（完）

（1）ファランドール踊りは、手を取り合って列になって踊るプロヴァンス地方の民俗舞踊。

第七章 神託

自然は絶えず告げています。木々、花々、鳥たち、蟻たちは全てが私たちに助言しています。都会の人間は、雲や煙を観察します。そして或る夫人は、カナリヤの籠を見て、雨を言い当てました。というのもカナリヤたちは時々、水を撒き散らすからです。それは雨が降る目印であるからです。この極めて単純な例においても、想像力は分別を失うことしか出来ませんし、それらの目印は類似していて、魔法の力があります。これらのカナリヤたちは、そのことを疑いもせずには動作で語っています。実際に一定の水位をもった鳥たちの水飲み場は、大変に感度の良い晴雨計であり、気圧が低下すると水位も下がり雨になるのです。かくして人は真実を言うことが出来ますが、自己自身が虚偽の中にもあり得ます。それは少しも欺かない経験であっても、常に欺くものであることにもう一度気付く良い機会です。デカルトは、最後には経験を信頼すべきものであっても、少しも信頼する必要がないことを発見しました。しかしデカルト自身には難しい征服です。それは既に一つの神託です。まるでドドナ(1)の櫛の木へ行くように、多くの人々はデカルトの家へ行くのでしょう。いずれにせよ神託はあなたに有効であるものに値するのでしょうし、アポロンの神殿があったデルフォイの壁が「汝自身を知れ」と言っていたのでした。

都市の精神が、神託をすっかり管理していたことは疑う余地がありません。神聖な鶏たちも役人扱いしていました。それ故にキケロ(2)は敢えてそれを嘲笑したのです。常に田園の宗教は、都会に来ると死にました。この動きは海のように永遠です。私はここでは歴史と見做しませんし、秩序とは単に木の根のようなものです。もしも都会が田舎によってしか生きられないとするなら、田園の生活も都会が無ければ何も理解可能になることが決して無かったのは本当です。何故なら、警察は都会のものであるからです。それ故に、神託の神学が何時もありました。しかし、神託の魂は田畑に残されて彷徨っている儘です。神託が生命を取り戻すのはその時です。鶏がひよこたちに呼びかけていると、人が大空に鷹を探すようになるのもその時です。木から木へ移るカケスの叫び声が、眼に見えない狩人を一步一步追いかけて行けるのも森の中です。兎が道を横切れば、人は立ち止まり、躊躇し、計画を変えて、恐らく別の武器を取りに戻るのを必要とするのもその時です。というのも、それらは追跡すること、つまり狩りを行うことは、もっと危険な動物がいることを意味しているからです。真の農民は神託によって動き回ります。彼は目印の周りを回ります。幾つもの目印を組み合わせます。それらの目印に従って彼の行動を屈折させます。その解釈には術策が溢れていて、意志がそこに通路を見出します。疑問はその儘です。敢行することが許された儘です。反対に都会人は目印を絶対的なものとして受け取るでしょう。何故なら、目印から事物を繋ぐ糸を見失ったからです。従って都会人は、決定出来なくなって絶望することによってしか目印を信じません。都会人は貨幣を空中に投げ出します。そして、シーザーの肖像が相応に決定を下すのです。

カエサルのが法令が絶対的に金曜日や日曜日を決定するように、鳥たちの飛翔もついに絶対的に物事を決定して仕舞います。しかし、神託の精神はもっと柔軟で、事物と同じ様に襞を持っています。遠くのもの、不確かなもの、危険なものに対しては、自分を抑えて置くのがより一層賢明であるのは本当であり続けます。お分かりのように成人した男の規範は、幼年時代の迷信を余り

明らかにしません。それというのも、それらの全てに対して許されているか禁止されているかであるからです。強い精神においてさえも、恐れが神託に対して働きかけるのは別です。というのも人が無視した神託への思考だけが、矢を少し外れさせるからです。神託はそれとは逆に働くために常にそうならないのですが、少なくとも神託も一つの思考であるからです。或る農民が、父親と同じ場所で熊手によって死ぬだろうと予言されました。もしもこの考えがその場所に彼を来させるなら、そして危険な均衡の中にいるなら、串刺しにされたも同然です。何故なら、夜の物語は他の法則で不可思議なものを齎すからです。人は常に自分が欲している以上に、そして常に信じていないと思う以上に、常に表象を信じているからです。人は不意に襲って来る神託を余り愛していません。神託を探しに行く方が好きです。自ら欲している時しか寺院へ行きません。人は出来ることなら、そこに全ての恐怖を隠します。誰も寺院に這入ることが出来ないと言うことは驚くべき単純さであり、余りに学問的です。青年は供物を入口に置いて立ち去ります。彼は何もお願いしません。この動きは驚嘆すべきです。何故なら、それは幸福である人の動きであるからです。

もう一度、森の放蕩者たち、群の指導者たち、移民たち、流浪の民たちの後を追って付いて行きましょう。一羽の鳥、鳥の群、走る動物が単に意味する処のものでなく、殺したばかりの動物の胃でさえも注意に値します。人は胃から、この新しい土地で食用になる穀物や果物を見て取ることが出来ます。人は胃から、牧場が遠くなく、恐らく泉も遠くない証拠を見出します。その上、良くお分かりのように、動物を小さく切って解体するには十分な準備と注意力が必要です。もしも胆嚢を裂いたなら、肉は苦くなります。観察して先ず尊重するというこのやり方は、自然と供物に結び付きます。しかし私は又、もっと野蛮な感情のようなものをそこに見抜きます。それは強い共感が齎すものです。何故なら傷は、取分け戦争による傷は、これも又神託を齎すからです。血を流している臓腑と、許しもなく恐怖や勇気を告げている自分の傷付いた部位との類似は、この臓腑という書物がそれ自体で悲劇を生んで仕舞います。恐らく人はこの時、大変に恐ろしいまでに勇気とか逃亡を告げてくれる自分自身の予感を、もっと生き生きと感じます。人間は、人間自身にとっての恐ろしい神託です。何故なら最初の表象は、人がそこから受け取る恐怖とか希望によって増大させて仕舞うしかないからです。アイアス(3)は勇敢で勝者になることを既に、自分の四肢の動きから感じています。彼は言います、「神が私を押しているのを私は感じている」。この神に名が与えられます。私たちは、余りに分不相応の段階を超える危険を負います。

人間は、人間の肉体からもっと素朴に、つまりもっと昔から神託を引き出しました。単に、人間の供物におけるばかりでなく、囚人に課せられた儀式的な責苦においても引き出しましたが、そこからは尋問の責苦、つまり取り調べであり、昨今まであったものであり、都会的で法律的でさえある責苦を齎しました。如何なる場合でも人は、肉体がびくっと動くことにも口が話すのを望まず、そして多分話すことも出来ない秘密を把握出来ると思ったのでしょうか。この時、人は無意識を当てにします。そして、苦痛の表徴よりも意志的なものはないのでしょうか。情熱的な好奇心は又、脅威を終える大変自然な動きとは別のもので、復讐心がそこでは全てではなく、体刑にはまさに一つのこと以上の意味があります。

無意志は、無邪気な人や白痴や癲癩患者にも認められるものです。彼らの動きは無意識である

と言われましたが、この言葉の間違いは消えて仕舞うでしょう。実は、意識には意志的なものしかなく、思想は意志的なものでしかありません。そして、これらの管理させていない肉体の神託のような活動は、木々や泉のように純粋な自然でしかなく、鶴や野兔と同じです。無邪気な人々は木の葉のように動き、言葉による騒音を生み出し、まさに理解しようとしている動きを生み出します。そこから偶然の表徴への注意と驚嘆が、更に人間的な形により、常に種の保存に結び付きますが、そのことは何らかの良い結果を齎します。この状態は、少しも子供のものではありません。子供は大変良く保護されていて、極めて政治的です。ピュティア(4)には多くの取巻きがありましたけれども、政治的なものは少しもありませんでした。そしてピュティアには自然へ全てを委ねた身体、あるいは恐らく何らかの薬学的処方により自然に戻った身体しかありません。更に喜劇的部分を別にするなら、それは狂人や癡癲を起こした全ての人々の中にもあるものです。私は踊り回る回教の僧たちを言うことに戻りますが、しかるべき相応の処で述べたことです。そして精神錯乱した熱狂のうちに終わるこれらの狂信的な喜劇は、多くの情熱の全てを明らかにしています。ピュティアはそれ故に、狂気を生む狂気です。それを人が観察するのは、殆どが鳥たちに行うのと同じで、幾らかは心の底で行うのと同じでもあります。というのも、ここには信じさせようとする一つの共感が働くからです。神託そのものに関して、常に不可解で、多分喜劇によって曖昧です。その中で働き管理する人間は、全ての信仰が行うように、人が十分に決して理解しない術策によって出来ることを行います。ティベリウスは占星術師を罰しましたし、占星術師はそのやり口を大変良く分かっていました。不吉な知らせを齎す者を罰するというこの動きは、何でも出来る暴君には醜悪な動きです。しかし、それは如何なる人間にも自然な動きであり、ここでは実際の通知者の絶望に対する一種の防御なのです。要するに人間は、他の危険から逃れるように神託からも逃れるのです。屢々、迷信がその企てを包み隠します。迷信は常にその全てと折れ合います。以上のことから野心ある者は不可解であり、おべっか使いは軽蔑されます。(完)

(1) ドドナは、エペイロス山中にあるギリシア最古のゼウスの神託所があり、櫟の葉擦れの音から神意が示された。

(2) キケロ(前一〇六～前四三)は、古代ローマの政治家・作家・雄弁家で、三頭政治を批判し、共和政を擁護した。

(3) アイアスは、トロイア戦争の時のギリシア方の二人の英雄。

(4) ピュティアは、古代ギリシアのデルフォイで、アポロンの神託を告げた巫女。

第八章 魔法使い

魔法使いは政治的です。私は魔法使いを決して全ての巫女と見ませんし、宗教的にも見ません。魔法使いは自分自身を信じるだけであり、常軌を逸したその喜劇的側面が、彼自身にとっての悲劇役者であるその種の精神を救っていることにもなります。魔法使いは買収されますが、巫女は買収されません。従って信頼は巫女へ行くのを人は理解します。ところが不信は魔法使いについて回ります。魔法使いは愛されません。その眼は監視しています。この眼の中には、喜劇役者の眼と同様に、観察者がいるのです。しかしながらこの眼は、把握していなくても多くのことを告げています。というのもこの思索家は何時も一目置かれますが、結果しか斟酌しないからです。真の原因には少しも気かけません。ある面で魔法使いはシニスムになるまで疑い深く実証的ですが、軽々しく信じるのもそこからなのです。そして魔法使いを欺くには、統治するという情熱です。というのも人間たちは、彼らが口に出して言ったり知っていたりしても、役に立つことさえない数々の理由から、屢々賛成して仕舞うからです。ところで魔法使いはこの二重の喜劇に気づき、悪魔的な皮肉を生みます。ファウストはその様なものであり、詩人もそうです。何故なら両者とも、全てが余りに上手に事が運ぶからです。

私は、この難解な肖像を余りに前へ押し出しましたが、それは人間のもう一つの段階や、田園よりも都会的な宗教を告げているからです。極めて慎重な人々であつても魔法使いどもが沢山いるこの大変に文明的な世界において、私は魔法使いを仕留めては屢々喜んで来ましたが。それは全てを言うことです。従って、魔法使いにとっては全く少しも気に入らないことである、と私は打ち明けましょうか。しかしながら引き返して、仕留めていない田園の魔法使いを発見しなければなりません。大きなマントを身に付けた人間に付いて行くあの羊たちは、何というお供でしょう。その人は羊たちの神なのです。その人は羊たちを慰めますし、癒します。その人だけが、屠殺場まで羊たちを導く術を知っています。この守護者がいなければ、羊たちはもっと早く死ぬでしょう。魔法使いと見做されない羊飼いは殆どおりません。そして、田園の魔法使いは最初に動物たちの調教師でしたし、その忍耐は知られることなく、突然にびっくりする結果を見せるのであると私は思います。全ての動物は調教が可能です。しかし、ルクレティウス(1)も見たように、調教した動物を何時も労働者と一緒には出来ません。蛇使いもライオン使いも、常に私たちの仕事の枠外に置かれます。動物たちに取り巻かれて登場する私たちのお伽話の魔法使いたちは、全てが殆ど危険です。それが私に推測させることは、魔法使いの術は主として動物的自然や、恐らく植物的自然にも何時も働きかけていたということです。それは常に忍耐と、蓄積された方法と、大変に正確な記憶によるものであつて、如何なる真の科学もありません。天文学の多くが占星術師たちに負ったり、化学が錬金術師たちに負うのは、如何ともし難いのです。というのも、これらの雨乞い師たちは、観測したり、測定したり、時間や時期を計算したり、取分け秘密の古文書の中に注目すべき事実を保存したりするようになるからです。そこから彼らは又、他の数々の術策のうちで数字や図形や言葉を使用するようにもなったのです。しかしながら、この魔法使いの本には心底愚かなものが残されています。ここには自分でも信じられない以上に恐れる、常識を遙かに超える軽信も残されています。

肉体に魂があるように、昔の神々が常に混じり合っている最も高級な宗教は、多くの魔法使いの男や女たちを焼き殺しました。しかし、この復讐の動きはより一層遠くからやって来るか、寧ろ最も目立たない源泉からやって来るのです。一般的な考え方には、魔法使いたちは悪のためにしか行動しないという大変に根深い観念が何時もありました。そして、その様なものが余り良く知らずに多くのことをなし得る人々の運命です。多分、人は魔法使いたちを恐れたために、殊の外、魔法使いたちをすり減らせたと言わなければなりません。従って魔法使いたちに対しては決して友愛はありませんし、魔法使いたちもそのことを知っています。人間の低級な部分にしか働きかけないのが、魔法使いたちの仕事です。そして軽蔑することが彼らの慰めです。恐らく、この哀れな仕事を選択したのは、決して彼らではありません。寧ろ、先ずは無意識の力により、亡命者や受刑者のようになったのです。しかし又、最初は至る所に魔法使いたちを探し出す子供時代の不正義も考慮に入れなければなりません。それは人間世界を善玉と悪玉に分割し、一方も他方も確かなものにして仕舞うのです。子供がスープを食べたり、ベッドへ眠りに行かせたりするために、極めて無害な小人とか、せむしとか、くず屋を利用しない家庭は決してありません。これは人間に対する大きな侮辱です。何故なら、人間は結局のところ案山子の役を演じているからです。そして、そこには一種の悪魔的友愛があります。それはまるで、その犬が噛むぞ噛むぞと言っている、一匹の犬を恐がるようなものです。一匹の犬であっても、これでは善良な犬になろうと与する力が湧きません。というのも、慎重さと防御の表徴が送り返されて、鏡を鏡で映す遊びのように、何回も繰り返されて模倣されるからです。そして、恐怖を与えているのを観察する眼が、大変な恐怖を与えているのです。この様なものは現実として、常に認められるものではないけれども、如何なる処でも酷く恐れられている有害な悪い眼の不吉な輝きです。これが収穫物を枯らし、雌牛を死なせ、子供たちにも不幸を齎すのが容易に推測出来ます。人が、この様なことが出来ると信じているのを知るとか、感づいている者においても、その結果を考えてみてください。魔法使いは自分で望まないとしても、常に魔法使いです。呪いやまじないは、この恐ろしい循環によって十分に説明されますが、屢々魔法使いたちはそんなにも深く描きませんでした。人は魔法使いたちを憎み、懇願し、報い、呪い、焼き殺しますが、全てが本性から出て来るのです。想像力による悪は、全て本性から出て来ます。お分かりのように宗教的情熱の沢山の源泉を解明することは不可欠です。教会が魔法使いたちを創り出したと考えるのは、不条理に違いありません。全ての低級な神々と同じように教会は魔法使いたちを発見し、拒絶し、地獄へ落としました。人は時々、地獄に憤慨しますが、それはまるで司祭たちの発明であったかの如くです。しかし、地獄も本性から出て来るのです。私はこの考えに従おうとします。確かにそれは、その広大さと深遠さによって私から逃れて仕舞うでしょう。しかしながら、この考えに従おうとしなければなりません。魔法使いは、私たちが少なくともやっと希望を持つ時には、既に絶望しています。(完)

(1) ルクレティウス(前九八頃～前五五)は、古代ローマの哲学者・詩人。精神の平静を最高善とする古代ギリシアの哲学者エピクロス(前三四一～前二七〇)の思想を踏襲し、哲学詩「物の本性について」を著す。

第九章 尺度

畝溝自体で分割された不動産は日数とか、もっと適切に言うなら人数で計算されます。魔法使いは、麦の銹病を意地悪く増やすことが出来ます。しかし耕すには、牛がいなければ三日かかる畑を、一時間で耕すことは決して出来ません。嵐や早魃や狼やムナジロテン（イタチ科）や土竜のように災いを齎す全てのものにとって、魔法は余裕を残しています。しかし、耕作された畑には理性が広がっています。必要な種子は畝溝の数に比例して増えますし、取り入れられた甜菜も列の数に比例して増えます。耕作された二つの土地は、労働時間によるとか生産量によって、容易に比べられます。これらの関係は眼で見たり、両手で持ってみれば分かります。平面の大きさは、同等の列や距離を作る同じ耕作によって表されます。山積み数を数え、袋を数え、苗を数え、人間の働く日数を数えることが、仕事そのものに課せられます。そして、ある数が他の数に依存しているのを知ることが、申し分なく数を知ることでもあります。従って、小人は収穫毎に成熟して行きます。見積もることのこの喜びは、決して弱くなりません。測量士が農民を生んだのです。この技術は、交換や分配によって絶えず識別されます。そして測量士は、少しも魔法使いではありません。

労働の尺度は、長い間、物理学者に隠された儘でした。それは驚きですが、全てが慣習に依存されているように思われる都市の魔術に関する最初の観念を与えています。ある長さに働きかける力によって、労働を測定するのが適しているとその教授は言いました。畝溝を作って行く六頭の牛は、そのものを描いていました。二頭の牛が六頭と同じ労働を行う、とは誰も考えることは出来ません。又、二倍の長さの畝溝を作るのに、牛の頭数が同じなら二倍の労働に対応することはない、と一概に考えることも出来ません。この様な様々な労働の尺度には、重かったり軽かったりする土地、そして生産量を比べて肥沃であるかないかの土地を鑑定することもあり得ます。農民の良識はまさに名高いもので、決して偶然の所産ではありません。それは恐らく、幾何学と算術の関係が絶えずここに提示され呼び返されるものです。一つの農地は、ヘクタール、労働日数、牛の数、馬の数、人数に換算することが可能です。これらの全ての尺度は対応し合っていて、全体で変えることしか出来ません。牛の一つの群、連結具、給仕されたテーブルはそれ故に、理性ある光景です。恐らく、特別待遇とか幸運とかは余り考えられなかったでしょう。それらは都市の女王たちです。そうしてみると理性は田舎に生まれて、都市で喪失すると言えるかもしれません。もしも都市に他の規則があり、誠実な手仕事もあるとしても、それらに通暁する術を学ぶのは、銀行家や国王の処ではありません。

人間は道具を作る動物として定義されました。しかしそれは、実は正確ではありません。道具は思考の証人であり、力の計算者です。昔の王杖は一本の棒です。そして棒が、この同じ棒がそれ自身で規則になり、法律になります。昔の犁は、引っ張られて行く一本の棒でしかありません。畝溝は耕作において書かれます。全ての道具は数々の棒です。メートル尺も一本の棒です。梃子も棒です。そして、全ての機械の中心部である車輪は既に、回る道具としてあります。道具に関するこの分析はこの辺にして置きますが、それは大変に難しいことであり、私のこの主題は中断することになるでしょう。動物たちは、最も器用なものたちでも、彼らの力を事物へ委ねるこ

とは少しも考えませんでした。そしてそれは障害物であり手段にもなりますが、抵抗するものを利用することも考えなかったのは明白です。王杖のように道具には確かに政治的なものがありますし、人間による人間に対する信仰心があります。道具や武器は栄光ある遺産です。そしてそれは、昔からの形への愛着や、崇拜されている典型への模倣に何ら疑いを挟むこともありません。鎌を見ればお分かりのように、道具や武器は行為を規定するに至りました。それ故に道具においてさも迷信があります。しかしこの種の宗教は、家庭や都市における発展というものを見出します。そして、それはそれで研究するには良いと私は思いますが、森林特有の宗教とは直接的に反対のものです。従って道具は気まぐれの無い召使いであり、人はあらゆる方法で絶えず試み、体験し、研究して決して止めません。秤は、私たちの思考を規制する一本の棒です。これは事物と化した正義であり、厳格で断固とした女中です。それとは反対に私たちの思考は、もし言えるとするなら、それらの法則でもある期待外れの変わり易さから、勇気を奪い取ります。全ての田園の神々は消失した思考であり、人が形づくることが出来ない思考です。そして道具やその痕跡は反対に不動の思考です。全くの不変の形を信用するこの観念は、まさに宗教的観念そのものです。従って、非宗教的な宗教としての異教の観念は、宗教そのものから切っても切れませんし、大地の神々に対する都市の神々と精神の神との闘いは、決して止みませんでしたし、これからも止まないでしょう。彫像とかキリストの受難像のように、私たちに繰り返し呼び戻したり見出したりする事物は、一度しか出て来ないで語ることに出来ない幽霊と、直接的に対立します。虚偽の神々は何時もありましたし、これからもあるでしょう。そして多くの痕跡を与えられ、計測され、均衡を保っている寺院、大変に抵抗している寺院は、虚偽の神々が消えに来る境界です。それで人は神秘をそこに何時も求めますが、決して無いのです。人は自然の中で最も良く祈る、とジャン＝ジャック・ルソーは言いました。私は寧ろ、人はそこで祈り過ぎて仕舞う、と言いたいのです。働くことが祈ることである、と昔の諺はもっと上手いことを言っています。何故なら、悪魔祓いを求めないとするなら、祈ることとは何でしょうか。不信心から信心への関係は、聖人たちの誘惑が率直に表しているように、信心の秘めたものです。聖人の誘惑が寧ろ信じることへの誘惑であるのに対して、楽しむための誘惑は寧ろ賢者のものです。プロテウスは(1)、精神のこの敵の最良の名です。樹木、ライオン、透明な水などの殆どが激しい数々の変身は、嘗て失うしかなかった想像力の狂気を、大変正確に表しているからです。それ故に、悪魔が飛び越えられないファウストの敷居の上の幾何学的図形には、思考すべき何ものかがあります。そして、その棒が描く円は魔術的ですが、それは魔術の限界とその排除によるものであるのです。(完)

(1) プロテウスは、ギリシア神話で、海の老人でポセイドンの従者であり、予言の力があり、あらゆるものに変死が出来る。

第十章 大地と海

最初の都市は海辺にあったと考えざるを得ません。物の貯えは、常にそこに集中するという事です。海の幸は全く独りで生まれ育って、そのうちに元に戻ります。そこから希望が宿ります。この奇跡的な漁師は、少しも奇跡的でない奇跡の典型です。他方、釣り針とか鉤とか網とか舟とか櫂とか帆という道具の重要性が、そこでは働く者の理性を形づくらなければなりませんでしたが、それらは純粹に都会的です。というのも、畝溝は海上には決して残らないからです。それ故にこの種の生活においては、暴力的自然と人間の安全の対比が、より一層目立ったものになって来ます。征服的行為においては、危険は常に一瞬のものです。そして海上よりも遙かな内陸に、多くの奇跡が何時もあったことを私は数々の物語から考えます。私は単調です。そして浜辺を見れば分かるように、その力は規則的であり、眼に見える液体に変化しても、神秘性は全くありません。部分から全体を説明することに人が気付くのは、持ち上がり再び降下して均衡を保つ液体を前にしてです。この自然現象は、絶えずその内容を表しています。それ故に海は、激しい恐怖の場所と言うよりも、寧ろ危険な場所です。

船舶は政治の中心であり、政治の学校です。更に、水先案内人となった国家元首の昔の比喻は、改めて検討されなければなりません。というのも、実は船舶の政治は殆ど都市の政治に似ていないからです。しかし航海が、理性だけで行われるような幾つもの政治の規則を与えているのも本当です。海上での危険は明白であり、又その結果も素早いものです。これらの行為は容易に審判され、しかも討議する時間ありません。そこから、海上での能力は自由に認識されるようになります。最も優れた者が導きます。そして、リーダーの周りで力を合わせて実行することで、臆も濫用も暴君もありません。反乱は極めて容易であっても、その時は最早起きません。存在するだけで十分に働きかけます。常に波にもまれて一瞬毎に救済されるこの活動的な生活が、ある相当のやり方で精神を明らかにしないことなどあり得ません。これらの全ての事件が調和して人が推測することは、海洋の精神は大陸の精神よりも冷笑的で安定しているということです。要するに森や河から降りて来るような海の神々は、殆どいないということです。海の中を泳ぎながらユリシーズは、自分自身しか信じません。彼が河で祈るのは、河口においてです。この簡単な見方では十分ではありません。ネレイデス(1)、トリトン(2)そしてセイレン(3)の神々が、あの幽霊船と同じ大地の娘たちでないかどうかを知るためには、それらの神々の血筋を追わなければならないでしょう。でも、これらの論争に私は決して入りません。精神をぼんやりさせるのも、神々を考える一つの方法なのです。最も合理的な文明は、常に海辺にあったこと、そしてあらゆるやり方の海洋の労働、造船産業、交易、遠洋航海、『オデュッセイア』に見られるような強制された歓待、最も見識があり野心の無い人々による実際の支配、これらが最も野蛮な部分をもっていても精神までは支配されない人間たちを解放するのに多く貢献したこと、これらに気付いて頂ければ十分です。その代わりに男性と女性の区別が、海的生活においてまさにより一層はつきりと認められるこの関係に注意しなければなりません。そこでの男性は家庭から全く遠く離れた労働によって成り立っています。それは都会の法則が全て忘れられている状況において、物事を学びます。その時、ボールで遊ぶ男性の無頓着と、私が見たように時々棒で打って男性た

ちを仕事へ行かせる女性の生真面目さの大きな対比に私は気付きました。農民の女性は更に、男子と殆ど同じ仕事、同じ慎重さ、同じ心配、同じ祝祭、同じ祈りに参加します。結婚と家庭がそこでは自然に、より一層信心深くなって、窮屈に男性を縛り付けます。別な言い方をするなら、服従しているのであり、その上更に教養も高くないのです。（完）

- （1）ネレイデスは、ギリシア神話で、海神ネレウスの五十人の娘で、海の女神。
- （2）トリトンは、ギリシア神話で、半人半魚の姿で海馬に乗り、ホラ貝を鳴らして海を鎮める。
- （3）セイレンは、ギリシア神話で、上半身が女性、下半身が鳥又は魚の尾をしている海の怪物。

田園の神々には面貌がありません。それらは同じ事物そのものでしかなく、取り巻くものによって常に神になっているのです。一つの泉も、森や山によって神秘的です。樹木も風も一体化しています。この様にして最も親密な数々の事物は、何時も何か違った意味合いを与え、説明し難い反響を鳴らします。現代の都会人は、各部分の全体としての足跡しか対象と見倣さない、情動としての何かを再び見出します。そして牧神とか森の精とか水の精とか木の精たちという神話的装置は、隠喩の水準に押さえ込まれます。詩人は森陰や樹木や泉と違うものを求めません。そして詩人が、それらがあるが儘に良く知覚すればする程、自分たちの外観にないものとして感じます。又、神性は全てを真の姿に隠れて仕舞いますが、それはまるで詩の変化とか現代の文明が行き着いた絵画の変化が、沢山の方法で理解させてくれるようなものです。田園の驚異が、人間の姿となった方法で示されるや否や、叙事詩におけるキリストの驚異と同じように冷ややかになるのも同じ理由からです。この観念の中で確認しなければならないことは、森林の神は都会からの移入であり、家庭の神々の急激な増大であるということです。異教は屢々、オリンポスの宗教と混同されますが、全く田園的ではなく政治的です。ところで、これらの二次的な神々は、最早無害の神々でしかないのに、農民が花々や小麦や子羊や牛を供える実際の力や至上の自然を表すには大変に下手です。それ故に今日の詩人は、農民の感情の何ものかを純粹さの中で再発見するために、ホメロスの頃の祖先よりもより良い地位を占めていますが、その感情は泉そのものには子羊の血を与え、樹木そのものには花冠を与え、春そのものには神のいない復活祭を与えます。草から古代ケルト族のドルイド教の樹木まで、全ての形を持った貴重な形として再発見されたパンの神が、理解力や理性の息子である新しい神と見倣される必要はありません。汎神論は、根本的な間違いとして精神の宗教によって、常に告発されてきました。そして私は、この本の中で少しずつ説明したいと思いますが、最も緻密な神学者たちでも何時も逃れられない間違いが、実際に一つあるのです。それは彼らが、歴史の真実であるその構造の秩序に従って、神々の系列や神々の戦いに眼を通さなかったことに起因します。田園の宗教の最も恐ろしい数々の神秘によれば、汎神論はオリンポスのジュピターの時代には既に異端で、恐るべきものであったことが多分お分かりになるでしょう。これは最後には、山の下に埋葬された巨人たちを動かすことでした。これは都市の精神に反対する野生を蘇らせることであり、田舎の平和の本当の中心でした。

自然の宗教が保存されているにしても従属させられていることは、何よりも宗教的なものであるからです。それ故に自然の光景によって有名な神の証明は、精神の眼にとっては怪しからぬことなのです。何故なら、その証明は何よりも虚偽であるからです。田園の労働が容易で幸せなものであるというのは真実でないのと同様に、全てが正しく神的なものであるということも真実ではありません。この幻想は都会人のものです。農民は何らかの仕方で蛇を崇拜しますが、それでも農民は蛇を殺さない訳ではありません。牛も兎も角、食べなければなりません。自然は人間にお構いなしで厳しく、優しくありません。人間の裡において、それは更に最悪で、ジャンセニストが正しいということになります。ヴィーナスの供物はそれ自身において、イフィゲネイア(1)の犠牲に劣らず悲劇的です。又、この悲劇的という言葉は雄山羊というギリシア語から来ていま

すが、現代の劇の匂いまでを余りに強烈に表しているように私には思えます。それ故に魅力的で酔い心地にさせる汎神論は、そのものの水準に絶えず押し返して制限しなければなりません。汎神論は、腹部が胸部や頭部を養っているように、全ての上部を養っておりますが、それは腹部でしかありません。でも、人間は腹部だけではないのです。

それ故に、動物の視線の曖昧さが私たちに機会を思い起こさせるように、私たちがそれによっていたり反対したりしている、この母なる宗教を公平な釣合いに従って生き返らせるためには、全てが律動の装置であったり優美な歌であったりし過ぎるものではありません。私はここでデカルトの過剰に感嘆します。デカルトは決して詩人ではないのですが、動物と同じ魂の観念に抗う自分の道を頑として保有しています。この冷静な兵士は、困難な通路を乗り越えなければなりません。詩人とは、兄弟である樹木や姉妹である蛇に戻ることが出来ますし、これからも出来るでしょう。しかし、聖書の詩篇において合体されるこれら二つの偉大なイマージュは、常に二重の脅威が潜んでいます。更に、偉大な神話においても実証的なものがあって、常に理解するのに役立つものがあることを人は既に感受しています。これらの神話がその様なものであったのかどうか、そしてその様に話したのかどうか、それらの問題については如何なる疑いも無く、最早自問しないようになるでしょうし、既にそうなっています。しかし寧ろ、私たちの寓話の中でその様に表したり話したりしているのは大変に幸いであり、人は少なくともそれらを理解しようと専ら努めるでしょう。現代の詩人たちの隠喩は、低次の幾つもの力を目覚めさせると同時に自らに打ち克つという、それと同じ二重の意味を持っています。誰も、ヴァレリーの蛇がまさしく聖書の蛇であるか否かを自問しません。というのも、それは正確に聖書の蛇であるからです。しかし誰もが、その様な姿をしていたものを悪魔としか信じません。悪魔は今もそんな姿をしているからです。そして人はありの儘の蛇のことを考えれば考える程、もっと適切に、もっと大胆に人はありの儘の人間のことを考えるでしょうし、常に動物的夢想の中に再び落ちるのを望まなければ、最小の人間生活が必要とする慎重さのことを考えるでしょう。

心を感動させたり、恥をかかされたりするこれらの真実は、誘惑する蛇の伝説においては分かり易く明白です。しかしその時、それらの真実は実際の自然のような方法では決して私たちに触れて来るものでないから、まるでそれが私たちに係わることと理解していないが如く、全てが過ぎ去ります。しかし、真の蛇が自分のことや、その十分な固有性のことしか私たちに語らないのを考慮すると、私たちはそれが自分のことであり、精神は広大な絨毯の上の僅かな賭け金であると理解します。かくして隠喩は私たちの思考にそっくり沿って、真の障害を用心して目覚めさせます。抽象的な思索家は余りに容易に忘却します。というのも肯定や否定、そして最終的な矛盾も同じく重要性を持つ一種の障害ですが、単なる文法上のものに過ぎないからです。そして、その論理は単に詩人のイマージュを運んだり、警察の非常線のようにそれを取り囲んだりするだけに適しています。それは律動や歌と共に、イマージュの足跡を乗り越える手助けをするものであり、それを支えるためであるとも言いましょう。哲学は英知の中で、より一層遠くまで導きますが、人類をそこへ先導することはありません。そして私は、英知の世界でそれを良く理解したプラトンしか知りません。それ故に、この考察の最初の多くを、しかるべき場所に整理して置くために、ギュゲス(2)とかエル(3)の物語を何度でも読んで下さい。(下巻へ続く)

(1) イフィゲネイアは、ギリシア神話で、女神アルテミスの怒りを鎮めるため、父の命で人身御供になったが、女神が救う。

(2) ギュゲスは、プラトンの『国家論』第二巻に書かれている羊飼いである。その物語はは大地が裂け、その穴で見つけた黄金の指輪は、その玉受けを打つ側に向けるとギュゲスの姿は消え、外側に向けると見えるようになったという。

(3) エルは、プラトンの『国家論』第十巻に書かれている戦士で、パンピュリア族のアルメニオスの子である。エルは戦争で最期を遂げたが、十二日目に生き返り、その間にあの世で見たことを語ったという。それは大地に穴が二つ口を開けていて、魂たちが判決を受けて行く天の穴と地の穴であった。

神々（上）

<http://p.booklog.jp/book/99643>

著者：アラン（翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99643>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99643>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ